

愛知県東海市

松崎貝塚第2次発掘調査報告書

付載 塚森遺跡

1984

東海市教育委員会

序　　言

知多半島は、平城宮跡出土木簡にも記されておりますように、古くから塩を生産したところであります。

松崎貝塚（大田町）は、古代の製塩遺跡でありまして、ここでつくられた塩もまた都へ送られたことと思われます。

本書は、昭和51年夏・冬の2度にわかつて行われました発掘調査のうち、冬の調査の報告書であります。製塩土器をはじめ多量の出土遺物の整理と、人骨・石材・鐵塊等の鑑定を行い、ようやく本書を発刊するはこびとなりました。さきに刊行いたしました「松崎貝塚」と併せて、本書が今後の研究の一助となりますことを願ってやみません。

調査にあたり御尽力いただきました調査関係者並びに地元関係各位、さらに本書の刊行のため御助力を賜わりました関係各位に厚くお礼申し上げます。

なお、本書には、塚森遺跡（名和町）の発掘調査報告を付載いたしました。

昭和59年7月

東海市教育委員会

教育長　篠波善夫

例　　言

- 1 本書は、昭和51年12月26日から31日までの間に東海市教育委員会が発掘調査を実施した、愛知県東海市大田町松崎に所在する松崎貝塚（土器製塙遺跡）の第2次発掘調査報告書である。
併せて、昭和56年8月27日から11月7日の間に実働25日を要した東海市名和町塙森に所在する塙森遺跡の調査報告を収録した。
- 2 本調査は、東海市教育委員会が主体者となり、学術担当者として日本考古学協会員の杉崎章（主任）、磯部幸男、宮川芳照、山下勝年があたった。
- 3 発掘調査の参加者については、第2章に記したとおりである。
- 4 松崎貝塚から出土した人骨については、京都大学雲長類研究所の江原昭善教授の研究室へと分け、その鑑定結果を報告していただいた。
- 5 松崎貝塚から出土した鉄塊については、新日本製鐵株式会社名古屋製鐵所に分析を依頼し、中央研究本部名古屋技術研究部から分析結果をいただいた。
- 6 本書の編集及び図面の整理、製図遺物実測等は、杉崎章が監修し、立松彰が行った。執筆は、第7章を杉崎が、そのほかを立松が担当し、全体の校閲を杉崎が行った。
- 7 石材の同定は、伊藤新氏（阿久比町立南部小学校長）にお願いし、肉眼観察に依った。
- 8 写真図版中に付された番号は、実測図版の番号と一致する。
- 9 地図1の松崎貝塚周辺の製塙遺跡地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「名古屋南部」・「半田」の一部を複製したものである。
- 10 本書に関する資料は、すべて東海市立郷土資料館（〒476 東海市荒尾町蜂ヶ尻67番地）に保管されている。

目 次

第1章 遺跡の位置と周辺の製塙遺跡	1
第2章 調査の経過	2
第3章 遺構	4
第4章 遺物	11
第1節 人工遺物	11
1 土器類	11
(1) 土師器・須恵器・灰釉陶器	11
(2) 緑釉陶器	14
(3) 陶器系中世陶器(行基焼)	14
(4) 製塙土器	14
(5) 土鍋	16
2 鉄器および骨角器等	16
3 石器類	19
4 貨幣	19
第2節 自然遺物	20
1 壴類	20
2 獣骨類	20
3 人骨出土状況	20
第5章 松崎貝塚出土の人骨について	37
第6章 松崎貝塚出土鉄塊分析結果	39
第7章 松崎貝塚の調査を終えて	41
付載 塚森遺跡	
I はじめに	47
II 遺跡	47
III 遺物	48
1 人工遺物	48
2 自然遺物	57

挿 図 目 次

挿図 1	Ⅺ-1 遺構実測図	4
挿図 2	Ⅺ-1 遺構および出土遺物実測図	5
挿図 3	Ⅺ-2 遺構実測図	7
挿図 4	Ⅺ-3 遺構および出土遺物実測図	8
挿図 5	Ⅺ-1 およびⅪ-2 遺構出土遺物実測図	10
挿図 6	製塙土器拓影	14
挿図 7	永樂通宝拓影	19
挿図 8	松崎貝塚Ⅺ区北貝層出土鉄塊およびEDAX特性X線チャート	40
挿図 9	知多式製塙土器の変遷	42
挿図10	配美町青山貝塚	43
挿図11	塙森遺跡土層模式図	47
挿図12	塙森遺跡縄文土器拓影および土偶	48
挿図13	塙森遺跡須恵器の文字	54
挿図14	塙森遺跡B地点(北壁)土層図	58

表 目 次

表 1	松崎貝塚周辺の製塙遺跡	1
表 2	松崎貝塚各遺構規模等一覧	9
表 3	松崎貝塚土鍋一覧	17
表 4	松崎貝塚鉄器・骨角器一覧	18
表 5	松崎貝塚石器一覧	19
表 6	松崎貝塚Ⅺ区北および南貝層の貝類組成	20
表 7	松崎貝塚土器類一覧	21
表 8	松崎貝塚鉄塊の化学組成	39
表 9	塙森遺跡B地点破碎貝層の貝類組成	59

図 版 目 次

- 図版 1 松崎貝塚周辺の製塙遺跡
図版 2 松崎貝塚調査区域図
図版 3 松崎貝塚発掘調査区および遺構配置図
図版 4 松崎貝塚発掘区土壇断面図
図版 5 松崎貝塚11層出土遺物実測図 1
図版 6 松崎貝塚11層出土遺物実測図 2
図版 7 松崎貝塚Ⅲ区北貝層出土遺物実測図
図版 8 松崎貝塚Ⅲ区南貝層出土遺物およびⅣ区 6 層出土製塙土器実測図
図版 9 松崎貝塚Ⅲ区 4 層およびⅣ区 6 層出土遺物実測図
図版 10 松崎貝塚Ⅲ区 10 層出土遺物実測図 1
図版 11 松崎貝塚Ⅲ区 10 層出土遺物実測図 2
図版 12 松崎貝塚 10 層出土および各所採集品実測図
図版 13 松崎貝塚Ⅲ区 9 層出土遺物実測図
図版 14 松崎貝塚Ⅲ区 8 層出土遺物実測図
図版 15 松崎貝塚 3 層出土遺物および石器類実測図
図版 16 松崎貝塚 2 層出土遺物実測図
図版 17 松崎貝塚出土鉄器・骨角器実測図
図版 18 塚森遺跡地形図
図版 19 塚森遺跡出土弥生土器実測図
図版 20 塚森遺跡出土弥生土器・土師器実測図
図版 21 塚森遺跡出土土師器・土鍤・石器実測図
図版 22 塚森遺跡出土弥生土器・土師器・瓦拓影および釣針実測図
図版 23 塚森遺跡出土須恵器・灰釉陶器等実測図
図版 24 塚森遺跡出土製塙土器実測図および拓影
（写真図版）
図版 25 塚森遺跡出土製塙土器実測図および拓影
図版 26 松崎貝塚現況・Ⅲ区北壁土層状況
図版 27 松崎貝塚Ⅲ区南壁土層状況・Ⅳ-1 遺構断面
図版 28 松崎貝塚Ⅳ-2 遺構

- 図版29 松崎貝塚罐の口と鉄塊および遺物出土状態
- 図版30 松崎貝塚出土土師器および貨幣
- 図版31 松崎貝塚出土須恵器（高环等）
- 図版32 松崎貝塚出土須恵器（蓋・环）
- 図版33 松崎貝塚出土須恵器（蓋・环）
- 図版34 松崎貝塚出土須恵器（盤等）・灰釉陶器等
- 図版35 松崎貝塚出土製塙土器各類
- 図版36 松崎貝塚出土製塙土器各類台脚
- 図版37 松崎貝塚出土人骨下顎骨・石器
- 図版38 松崎貝塚出土鉄器および骨角器
- 図版39 松崎貝塚出土貝類・獸骨類
- 図版40 塚森遺跡出土網文土器・土偶・釣針
- 図版41 塚森遺跡出土獸骨類・弥生土器
- 図版42 塚森遺跡出土須恵器・灰釉陶器
- 図版43 塚森遺跡出土製塙土器（塚森式）
- 図版44 塚森遺跡出土石器・貝類

第1章 遺跡の位置と周辺の製塩遺跡

松崎貝塚は、愛知県（尾張国）東海市大田町松崎に所在する。この地域は、知多半島基部の伊勢湾に面する西海岸にあたり、半島内でも有数の面積をもつ海岸平地が広がっている。この海岸平地には、海岸線に沿って3条の砂堆列が横たわっており、内陸の海蝕崖寄りから海岸へ向って第1、第2および第3砂堆と分類することができる。本貝塚は、このうちの最も海岸寄りの第3砂堆列北端に立地する。

これらの砂堆列上には、縄文時代後期以後の遺跡が点在している。なかでも弥生時代の遺跡にみるべきものが多い。

製塩遺跡についてみてみると、この海岸平地に限ってみても、第3砂堆上に細別して10箇所の地点（表1参照）が知られている。これらの遺跡の多くは遺物散布地であり詳細の不明なものが多いものの、知多半島製塩土器4類を出土する遺跡が大半を占め、その出土量も多く、この時期に最も広範囲に土器製塩が行われたことを示している。

表1 松崎貝塚周辺の製塩遺跡（番号は図版1の遺跡番号と一致する。）

番号	遺跡名	所在地	出土製塩土器型式	引用文献
1	一番畠遺跡	愛知県東海市名和町一番畠	知多4類	早川ほか1978
2	長光寺遺跡	ク ク ク 櫻戸	ク	
3	塚森遺跡	ク ク ク 塚森	塚森式、知多3・4類	
4	松崎貝塚	ク ク 大田町松崎	知多1~5類、渥美類似式	杉崎1956、杉崎ほか1971・1977
5	下浜田遺跡	ク ク ク 下浜田	知多1~4類	杉崎1956
6	御亭遺跡	ク ク 高横須賀町御亭	知多4類	
7	宮西遺跡	ク ク 横須賀町四ノ割	ク	
8	大門遺跡	ク ク ク 二ノ割	ク	
9	漁脇遺跡	ク ク 養父町漁脇	ク	
10	浜脇遺跡	ク ク ク 浜脇	ク	
11	积迦御堂遺跡	ク ク ク 积迦御堂	ク	
12	荒井遺跡	ク 知多市八幡字荒井	ク	
13	平井遺跡	ク ク ク 字西平井	ク	
14	細見遺跡	ク ク ク 宇細見	知多1~5類	杉崎ほか1982

第2章 調査の経過

松崎貝塚の立地する地域一帯の愛知用水土地改良区川北第2工区において、土地改良(圃場整備)事業が施工されることになり、昭和51年7月21日から29日までの9日間と8月19日から21日までの3日間の延べ12日間にわたって発掘調査を実施した。この調査の結果、本遺跡は当初予想していたよりも広範囲であることが判明し、調査実施区域外については遺跡全体に土盛りを行い保護を計った。しかし、道路敷設部分については計画変更ができるから、再度調査を実施することになった。調査は、調査員の確保できる12月の下旬に実施することになり、12月26日から31日までの実働5日間にわたって行われた。先の夏期の発掘調査に関しては、すでに報告書を「愛知県東海市松崎貝塚発掘調査報告」(昭和52年3月)として刊行した。本書は、冬期の調査に関する報告であり、これを第2次とする。

調査にあたっては、道路部分とそれによって削平される区域に任意に8個所の調査区を設定した。これらの調査区に、夏期の調査区呼称記号を踏襲してそれぞれⅠ～Ⅷ区とした。調査区の表土面には遺物が認められず、数個所の試掘調査によって確認した遺物包含層上面まで重機によって耕土作業を行った。この深さは約50cmである。その後、主に砂の色調変化を目安とする層位発掘を実施した。

Ⅰ区は遺物の出土が少なく、土層断面の調査を重点に行うこととし、当初の調査区域の南側部分の幅2mのみを掘り下げた。遺物の出土が多いⅡ、Ⅲ区は全域を掘り下げた。Ⅱ区は約50cm掘り下げた面で貝層を2個所検出した。それぞれ位置する場所によって北と南貝層とした。これらの貝層を掘り下げた面で遺構を検出した。この面を基盤の生活面とし、その広がりを追求した。その結果、Ⅳ区は海岸寄りのⅡ区よりも低くなっていることがわかった。最も低いところで、Ⅳ区の遺構検出面より約1.8m下がっている。Ⅴ区東寄りのこの低くなった地点から須恵器無台环身の完器などが出土したが、遺構は認められなかった。Ⅵ区も約1m掘り下げた面でⅡ区と同様の遺構を検出した。この方面もⅣ区より約0.7m低くなっている。検出した遺構は、粘土分の混じるいわゆる山砂といわれる土によって構築されていた。形態はすべて小丘状に盛り上がったものであった。遺構はⅦ区で大小4個所、Ⅷ区で5個所を検出した。遺構を裁ち割った結果、Ⅶ区のものは1個所を除き、単に山砂が堆積していたのみであった。残る1個所は、中程に焼土が堆積し、その中から泥岩製の支柱状棒と土師器の壺形土器が出土した。Ⅷ区のものは、3個所に焼土が堆積していたが、Ⅸ区でみられた支柱状棒を伴うものはなかった。

遺物の出土状態は、各層とも点在して出土しており、遺構面においても特にまとまりをもって出土するといった状態はみられなかった。時期も同一層において、新旧のものが入り混じっていたが、

おむね下層のもののまとまりが上層のそれより古いといった傾向を示している。このうち、Ⅶ区のⅢ区と通する区域において、炭と灰を混じる黒色の砂層が堆積しており、ここからは知多半島製塙土器第3様式（8類）が多く出土し、伴出した須恵器等の日常容器の副葬から、8類の使用時期を知ることのできる良好な資料を得ることができた。また、海岸寄りの遺跡にしては、良好な状態を保つ紡錘や鉗具などの鉄器類が出土し注目された。

冬期の調査区域は、夏期のⅠ～Ⅴ区の調査区域より若干内陸寄りに位置するのであるが、製塙土器の出土量が比較的少なく、製塙炉も検出されず、1次と2次の調査区域幅約20mの範囲内において土地利用の仕方が異なっていることが感じられた。

冬期の厳寒のなか、降雪にも悩まされた悪条件の調査であったが、調査関係者の献身的な協力を得て終了することができた。後日、踏切工事に伴い線路の西側（図版2●印）から人骨が1体出土した。出土状態は不明で、土器などの遺物も伴わなかった。出土した場所からみて、木造跡に關係するものとみられる。出土した人骨については、京都大学靈長類研究所江原昭善教授の研究室へ届けられた。

以下、調査関係者名を記しておく。所属は調査当時である。

調査参加者

杉崎章（学術担当者、知多中学校校長）、磯部幸男（南知多町立師崎中学校教頭）、中山善夫（愛知県立常滑高等学校教諭）、宮川芳照（犬山市立犬山中学校教諭）、山下勝年（武豊町立武豊小学校教諭）、都築暢也、石黒立人、伊藤和彦、稻垣順三、宇佐美幸弘、島津忠英、早川廣好（以上、南山大学）、中野晴久（明治大学）、県立常滑高等学校生徒21名、富木島町・大田町の方々18名。

協力者

加古重光、片田秀一、浅井啓吉、池田陸介、石川玉紀、石野武、築波嵩、堤文二、長谷川昭二、早川信三（以上、東海市文化財調査委員）、神野孝一、片上与造（以上、上地改良区地元役員）。

整理参加者

石黒立人、島津忠英、友松康二（以上、南山大学）。

事務局

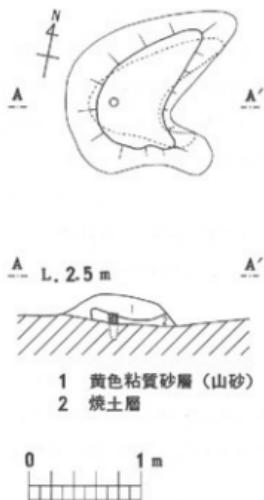
築波善夫（東海市教育長）、伊藤克己（社会教育課長）、石岡隆（社会教育係長）、吉田清孝、大島邦明、荒田敏夫、松木秀一、平川秀規、佐藤えり子（社会教育課主事）、立松彰（郷土資料館主事）。

第3章 遺構

松崎貝塚の第2次調査によって明らかにすることのできた遺構は、炉址とみられるものが4基ある。これらは同一の地表面上に点在しており、Ⅱ区に1基、Ⅲ区に3基が構築されている。個々の詳細は後述するとして、全体の概要をみてみる。

黄褐色の粗砂上に、粘土分の混じるいわゆる山砂によって構築されており、小丘状のマウンドをなした状態で検出した。これらを裁ち割ると中ほどに焼土が堆積しており、そこから土師器の甕や瓶などが出土した。形態の大きさや伴出する遺物などに画一性は認められない。また、同様な外形をなすもののうち、いくつかのものは単に山砂が堆積しただけのものであった。この山砂は、内陸の丘陵に分布する土であり、製壺土器の胎土によく似た組成をもっており、製壺土器などの素焼きの土器を作るために運ばれた粘土材料であった可能性も考えられる。いずれにせよ、これらの遺構は海岸寄りの砂上に構築されたものであり、風雨波浪の影響を受けて小丘状のマウンドをなすに至ったと考えられるのであるが、構築当初の形態は明確にでき得なかった。

1 Ⅱ-1 遺構（挿図1-5、図版27）

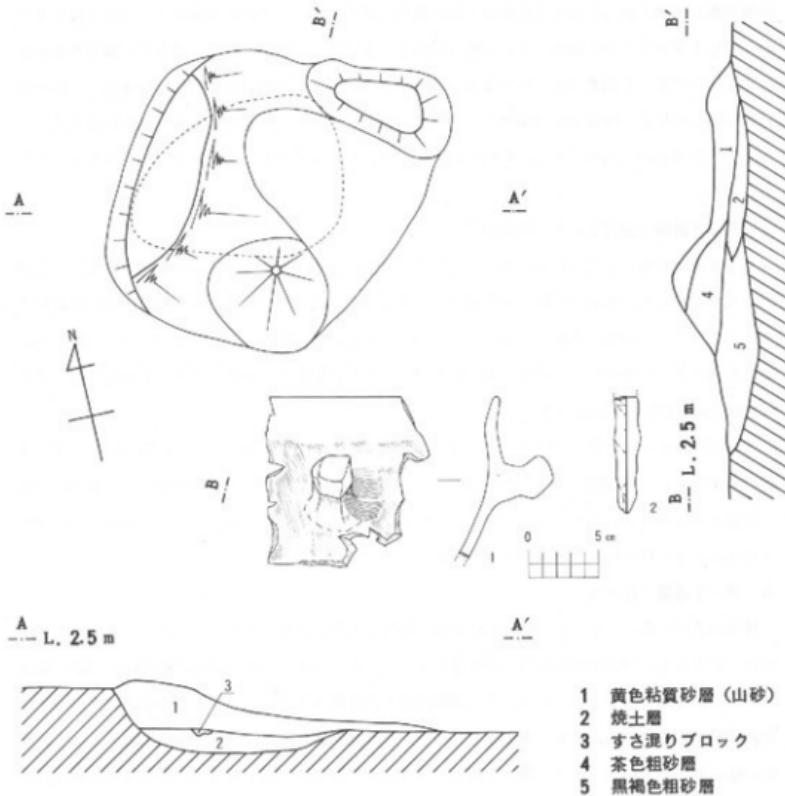


挿図1 Ⅱ-1 遺構実測図

Ⅱ区北貝層に接続した・5位置に設けられている。平面プランは弓形に張った形態で、長辺1.5m、短辺1m、高さ80cmを測る。平面プランの凹んだ部分の一部に焼土がみられ、横に裁ち割ってみると、中央に面取りの施された泥岩製の棒（挿図5-1）が立てられており、その下半は砂中に埋め込まれていた。この棒は、鋭利な刃物のような工具によって削り取られており、上面は平坦で、側面は面取りがなされ、下方はやや細まり、先端は丸く仕上げられている。全体の色調は、茶色味をおびた白色で、砂中より上に出る部分の一方の側面（挿図1のA'方向を向く面）は焼けて淡褐色となり、砂中の部分との境目は黒色に変化している。焼土はA'方向からみられ、内部では、先の棒の後方あたりで終っている。焼土の分布状態と棒の焼け具合からみて、火はA'方向からくべられたものとみられる。焼土内の棒の直上あたりを中心にして土師器の甕（挿図5-2・3）が1個体出土した。この土器は、出土状態からみて、棒の上面あたりに立てて置かれていた可能性もある。特徴は、肩部がひょううに長く、底部は丸底である。外面の調整は、口頸部が横なで、胸

部上半は縦方向の荒い刷毛目、下半は縦方向の細かい刷毛目、底部は複多な方向からなる細かい刷毛目が施されている。内面は上半が横方向の荒い刷毛目で、下半はヘラ削りである。外面には煤が全体に付着している。色調は薄茶色で、胎土は砂粒を混じる。

この遺構の当初の形態は、焼土の上に山砂が覆いかぶさっていることからみて、火をくべる部分を除いた周囲が高く取り囲まれていたか、ドーム状に天井部が構築されていたものとみられる。用



插図2 VII-1 遺構および出土遺物実測図

途は、煮炊き用のかまどと考えられる。

2 W-1 遺構（挿図2）

W区内の西側に設けられており、平面プランは斜約2.6mのほぼ円形をなす。外見は西側と北および南側が小丘状に盛り上がり、東側は中央部から低く下がってきており、焼土がみられる。これを裁ち割ってみると、中央の地山上に径1.5m、厚み20cmほどの焼土が堆積している。焼土内から土師器の壺上半分の破片と知多半島製塙土器の脚部の破片が1点、それと火熱によって硬化したすき混りの粘土ブロックが1個出土した。壺（挿図2-1）は、口縁部外面が横なで、頸部外面が細かい刷毛目によって調整され、長さ3.5cmのやや上向きの把手を付ける。色調は淡褐色で、胎土は砂粒が多く混じる。製塙土器（挿図2-2）は、にぎりはなしの細身の作りで、3類に属するものである。この遺構は、山砂と焼土の堆積状態からみて、W-1遺構と同様なかまどのようなものと考えられる。

3 W-2 遺構（挿図3・5、図版28）

W-1遺構の東に設けられている。平面プランは、長辺2.2m、短辺1mの梢円形をなす。2個のマウンドをもち、地山上に焼土が堆積する。焼土内から土師器の壺の破片と製塙土器の脚部片1点が出土した。この他、北寄りのマウンド上から土師器の壺と高环の破片が出土した。焼土内には、火熱によって硬化したすき混じりの粘土ブロックが数個認められた。マウンドの高さは、北寄りが85cm、南寄りが80cmを測る。

焼土内から出土した壺（挿図5-6）は、外面は細かい刷毛目が施され、ヘラ削きの交差する沈線が2条みられ、内面はヘラ削りされている。色調は淡褐色で、胎土は砂粒を混じる。製塙土器（挿図5-5）は、にぎりはなしの作りで、知多半島製塙土器3類である。マウンド上出土の高环（挿図5-4）は小片で、色調は淡褐色である。

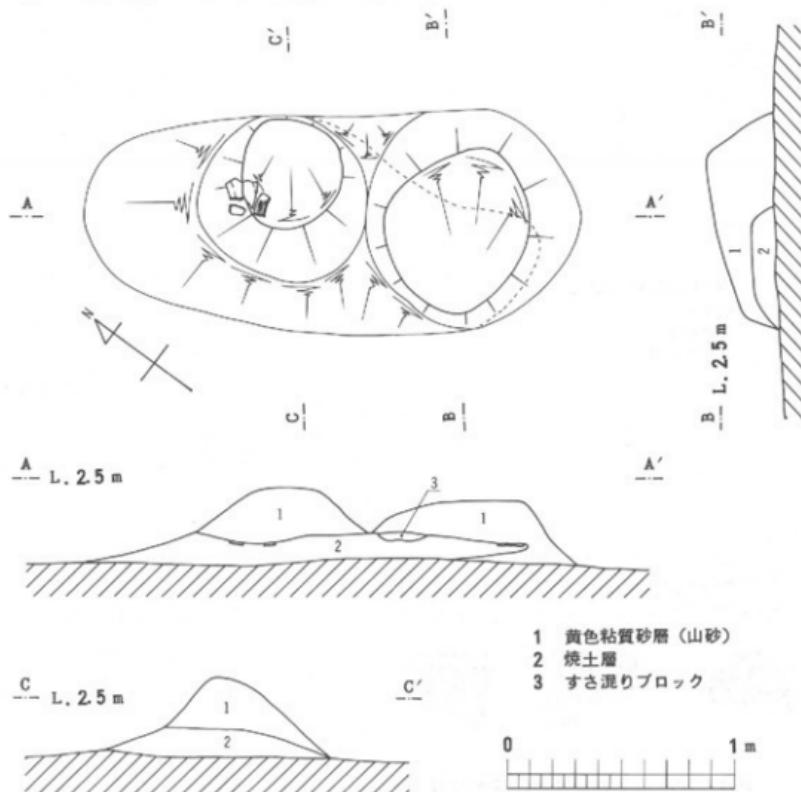
4 W-3 遺構（挿図4）

W区の北東に設けられており、一部は調査区域外にある。3個のマウンドがみられ、このうち北東に位置するものの内部のみ焼土が堆積している。このマウンドの東寄りに径40cm、深さ85cmのピットが2個並んでうがたれている。遺物は焼土の堆積するマウンドとその西側のマウンドとの間の上面から、須恵器の壺身とその中に入り込んだ製塙土器の脚部片があり、焼土内からは、土師器の壺と壺の小片が出土した。壺（挿図4-1）は、口縁部と内面が横なで、頸部外面は縦方向の刷毛目が施され、色調は淡褐色である。壺（挿図4-2）は、口端が平坦で、口縁部の内外面は横なで、頸部の外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目が施され、色調は淡褐色である。須恵器の壺身（挿図4-3）は完器で、立ちあがりは内傾し短く、底面はヘラ削りされ、色調は青灰色である。製塙土器（挿図4-4）は、内底面から先端までの高さ7.7cm、壺部と接する部分の径1.7cmを測

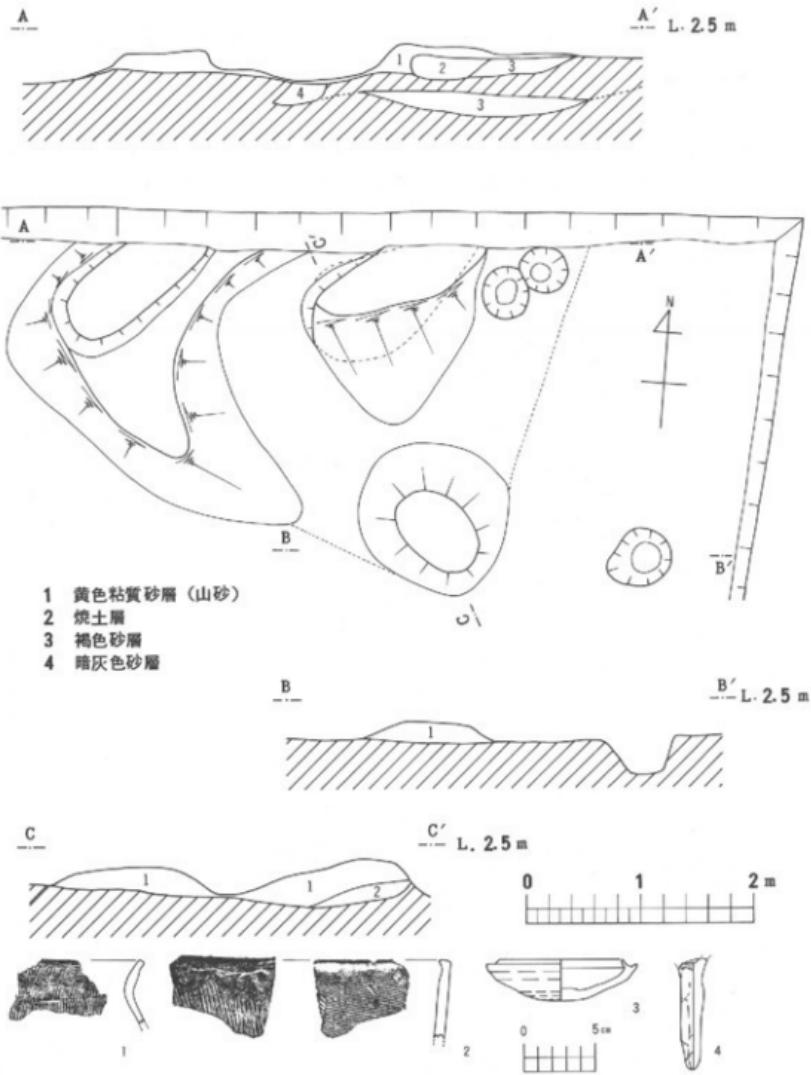
り、にぎりはなしの作りである。やや小型であるが作り方からみて3類に含まれられるものである。

5 その他の遺構

Ⅷ-3遺構でも触れたが、この遺構内とそれを取り巻くように数個のピットがある。Ⅷ-3遺構でとらえた2個のほか、遺構の東側に1mほど離れて、径60cm、深さ30cmのピットが1個所、この南に1mほど離れて径20cm、深さ15cmのピットが1個所、さらにこれより南西に1mほど離れて長辺1m、短辺60cm、深さ20cmのピットが設けられている。これらのピット内には、他とは異なる黒味をおびた砂が堆積し、土師器の細片が出土したものもある。ピットの性格については、Ⅷ-3遺構の全容をとらえられず明確にでき得ない。



挿図3 Ⅷ-2遺構実測図



挿図 4 Y-3 遺構および出土遺物実測図

この他、竪一遺構の北に炭化物がまとまって分布する地点があり、この近くの地山上から未使用とみられる製塙土器（図版6-37）が出土した。

6 まとめ

前述した各遺構の規模や出土遺物等をまとめて示すと表2のようである。

各遺構に共通する点をあげると、次のようにある。

- (1) 同一地表面上に構築されており、おそらく同時期のものとみられる。その時期は、竪一遺構の土師器甕のはかに求められる良好なものがないが、後述する各層の遺物のうち、遺構面上に堆積するものから推測して、7世紀の前半に求められる。
 - (2) 烧土内に、煮炊きに使用する土師器の甕、瓶がみられる。
 - (3) 山砂を使用して構築している。
- 相違する点をあげると、次のようにある。
- ① 規模、形態が異なる。
 - ② 泥岩製の支柱状棒を伴うものと伴わないものがある。

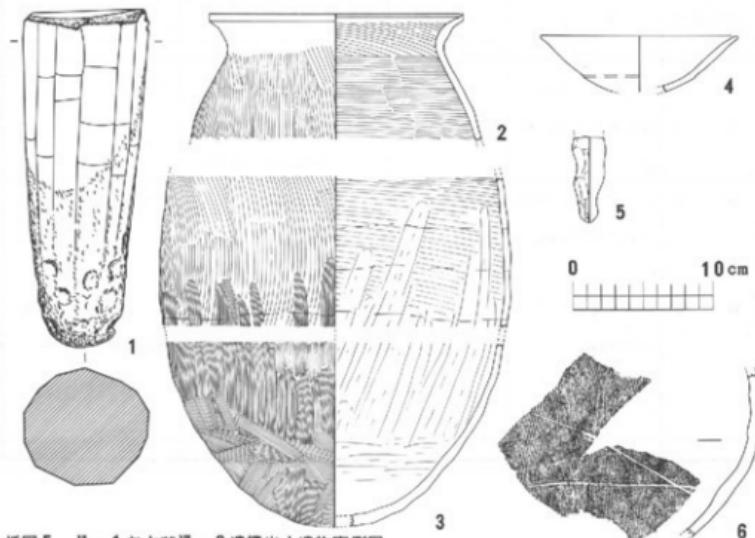
表2 松崎貝塚各遺構規模等一覧

遺構記号	規 模	形 态	焼 土	伴 出 遺 物	備 考
竪一	長辺 1.5 m × 短辺 1 m × 高さ 80cm	C字形	有	土師器甕形土器、 泥岩製棒	
竪一	径 2.6 m × 高さ 65 cm	円形	有	土師器甕形土器、 製塙土器（3種）	
竪二	長辺 2.2 m × 短辺 1 m × 高さ 85cm	楕円形	有	土師器甕形土器、 製塙土器（3種）	伴出遺物は小片。
竪三	長さ 4.4 m × ? × 高さ 30cm	（隅丸方形）	有	土師器甕形土器、 土師器甕形土器、 須恵器環身、製塙 土器（3種）	ピットを伴う。焼土 内出土遺物は小片。

Ⅳ-1遺構は、泥岩製の棒を伴うのであるが、これと同様の棒をもった遺構はⅢ区においても検出している。Ⅲ区の遺構については、知多半島製塙土器1類を小さくしたような形態をもち「小型製塙土器」と呼称した土器や、製塙土器3類、火熱によって硬化したすき氷じりの粘土ブロックなどが焼土内から出土し、しかも天井部をもっていたとみられることなどから、その用途は立松・宮川とともに杉崎も同定した焼き塙ないし固型塙作成用の炉であろうと推定〔杉崎ほか、1977〕している。このⅢ区の炉址と、Ⅳ-1遺構は伴出遺物の細部が異なるものの、支柱状棒をもつ点において、よく似た様相をもつ遺構である。

他の遺構は、支柱状棒をもたないが、焼土が存在することと、その上部と周囲に土が堆積することからみて、側壁および天井部を構築して、風などの影響を考慮したかまどのような用途を有する炉址と考えられる。そこから土師器の甕や瓶が出土することからみて、主に日常の食生活の用に供されたのであろう。これらの炉址も、極くわずかだが製塙土器を伴出しており、前述したⅢ区の炉址の用途や製塙土器の焼成といったような作業が行なわれた可能性も否定できない。後者に関しては、未使用とみられる完器に近い製塙土器が周辺から出土していることからも注目される。

^{やかこ}これらの煮沸煎熬用の炉とは異なる炉は、Ⅳ・Ⅴ区およびⅥ区南部にまとまりをもつように構築されている。このことは、この区域が土器製塙作業場の中でも、煎熬作業の場とは異なる区域（たとえば住居）として設定されていたことをうかがわせる。



挿図5 Ⅳ-1およびⅣ-2遺構出土遺物実測図

第4章 遺 物

今次の調査区域においては、第1次の調査区域に比べて製塙用土器片の出土は少なく、日常容器の土師器・須恵器類が多かった。ただ、製塙土器の出土量は1次に比べて少ないのであって、全出土遺物量に占める割合は大きく、各層にわたって知多半島製塙土器4類を主体にして出土している。

以下、各層ごとに出土遺物を述べるが、層序についてはおおむね上層から下層へと番号を付したが、前後関係の複雑な層もあり明確なものではない。個々の遺物の特徴については、表3～5・7および各実測図版を参照していただきたい。

第1節 人工遺物

1 土器類

(1) 土師器・須恵器・灰釉陶器(表7、図版5～16、30～34)

a 11層(図版5、6)

主にⅡ・Ⅳ区内に堆積する最下層である。須恵器の壺蓋(図版=以下同じ=5-1～4)・壺身(5-5～7)・高壺(5-9・10・12・18)・瓶(5-18)は東山50号窯式、高壺(5-11)・甕(5-17)は岩崎17号窯式、鉢(5-25)・壺身(5-26)は高藏寺2号窯式に比定できよう。土師器は、甕・高壺・瓶・壺がある。甕のなかで、口端が突出し断面三角形をなすもの(6-11・18)がある。灰釉陶器は碗の細片が2点認められる。本層は、時代の違う遺物が混在するものの、主体をなす須恵器は7世紀前半の時期である。

b Ⅳ区北貝層(図版7)

Ⅳ区の北部に位置する貝層でハマグリを主体とする。須恵器の壺蓋(1・2)・高壺(5・6)は東山50号窯式、壺身(3)・高壺(7・8)・壺蓋(9)・甕(12)・鉢(14)は岩崎17号窯式、蓋(10)は岩崎41号窯式、壺身(11)・鉢(15)は鳴海NN-32号窯式に比定できよう。高壺(4)は、本遺跡では古い型式であり、東山11号窯(斎藤 1988)に続くものとみられる。土師器は甕と甕があり、甕(20・21)の口端は、11層の甕(6-11・18)の特徴をわずかに残しており、後出するものではないかと考えられる。

本層は、須恵器の過年からみて7世紀代を主体としている。

c Ⅳ区南貝層(図版8)

Ⅳ区の南部に位置する貝層で、ニナの類とハマグリを主体とする。須恵器は壺身(1～4)・短颈甕(6・7)は東山50号窯式、壺蓋(5)・高壺(8)・蓋(10)は岩崎17号窯式に比定できよう。土師器は甕・瓶などがある。甕(18)は長胴形で、輪積み成形である。口縁部内面と胴部外面は刷毛目、口縁部外面と胴部内面はなで調整されている。口端はわずかではあるが突出する。同じく14は口端が突出し断面三角形をなす。胴部内外面に細かい刷毛目調整が施されている。16は高壺

と考えられる。胎土は砂粒を多く含み、内外面ともなで調整されているが、輪積みの痕跡が残る。

本層は、須恵器の編年からみて7世紀前半から中葉を主体とする。

d 4層(図版9)

主にⅤ区内に堆積する最下層である。須恵器のうち坏蓋は口縁部が高く稜も鋭く古い形態をもっている。東山11号窯と同時期のものと考えられる。坏身(2)は受口部が直立気味で長く、やはり古い形態をもつ。ともに細片である。坏身(3・4)は東山50号窯式、坏身(5)は岩崎17号窯式に比定できよう。坏身(6)は底面が手持ちのヘラ削りである。(7)は底面が回転ヘラ削りされているが、中央に糸切り痕が残っている。ともに高藏寺2号窯式に比定できよう。坏身(8)は糸切り底であり、岩崎25号窯式に、坏身(9)と坏蓋(10)は鳴海NN-32号窯式あたりに比定できる。土師器は高坏と甕がある。甕(17)は須恵器坏身(7)と伴出した。胎上は砂粒を多く含む。口縁部外面は横なで、内面は刷毛目、腹部外面は刷毛目、内面はヘラ削りの後になで調整されている。

本層は時代の違う遺物が混在しており、下層で須恵器坏身(7)と土師器甕(17)が出土した。

e 6層(図版9)

Ⅴ区の南西角に堆積する黒色の砂層で、知多半島製埴土器3類が多量に出土した。須恵器は坏蓋(22)・坏身(24)が東山50号窯式、坏蓋(28)・坏身(25・26)・高坏(27)が岩崎17号窯式、細頬瓶(29)が岩崎41号窯式に比定できよう。土師器は甕がある。甕(80)は硬質で、口端が突出する。

本層は、須恵器の編年からみて7世紀代のもののみ包含されている。

f 10層(図版10、11、12)

主にⅤ区内に堆積し、前述した11層と同様に地山面を覆っている。須恵器は坏蓋(10-1・2)・坏身(10-5~10)が東山50号窯式に、坏蓋(10-3・4)・坏身(10-11・12)・高坏(10-15~23)・坏蓋(10-32)が岩崎17号窯式に比定できよう。次に、坏蓋(10-35)・坏身(10-40~42・44~46)の鳴海NN-32号窯式と坏身(10-43・47)に比定できる一群がある。灰釉陶器は瓶(11-22・23)が黒板14号窯式に、広口瓶(11-6)・瓶(11-15)・甕(11-24・26~28)・段皿(11-25)が黒板90号窯式に、甕(11-30)は折戸58号窯式に比定できよう。土師器は、高坏・瓶・甕がある。

本層は時期の違う遺物が混在しており、須恵器等の編年からみて7世紀代、8世紀後半~9世紀前半、10世紀前半の時期を求められるものがまとまりをもち、7世紀前半~11世紀前半にわたる遺物が認められる。

g 9層(図版13)

Ⅵ区において地山面上に堆積する。須恵器は高環(7・8)が古い器形をもつ。次いで环蓋(1~3)・环身(4)・高环(9)が東山50号窯式に、环身(5)・高环(6)が岩崎17号窯式に比定できよう。その他、环蓋(11・14)・环身(15・16)・細頸瓶(17)が鳴海NN-32号窯式あたりに比定される。土師器は高环・甕・瓶がある。高环(19・20)は脚のみではあるが、青山貝塚(芳賀 1959)のA地点上層出土品に類似するものとみられる。

本層は、古い器形の土師器が伴うほか、須恵器の編年からみて7世紀前半と8世紀後半を主体とする遺物がみられる。

h 8層(図版14)

主にⅣ区に堆積する。須恵器は高环(2)・环身(3)が岩崎17号窯式に比定できよう。环蓋(9・10)・环身(11・12)は折戸10号窯式に含められよう。灰釉陶器の碗(36)は黒徳14号窯式、碗(37・38・47)・皿(39~48)は黒窓90号窯式、碗(45・48・49)は折戸58号窯式に比定できよう。土師器は皿と甕がある。甕は口端内側に段をもつもの(18・19)がある。

本層は時期の違う遺物が混在しており、須恵器等の編年からみて7世紀後半から10世紀後半までのものがある。

i 3層(図版15)

主にⅣ・Ⅴ区に堆積する。須恵器は环身(1)が岩崎17号窯式、鉢(5)が岩崎41号窯式、鉢(6)・环身(8)が高蔵寺2号窯式あたりに、环蓋(4)・瓶(10)が鳴海NN-32号窯式あたりに比定できよう。灰釉陶器は碗(11・12)が黒窓90号窯式、碗(13・14)・耳皿(15)が東山72号窯式に比定できよう。土師器は高环がある。

本層も時期の違う遺物が混在しており、須恵器類の編年からみて7世紀後半から8世紀後半と10世紀前半と11世紀前半のものがある。土師器の高环は、器形からみて、前の須恵器よりも古い時期のものとみられる。

j 2層(図版16)

主にⅣ・Ⅴ区に堆積する。須恵器は环蓋(1・10)・环身(2・8)・高环(4~6)が岩崎17号窯式に、把手付大型盤(9)は高蔵寺2号窯式あたりに、盤(19・20)は井ヶ谷78号窯式に比定できよう。灰釉陶器は碗(27・28)が黒窓90号窯式に、段皿(26)・碗(29)が折戸58号窯式に比定できよう。土師器は小甕・瓶がある。

本層も時期の違う遺物が混在している。

k 採集品(図版12)

須恵器の环蓋(15)は、第1次調査Ⅲ区の北東方面で採集した。土師器小甕(16)は、支水溝設置工事に伴い出土した完器である。出土地点は、工事関係者の話によれば、第1次調査Ⅲ区の東約

40 m である。

(2) 緑釉陶器(図版84)

Ⅵ区南貝層の直上から破片が1点出土した。底部の破片で器形を特定しえないが、碗か皿の類である。糸切り底で高台が付く。胎土は均質で、素地の色調はやや黄味がかった白色である。緑釉が高台内側底面にいたるまで全面に施釉されている。

これと接するようにして、須恵器の鉢(図版7-15)が出土している。

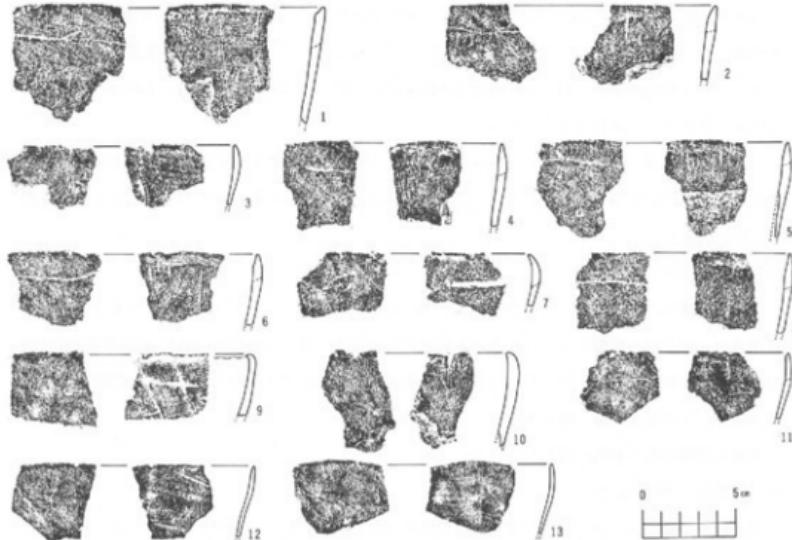
(3) 壺器系中世陶器(行基焼)(図版11-30、15-16・17)

いわゆる山茶碗・皿とよばれるもので、碗(15-16・17)は、常滑窯編年の第2型式(後期=18世紀後半)[杉崎1981]に比定できよう。皿(11-30)は碗より新しい時期のものである。

(4) 製塙土器(図版6~9、11~15、35、36)

知多半島製塙土器のうち、脚が中実細身で表面になで調整の施された4類を主体にして、全層から出土している。同一型式の量がまとまりをもったものとしては、Ⅵ区6層における、脚が中実太目でにぎりはなしのままの8類がある。以下、各層ごとにみてみる。

a 11層(挿図6-1~8、図版6-28~37)



挿図6 製塙土器拓影(1~8=11層出土、9~11=6層出土、12=9層出土、13=Ⅵ区北貝層出土)

遺構の項で述べたように、未使用とみられる3類がⅣ区遺構面から1個体分(87)出土した。奥の先端部を欠くが、残存する台脚部分からみてにぎりはなしのもので、3類の中では細身である。坏部の大きさは、口径18.6cm、深さ11cm、器体の厚み8mm前後を測る。台脚の坏部と接する部分の径は2.6cmである。3類の大多数のもののこの部分の径は平均8.2cmほどを示すことからみて、細身である。坏部の成形は輪積みによってなされ、外面にその痕跡が残る。外面全体に掌や指紋の痕がみられる。内面はヘラ削りとなつて平滑に仕上げられている。内底面には、粘土を削り取ったヘラの痕が残る。口端は尖がり気味の素縁で、やや内湾する。胎土は砂粒が多く混じり、色調は全体が黄土色で、使用されたもののように部分的な変化が全くない。この他、筒形台脚の1類と棒脚で中実太身の3類が認められる。1類の中では、下端をつまんだままのもの(C類)が多い。口縁部についてみてみると、尖がった素縁で、胎土は砂粒を多く混じり、3類のものと考えられる。

b Ⅳ区北貝層(挿図6-13、図版7-26~31)

小型の倒付形の台脚をもった渥美半島製塙土器A類[芳賀1959・近藤1965]に酷似するもの(26)が1点出土している。この他、1(C類)と3類がみられる。

c Ⅳ区南貝層(図版8-20・21)

3類の細身のものと太身のものがある。

d 6層(挿図6-9~11、図版8-28~33、9-32~46)

3類が多量に出土し、1(C類)と棒脚で中空の2類が伴う。1(C類)は、坏部内底面から脚下端までの高さが7cmと9cm前後の高低2種類があり、筒形台脚で下端が平坦な1(A類)と、1(A類)より大型の1(B類)の大きさのものの下端をつまんだままの作りのようでもある。3類は坏部内底面から脚下端までの高さ11cm前後、坏部と接する部分の脚径8cm前後を測るものがほとんどであるが、細身のもの(8-38)や低いもの(9-39)が数点認められる。

e 4層(図版9-18~20)

筒形台脚の中で下端面が平坦な作りで小型のもの1(A類)(18・19)がみられる。この2例は、A類の中でも、坏部と台脚の接合の仕方が、他のものと若干異なり、台脚内面上端の坏部との接合がはっきりしている。

f 10層(図版11-58~63)

少量ではあるが1類から4類にわたる各類型のものが出土している。

g 9層(挿図6-12・14、図版18-31~44)

渥美半島製塙土器A類に酷似するものが5個まとめてみられる。これと、同層の土師器高坏(18-19・20)との組み合わせは、青山貝塚[芳賀1959]と同様のように考えられる。この他、1(C類)、2類、3類がある。筒形台脚の中で、筒部の浅いもの(89)がみられる。2類(40)

は先端が尖り氣味作られ、外見は3類のようである。

h 8層(図版14-26-27)

表面がなで調整されており4類に属するものであるが、環部と接する部分の脚径が2.8cmと8cmを測り、大多数を示めるもの(平均1.8cm)より太身である。

i 8層(図版15-20-28)

1(C)類と、にぎりはなしの作りで、胎土に砂粒を多く混じる5類とみられるもの(28)がある。

j 採集品(図版12-17-27)

渥美半島製塩土器A類に酷似するもの(17)1点を、第1次調査の1区方面で表探した。

18-27は第1次調査のⅢ区の北東約70m付近(図版2のA地点)で、工事によってならされた土砂の中からまとめて採集した。作り方は4類と同様で、表面が丁寧になで調整されている。ただ環部と接する部分の脚径が8cm以上と太いものである。

k まとめ

4類が10・9・8・3層から多く出土したが、ほとんど脚自体破損して細片であった。出土状態からみて同類のものが廃棄集積した場所から移動拡散したものとみられる。このことは、他の類型のものも同様で、第1次調査でみられたように煎熬用炉に伴って出土したものではなく、土層中に点在した状態で出土している。

(5) 土鍋(表3、図版6-9、11、13-16)

ほとんどの層から出土しており、破損したものを含めて100個ほどある。このうち、8層の1個(14-38)が須恵質で、他はすべて土師質である。形態としては紡錘形が最も多く、俵形・球形・管形をしたものもみられる。使用時期を特定しえるものは少なく、強いてあげるならば、11層(6-19-22)・Ⅲ-北貝層(7-22-24)・Ⅲ-南貝層(8-22)・9層(13-45-58)のものが、古墳時代後期から奈良時代である。重量が40gを越えるもの(15-31・32)は層位等から見て、本遺跡では後出するものようである。いずれにせよ、孔径0.2-0.5cmのものが約9割を占め、なかでも0.8-0.4cmのものが多く、0.6-0.9cmのものは残りの1割と少ない。

2 鉄器および骨角器等(表4、図版17、29、88)

(1) 鉄器(図版17-1-10)

海岸の遺跡としては、良好かつ多種の鉄器が遺存していた。種別および各特徴については表4に示すとおりである。用いられた時期は、古墳時代後期(7世紀)から奈良時代のうちに入ると考えられる。

紡錘車や鎧先などは、直接、製塩や漁撈作業に関係しないものであり、これらの出土した今次の

表3 松崎貝塚土鍤一覧

図版番号	出土区・層位	形態	法量(cm·g)				図版番号	出土区・層位	形態	法量(cm·g)			
			長さ	最大径	孔径	重量				長さ	最大径	孔径	重量
6-19	Ⅳ-11	紡錘形	—	1.5	0.4	—	14-28	Ⅳ-8	紡錘形	3.6	1.6	0.3	8.2
20	Ⅳ-11	ク	5.6	1.7	0.3	12.7	29	ク	ク	3.1	1.0	0.3	8.2
21	ク	ク	6.4	1.5	0.3	12.5	30	ク	ク	4.1	1.2	0.3	4.4
22	Ⅳ-11	ク	—	1.2	0.4	—	31	ク	ク	8.5	2.4	0.5	27.8
7-22	Ⅳ-北貝層	ク	8.9	1.3	0.3	5.6	32	ク	ク	5.6	1.5	0.2	12.0
23	ク	ク	4.7	1.2	0.3	5.2	33	ク	ク	6.5	1.9	0.3	15.9
24	ク	ク	—	1.8	0.4	—	34	ク	ク	—	0.6	0.4	—
8-22	Ⅳ-南貝層	管形	—	1.9	0.4	—	35	ク	ク	4.4	1.8	0.5	10.7
9-21	Ⅳ-4	紡錘形	4.0	1.4	0.4	8.0	15-24	Ⅳ-3	ク	3.9	1.2	0.3	—
11-32	Ⅳ-10	ク	3.8	1.1	0.3	4.1	25	ク	ク	4.7	1.1	0.3	—
33	ク	ク	3.5	1.2	0.4	4.8	26	ク	ク	4.7	1.3	0.3	4.7
34	ク	ク	3.8	1.0	0.3	4.1	27	ク	ク	6.4	1.7	0.4	15.9
35	ク	ク	3.8	1.2	0.3	3.6	28	ク	ク	6.1	2.0	0.5	—
36	ク	ク	4.9	0.9	0.3	4.0	29	Ⅳ-3	ク	—	2.5	0.6	(38.8)
37	ク	ク	5.2	1.1	0.2	4.6	30	Ⅳ-3	ク	5.7	2.1	0.4	21.9
38	ク	ク	5.4	1.3	0.4	6.8	31	Ⅳ-3	管形	4.6	3.5	0.9	43.7
39	ク	ク	5.7	1.5	0.4	11.0	32	Ⅳ-3	球形	3.6	4.4	0.7	66.2
40	ク	ク	5.6	1.5	0.4	8.8	16-33	Ⅳ-2	紡錘形	4.3	1.8	0.4	5.8
41	ク	ク	6.2	1.5	0.5	9.4	34	ク	ク	4.1	1.4	0.3	6.1
42	ク	ク	5.2	1.3	0.3	11.4	35	ク	ク	4.6	1.0	0.4	3.6
43	ク	ク	4.0	1.6	0.3	7.7	36	ク	ク	4.6	1.0	0.3	6.0
44	ク	ク	4.2	1.7	0.5	9.0	37	Ⅳ-2	ク	4.5	1.5	0.4	6.7
45	ク	ク	5.1	1.8	0.4	12.1	38	Ⅳ-2	ク	4.4	1.4	0.5	6.0
46	ク	ク	5.0	2.2	0.4	23.0	39	ク	ク	4.4	1.3	0.3	5.9
47	ク	ク	—	2.3	0.6	—	40	ク	ク	4.8	1.4	0.4	7.6
48	ク	ク	—	1.9	0.6	—	41	ク	ク	4.6	1.9	0.5	12.2
49	ク	ク	5.3	2.3	0.6	22.4	42	ク	ク	4.8	1.5	0.5	8.6
50	ク	ク	—	2.8	0.5	—	43	ク	ク	5.0	1.3	0.4	6.7
51	ク	ク	6.6	2.0	0.5	19.0	44	Ⅳ-2	ク	4.0	1.9	0.5	15.5
52	ク	管形	—	1.9	0.4	—	45	Ⅳ-2	ク	6.2	1.6	0.4	13.8
53	ク	紡錘形	—	1.6	0.6	—	46	ク	ク	4.5	2.1	0.5	17.4
13-45	Ⅳ-9	ク	3.9	0.9	0.3	3.0	47	ク	ク	5.8	1.4	0.3	13.3
46	ク	ク	4.9	1.2	0.3	8.2	48	ク	ク	6.1	1.6	0.4	14.4
47	ク	ク	3.8	1.7	0.5	9.0	49	ク	ク	5.2	1.8	0.6	16.8
48	ク	ク	5.2	1.4	0.3	6.2	50	ク	ク	5.0	2.0	0.3	15.1
49	ク	ク	5.4	1.7	0.4	13.1	51	ク	ク	5.7	2.1	0.5	21.0
50	ク	ク	5.7	2.1	0.4	22.2	52	ク	球形	3.0	8.4	0.5	33.2
51	ク	ク	6.1	2.0	0.5	23.8							
52	ク	球形	2.5	3.0	0.4	23.8							
53	ク	ク	3.5	4.2	0.6	—							

調査区域は住居区であったと考えられる。

(2) 骨角器(図版17-11~14)

11は鹿角製で、中央に鍔が付着しており、刀子の柄である。丁寧に磨かれ、やや滴曲する。18は鹿角を切断したもので、大きさからみて、刀子の柄の未成品とも考えられる。12~14は鹿の骨で鋭利な切断痕が残る。用いられた時期は鉄器と同時期のものと考えられる。

(3) 鞍の口と鉄塊(鉄流)(表8、挿図8、図版7~25)

Ⅷ区北貝層から鞍の口の破片が2個出土した。うち実測したもの(25)は、外径約6cm、内径2.2cm、厚み2.2cmを測る。一端が焼けた黒色に変化している。

鉄塊は挙大のものがこの層から1個、Ⅸ区11層から1個、Ⅹ区4層(下層)から1個の3個出土している。出土した層の時期から判断して、古墳時代後期(7世紀)のものと考えられる。鉄塊の分析調査を、新日本製鐵株式会社名古屋製鐵所へ依頼した。その分析結果は第6章のとおりである。

表4 松崎貝塚鉄器・骨角器一覧

図版番号	用 途	出土区・層位	材質	備 考
17-1	紡錘車	Ⅷ-11	鉄	長さ25.2cm、心棒径0.5cm、円盤径4.1cm、円盤厚み0.8cm。心棒の一端が尖る。
17-2	刀 子	Ⅷ-北貝層	タ	刃の部分が研ぎ減っている。
17-3	タ	Ⅷ-2	タ	同 上。
17-4	タ	Ⅷ-9	タ	同 上。
17-5	鉄 具	タ	タ	留金具が搭側の方を向いたまま鍛化している。
17-6	鎌 先	タ	タ	断面は「V」形をなす。
17-7	鐵	Ⅸ-2	タ	全長10.1cm。
17-8	タ	Ⅸ-8	タ	一方の断面は円形で、もう一方は方形に変化している。
17-9	タ	Ⅸ-9	タ	先端部欠損。折れ目がついている。
17-10	環	Ⅸ-11	タ	径4mmの鉄棒を使用している。
17-11	刀子の柄	Ⅸ-9	鹿角	全面が磨かれている。中央部に孔がうがたれ、鍔が付着。
17-12	未 成 品	Ⅸ-10	タ	切断痕が残る。
17-13	タ	Ⅸ-2	タ	切断痕が残る。刀子の柄の未成品か。



插図7 永樂通宝拓影(1:1)

3 石器類(表5、図版15-33~42、87)

石器は砥石を主体にしている。用途・石材および特徴については表5に示すとおりである。

4 貨幣(挿図7、図版80)

永樂通宝が1個出土している。出土場所は、Ⅷ区北西角の2層で、直径25mm、厚み1.8mm、中央の四角形の孔の一辺5.2mmをはかる。

表5 松崎貝塚石器一覧

図版番号	用 途	出土区・層位	石 材	備 考
15-33	(支柱)	Ⅷ-北貝塚	泥 岩	面取りされている。
15-34	砥 石	Ⅷ - 2	流 紋 岩	扁平な両面と側面を使用。
15-35	ク	Ⅷ - 4	砂 岩	一部に細い条痕がある。
15-36	不 明	Ⅷ - 10	ク	扁平な面の片面中ほどに方形の突起がある。 側面はすり減っている。加熱を受けた痕跡がある。
15-37	砥 石	Ⅷ - 11	ク	長径方向の両端は、中央がふくらみをもってすり減っている。短径方向の四角が2~3箇所凹む。
15-38	ク	Ⅷ - 4	凝 灰 岩	断面が台形状をなすものとみられ、使用面が3面残る。
15-39	ク	Ⅷ - 2	砂 岩	扁平な両面とその周囲の面が使用されている。
15-40	ク	ク	凝灰質砂岩	一部に細い条痕がある。
15-41	ク	Ⅷ - 4	片岩~片麻岩	断面が台形状をなすものとみられ、使用面が2面残る。
15-42	ク	Ⅷ - 9	玄 武 岩	全面が平滑で、特に片面はなめらかである。 この面に細い条痕がある。

第2節 自然遺物

1 貝類(表6、図版39)

表6 松崎貝塚Ⅱ区北および南貝層の貝類組成

種名	プロック	北貝層		南貝層	
		個体数	%	個体数	%
貝類	二枚	ハマグリ	441	59.92	73
		マテガイ	70	9.51	8
		マガキ	65	8.83	86
		オキシジミ	43	5.84	8
		シオフキ	23	3.18	12
		オオノガイ	2	0.27	1
		サルボウ	2	0.27	1
貝類	足	カガミガイ	1	0.14	
		小計	647	87.91	184
					324.6
	腹	ニナの類	56	7.61	258
		キセルガイ	24	3.26	5
		ツメタガイ	3	0.41	6
		アカニシ	2	0.27	6
貝類	足	タマキビの類	2	0.27	1
		マイマイの類	2	0.27	1
		スガイ			2
		小計	89	12.09	279
		計	736	100.00	418
					100.00

Ⅱ区北および南貝層の中央でバケツ1杯分(約0.005m³)採集したものの貝類組成は表6に示すとおりである。二枚貝類については殻の合せ目の数を二分して個体数とした。マテガイの実数はもっと多いとみられる。ハマグリは殻長50mmほどの中形が主体である。マガキは小形のものが多い。北貝層からはウニを微量検出した。

2 獣骨類(図版39)

総数で36点ある。うちⅡ区21点、Ⅲ区15点である。全体に鹿の骨が多くみられる。主なものをあげると次のようである。

鹿の角(Ⅱ区=2層・6層・9

層・北貝層、Ⅲ区=8層・10層・11層)、馬の歯(Ⅱ区=北貝層、Ⅲ区=2層・10層)、いのししの歯(Ⅲ区=2層)、犬の歯(Ⅱ区=9層・南貝層、Ⅲ区=10層)、鳥の骨(Ⅲ区=北貝層)、海亀の甲ら(Ⅲ区=11層)などがある。この他、Ⅱ区北および南貝層中から小魚骨片を微量検出した。

この分野に関しては、今後さらに検討を加えたい。

3 人骨出土状況

昭和54年8月6日に名鉄常滑線の踏切工事に伴い人骨らしいものが出土した旨、工事業者から教育委員会へ連絡が入った。出土した場所(図版2の●印)が、松崎貝塚の範囲内とみられることから、担当職員がすぐに現場へ向ったが、人骨は現場の作業者の手によって埋めもどされていた。そこで、その地点を再度掘り下げたところ、現地表面下約50cmのところから、まとめて埋めもどされていた人骨を収集した。人骨は水の湧出する灰色の砂層中から出土したものであるが、当初の出土状態については全く不明である。伴出遺物としては、同層から製塙土器(4類)の小片が出土している。

以上のような出土状況であり、人骨の出土状況や遺構等を明確にできないが、時期としては一応、製塙土器4類の用いられた時期(8世紀)以後のものと考えている。

委7 松崎貝塚土器類一覽

試験番号	基種	縦形	出土区・層位	調査	
				色	調
5-1	須井器	灰 灰	Ⅷ-11	青 灰 色	口縫部と天井部の縫で段をなして、縫をわずかに作り出す。胎土は砂質が混入する。
2	+	+		灰 色	口縫部と天井部の縫で段をなして、縫をわずかに作り出す。口縫は丸みをもつ。天井部は丸く、上半はへら割り。
8	+	+		灰 黑 色	口縫部と天井部の縫で段をなし、焼を作り出す。口縫は丸い。
4	+	+		白 灰 色	口縫部と天井部の縫で段をなして、焼を作り出す。口縫は丸い。
5	+	杯 庫		灰 色	口縫部と天井部の縫で段をなして、焼を作り出す。口縫は丸い。
6	+	+		灰 色	口縫部と天井部の縫で段をなして、焼を作り出す。口縫は丸い。
7	+	+		灰 色	口縫部と天井部の縫で段をなして、焼を作り出す。口縫は丸い。
8	+	+		灰 色	口縫部と天井部の縫で段をなして、焼を作り出す。口縫は丸い。
9	+	加瀬瓦坏		青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
10	+	瓦 壁	Ⅷ-11	青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
11	+	加瀬瓦坏		青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
12	+	+	Ⅷ-11	青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
13	+	瓦 壁		青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
14	+	切 瓦 壁	Ⅷ-11	青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
15	+	+	Ⅷ-11	白 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
16	+	+		青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
17	+	瓦		白 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
18	+	瓦		青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
19	+	瓦		青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。
20	+	瓦		青 灰 色	口縫部は外方にひらがり、中ほどに焼を作り出す。焼部は丸い。

固有番号	筋 横	筋 形	出土区・部位	色 調	備 考
5 - 21	須 也 體	盤	V - 11	裸 色	額部に長方形の透しを配す。
2 2	ク	盤	V - 11	灰 色	口輪部上方でわざかにふくらむ瘤状形を呈し、口輪部に至る。
2 3	ク	透 环	V - 11	暗 灰 色	口輪部を下方に折り曲げる。
2 4	ク	ト	ト	ト	口線部を内側にひけで小さく折り曲げる。天井部上半はへら割り。
2 5	ク	鉢	V - 11	青 灰 色	口輪部をわざかに直立させ、口輪は斜めの平面を作り出す。体部はやや張り出す。
2 6	ク	盆台(身)	V - 11	黑 色	体部は直線的に斜め上方にひがる。底部は回転へら割り調整。
2 7	ク	身	ト	ト	体部はほぼ直線的に斜め上方にひがる。くろ引きのひだがある。
2 8	ク	身	ト	ト	体部は直線的に斜め上方にひがる。底部は回転へら割りである。
2 9	ク	(皿)	ト	ト	回転へら割りの底部から腰部が斜めに立ちあがり、口輪部は直立する。
3 0	ク	环 身	ト	ト	体部は直線的に斜め上方にひがり、口輪がわざかに外反する。
3 1	火薬筒器	柄	ト	ト	底部はへら割り調整を施す。底台は断面が菱形をなし、外方に開く。
3 2	ク	ト	ト	ト	底部はへら割り調整を施す。底台はわざかに外反し、底部はねじ。
3 3	ク	ト	ト	ト	底部はへら割り調整を施す。底台は外反し、底部はもじら、長い。
6 - 1	土 師 題	高 环	ト	ト	手筋と脚部の厚さする部分に筋も調整を施す。底部は円形の透し穴を1箇うがつ。脚部はへら割りで、他はなで調整を施す。
2	ク	盤	ト	ト	後なで腰部が傾いて日輪形をなす。中ほどに円形の透し穴を1箇うがつ。
8	ク	盤	V - 11	淡 橙 色	脚部の筋が傾いて日輪形をなす。内外面とも同じ腰部を施す。
4	ク	ト	ト	ト	把手。円形のものを斜め上方にむけてつける。手持のものをつける。熱帯は好物を多く貯める。
5	ク	ト	ト	ト	把手。二重形のものを斜め上方にむけてつける。内外両とも同じ腰部を施す。
6	ク	盤	ト	ト	制輪部は扇形をなす。輪盤み成形で、外側は「掌」掌などで調整を施す。
7	ク	ト	ト	ト	制輪部は扇形をなす。制輪ド片はへら割りを施す。把手は形状が多く異なる。
8	ク	ト	ト	ト	底筋が傾いて突出する。内側はへら筋りを施す。

後							
被服番号		種	場	器	形	被	色
6 - 9	土師器	壺	W	- 11	楕	褐色	直認為わざかに強ちり出す。全面なで調整。
10	φ	*	*	*	*	褐	直認為わざかに強ちり出す。下端は押しきられ砂土が外方へはみ出す。底面に始めて横幅縮付着。内底面はへら
11	φ	壺	W	- 11	楕	褐色	直認為わざかに強ちり出す。口端は押しきられ砂土が外方へはみ出す。底面はへら
12	φ	*	*	*	*	楕	直認為わざかに強ちり出す。口部内外面は模なで調整を施す。脚部は細かい別モチ数を施す。
13	φ	*	*	*	*	楕	直認為わざかに強ちり出す。口部内外面は模なで調整、脚部は細かい別モチ数を施す。
14	φ	*	*	*	*	楕	直認為わざかに強ちり出す。口部内外面とも丁寧な模なで施す。
15	φ	*	*	*	*	楕	直認為わざかに強ちり出す。口端は押し付けられ、砂土がはみ出る。なでによる調整を施すが強である。
16	φ	*	*	*	*	楕	直認為わざかに強ちり出す。口部内外面は模なで、内面は株の筋毛調整を施す。脚部は細かい別モチ数を施す。
17	φ	(楕 ?)	*	*	*	楕	直認為わざかに強ちり、下端は押しきられ、内面には模なで施す。
18	φ	(楕 ?)	*	*	*	楕	直認為わざかに強ちり、下端は押しきられ、内面には模なで施す。
7 - 1	須黒器	壺	W - 北共器	壺	楕	褐色	全体に丸みをもつ、火井部上半はへら前りを施す。火井部上半はへら前りを施す。
2	φ	*	*	*	*	青灰	天井部から縮平で、口部の壺にわざかに板を作り出し、口縁は直立する。天井部上半はへら前り。
3	φ	环	舟	*	*	白灰	天井部から縮平で、口部は丸い。受面はわざかに緩に突出し、縮平部はない。底部は丸みをおびる。
4	φ	無蓋舟小	*	*	*	白	天井部から縮平で、口部は丸い。受面はわざかに緩に突出し、縮平部はない。底部は丸みをおびる。
5	φ	舟	环	*	*	青灰	天井部から縮平で、口部は丸い。受面はわざかに緩に突出し、縮平部はない。底部は丸みをおびる。
6	φ	舟	环	*	*	青灰	天井部から縮平で、口部は丸い。受面はわざかに緩に突出し、縮平部はない。底部は丸みをおびる。
7	φ	*	*	*	*	青灰	天井部から縮平で、口部は丸い。受面はわざかに緩に突出し、外方へ張り出る。
8	φ	*	*	*	*	灰	天井部から縮平で、その部分に縫を作り出す。下端はわざかに厚厚し、外方へ張り出る。
9	φ	*	*	*	*	青灰	天井部から縮平で、口部は丸い。受面はわざかに緩に突出し、外方へ張り出る。
10	φ	*	*	*	*	青灰	天井部から縮平で、口部は丸い。受面はわざかに緩に突出し、外方へ張り出る。
11	φ	無白環	*	*	*	青	天井部から縮平で、口部は丸い。受面はわざかに緩に突出し、外方へ張り出る。

四肢番号	器種	器形	出子区・部位	色調
7-12	直歯類	歯	口鼻部	青灰色 褐灰色
13	♂	舌	+	青灰色 褐灰色
14	♂	肺	+	系統色
15	♂	+	+	黑褐色
16	♀	咽	+	灰 淡褐色
17	上咽部	喉	+	灰 淡褐色
18	♂	↑	+	♂ 系统色
19	♂	喉	+	口唇部がわざかに外反し、口輪は丸い。喉部外面と咽部中ほどに筋毛調整を施し、筋は横なり複数である。
20	♂	↑	+	口唇部が大きめで外反し、口輪はわざかに上方に突出する。喉部外面は丁寧な模様で羽翼を施し、喉部内面は筋毛調整である。
21	♂	↑	+	圆形は同じ。喉部外面に太い筋毛群がわざかに残る。
8-1	直歯類	环	口輪部	黑色 青灰色 黑灰色 灰 黄灰色 黑色
2	♂	↑	+	たらあからいは円柱型で、口輪は丸い。受卵部は斜め上方にのびる。受卵下方に疣脚が1条めである。腹部はへら前り調整を施す。♂は筋毛が多く残じる。
3	♂	↑	+	口唇部が大きめであるのが、筋は細は直角筋である。受卵は斜め上方にのびる。下腹部はほらくりきのひだが目立つ。
4	♂	↑	+	たらあからいは円柱型で、細い。受卵は斜め上方にのびる。受卵下方は直角筋となり、下腹部に至る。
5	♀	环	口輪部	黑色 青灰色 黑灰色 灰 黄灰色 黑色
6	♂	↑	+	たらあからいは内側してのびる。受卵はわざかに残さない。丸みをもった影響で、天井部上半はへら前り。
7	♂	↑	+	小型で、体壁上部が腫に盛り出し、(沈縛が1条め)で直した時に瘤部をつける。腹部はへら前りを施す。直面に「N」の頭部がある。
8	♂	直歯類环	口輪部	黑色 青灰色 黑灰色 灰 黄灰色 黑色
9	♂	喉	+	上縫はゆるやかなV字があり、外方に聞く。口輪部前面には筋毛が1条めぐり、外面部には筋を下り出す。喉部は上方に直角筋で、後方には筋筋膜の大く開き、喉部には筋を下り出す。喉部中央に弓筋孔をうちらる。その周囲4箇所が凸シンド形に切り取る。
10	♂	垂	口輪部	黑色 青灰色 黑灰色 灰 黄灰色 黑色
11	♂	↑	+	上縫がわざかにくびれたが、口輪部は直角筋にのび、口輪部および内面に筋が別り筋を施す。外面部には筋膜の筋がかかる。扁平な天井部に直立する口輪部を作り出す。外面部には筋膜の筋がかかる。

因数番号	器種	器形	出土区・測位	色調	備 考
8-12	須惠器	瓶	月-南月湖	黒褐色 灰茶色	底部はへら削り調整を施す。底台は外方に張り出しそれが後影をなす。底土は砂質を含む。
13	土師器	壺	+	+	口縁部は直線的に外方に開く。底面内面に細かい泡も調節を施し、口縁部内外面は直線形で、口縁部および口縁部内面に細かい泡も調節を施す。底面内面は外方に張り出する。
14	土	+	+	+	口部は直線的に外方に開く。「脚が突出し、口縁部を施す。口縁部内面は外方に張り出る。底面内面は細かい泡も施す。
15	土	+	+	+	口部は直線的に外方に開く。口縁部は斜めである。底面内面に細かい泡も施す。
16	土	(説杯?)	+	+	口部は丸みをおびて、口縁部はややかく気味ある。手で、輪郭線を作り出す。口縁部内面は外側に残る。全面面で調整を施す。
17	土	瓶	+	+	口部は丸みをおびて、底土は砂質が多く施じる。
18	土	+	+	+	底土は砂質が多く施じる。
19	土	(壺)	+	+	底土は砂質多く施じる。底土は砂質が多く施じる。
9-1	須惠器	杯	面	T-4	天井部と口縁部の間に斜面を作り出し、口縁部は直立でのび、張い。口縁部内面を斜めにし、口
2	土	杯	身	+	たちあがりはわずかに内傾し、底へのびる。口端内側に設を作り出す。受部は斜め上方にのびる。
3	土	+	+	+	たちあがりは内傾し、底へのび。受部は斜め上方にのび、端部は堅い。底面はわずかに丸みをもち、底面はへら削りを施す。底土は砂質が施じる。
4	土	+	+	+	底面は直立状味である。底部は丸みが施され、底部は斜めへら削りを施す。斜先面に黒色の滑出が見られる。
5	土	+	+	+	底面は直立状味である。底部は丸みが施され、底部は斜めへら削りを施す。
6	土	底台付身	+	+	斜切りした後手持ちへら削りを施した底部から、ゆるやかに外反して立ちあがる体部をもつ。内底面には折詰痕が残る。
7	土	+	+	+	底面は斜切りの後底部へら削り調整を施す。
8	土	+	+	+	底部は直線的にたちあがり、口縁部はやや外反し、端部は丸い。底面は斜めへら削りの後削毛調整を施す。
9	土	台白灰身	+	+	体部は直線的に斜め上方にのび、口縁部はややくびれる。底面はへら削り調整を施す。高台は外方に張り出し、斜面部を施す。
10	土	杯	蓋	+	底面は丸みをつける。天井部は全面へら削りを施し、ゆるやかに下がり、口縁部を下方へ折り曲げる。
11	土	+	+	+	底面は丸みをもつ天井部に、下方へ折り曲げたはね筋をつける。天井部上半はへら削り。
12	土	+	+	+	ゆるやかな丸みをもつ天井部に、下方へ折り曲げたはね筋をつける。
13	土	+	+	+	ゆるやかな丸みをもつ天井部に、下方へ折り曲げたはね筋をつける。

試験番号	器種	形態	部位	性別	年齢	著
9 - 14	垂直器	瓶	环	口	灰色	把手。先端の尖る棒状のものを斜め上方にむけてつける。前面は叩きを施す。
15	上部器	直	环	口	深褐色	舌状突起が環に立ち上がり凹面をなす。前面はへら削りを施し、先は掌状で溝を施す。
16	垂直器	瓶	直	口	灰色	口部の側面には外方に突き、背面は丸みをもつ。内外面とも横たて輪郭を施す。
17	垂直器	直	直	口	深褐色	蝶形の側面には外方に開く口を開ける。腹部外側は墨なし。内面は掌状の筋毛構造の後端などで溝を施す。
22	垂直器	环	直	口	黑色	筋毛部は細かい筋状の指詰である。前面は上方が直角で下方はへら削り。中ほどは掌状で溝を施す。
23	垂直器	直	直	口	黑色	扁平な天井面は丸みをもつて口縫部がひかる。その裏に段をして棒を作り出す。天井面はへら削り。
24	直	直	直	口	黑色	うちあがりは直立し、口端は尖り気味である。受部は側にのみ、漏部は前方のみ。底部は扁平で、へら削りを施す。
25	直	直	直	口	黑色	うちあがりは外側傾し、「縫部」は直立気味である。受部は斜め下方にひかる。受部下方に棘を作り出し、底部は斜め下方に棘を作り出す。背面とともに丸られる。
26	直	直	直	口	黑色	うちあがりは直立し、受部は側にのみ。直部は斜平である。
27	直	直	直	口	黑色	低い舌脚で、外方に大きく開き、棘側に至る。
28	直	直	直	口	黑色	頭の張った体型で、やや外方に聞く口縫部をつける。
29	直	直	直	口	黑色	蝶形の腹面に、ワッカ状に開く複数をつけ、口縫部を作り出す。前部は、側面に別の粘土をあてて成形し、一日干ががら、裏部をつける。表面は柔軟で、内面は軽かく引毛溝を施す。裏部の中央はがむしゃらである。
30	土師器	直	直	口	黑色	口端は上方に突出し縫跡をつくる。外側は鈍然で、内面は軽かく引毛溝を施す。
31	直	直	直	口	黑色	本物の胎毛溝を施す。
10 - 1	深垂直器	环	直	口	灰色	全体に丸みをもち、水が溜とは蝶形の側に隙をして液を作り出す。口縫部はゆるやかに曲線を描いておるが、口
2	直	直	直	口	黑色	内面は上面を取る。天井面はへら削りを施す。
8	直	直	直	口	黑色	天井面はへら削りを施す。口縫部は斜め下方にあり、漏部は良い。
4	直	直	直	口	黑色	うちあがりは内側でのび、受部は斜め上方に張り出する。受部下方は鈍なれかめぐる。底部はへら削り。
5	直	直	直	口	黑色	うちあがりは直江氣味で、受部下方に穴を開けた。底部はへら削り。
6	直	直	直	口	黑色	うちあがりは内側でのび、受部はへら削り。
7	直	直	直	口	黑色	うちあがりは内側でのび、受部はへら削り。

図版番号	器種	基形	出土区・層位	色調	備考
10 - 8	漆患器	坪身	W - 10	暗灰色	たらあがりは内傾し、短かい。受部はわずかに突出し、下方に弦縁を2条めぐらす。
9	φ	φ	φ	青灰色	たらあがりは直線で、受部は斜め上方にのびる。受部下方に弦縁を1条めぐらす。
10	φ	φ	φ	黒灰色	たらあがりはわずかに内傾し、受部は横にのびる。底部は扁平である。
11	φ	φ	φ	灰 灰褐色	たらあがりは短く、口縁部内面を面取りする。底部は扁平で、へら割りを施す。
12	φ	φ	φ	灰褐色	たらあがりは内傾し、口縁は丸い。底部は扁平である。
13	φ	真 真	φ	端状色	中はほどに弦縁を2条めぐらし、上下2段状方形容を三方方に施す。
14	φ	φ	φ	青灰色	端部が強めにび、端部を折り曲げ縫合を作り出し、様式上方に弦縁を1条めぐらす。
15	φ	漆素筒形	φ	黒灰色	端部はゆるやかに丸みをもつたちがいり、口縁部下側に弦縁を1条めぐらす。外面に縫を作り出す。脚部はゆるやかに開く。把手は斜形が施される。
16	φ	φ	φ	φ	同上。
17	φ	真 真	φ	青灰色	漆部中ほどと脚部との間に弦縁をめぐらす。脚部は細身である。
18	φ	φ	φ	φ	脚部は大きく開き、脚部をわずかに折り曲げ縫合を作り出す。中ほどに弦縁をめぐる。
19	φ	φ	φ	青灰色	前部は大きく開き、縫合に至る。
20	φ	φ	φ	φ	脚部は大きく開き、脚部を作り出す。
21	φ	φ	φ	灰 灰色	脚部は大きく開き、斜め下方にひらがり縫合を作り出す。中ほどに弦縁をめぐる。
22	φ	φ	φ	φ	脚部は大きく開き、斜め下方にひらがり縫合を作り出す。中ほどに弦縁をめぐる。
23	φ	φ	φ	φ	同上。
24	φ	漆 漆筒形	φ	黒灰色	脚の張った圓筒形の体部に、直立する口縁部をつける。蓋部と体部に浅い弦縁がめぐる。
25	φ	壺	φ	青灰色	口縁部がゆるやかな曲線を描いて外反し、口縁部を作り出す。
26	φ	壺	φ	白灰色	把手。斷面が円形の棒状のものをつける。
27	φ	φ	φ	φ	同上。
28	φ	φ	φ	φ	把手。つけ板が縦にのびる板状のものをつける。

調査部位	器種	器形	出土区・側位	色調	備考
10 - 29	漆器 瓢	瓢	W - 10	白灰色	把手。断面V切形のものをつくる。
80	瓢	々	々	暗灰色	底部。中央に瘤上の部を1本残したものとみられる。
81	瓢	壺 直	々	青灰色	扁平な底、つまりをつける。天井部と口縁部の間に後を作り出す。天井部上半はへら削りを施す。
82	瓢	々	々	黒灰色	円錐形のつまりをつける。口縁部内側にかえりを有する。
83 - 84	瓢	々	々	々	扁平な円錐形のつまりをつける。
85	瓢	々	々	々	扁平錐形のつまりをつける。天井部は丸味をもち、口縁部を下方へ折り曲げる。天井部上半はへら削り。
86	瓢	々	々	黑色	圓錐形のつまりをつける。天井部上半はへら削り。
87	瓢	々	々	暗灰色	扁平な円錐形のつまりをつける。
88	瓢	々	々	々	口縁部を下方へ折り曲げ、口縁は鋸い。
89	瓢	々	々	々	扁平な形態で、口縁部を下方へ折り曲げる。
40	無口环身	々	々	赤褐色	底面は当地へら削りを施し、腰部が腹に張り出し、腰輪部に外方へ開く「口縫形を作り出す。
41	瓢	々	々	褐色	腰輪部は当地へら削りを施す。体部は上方へ張り出す。
42	有口环身	々	々	黑色	底部は四面へら削りを施す。体部は直線的に外方に開く。底台は、下端が外方へ張り出す。
43	瓢	々	々	黑褐色	腰輪部は四面へら削りを施す。体部は直線的に外方に開く。腰部は斜め上に開く。
44	瓢	々	々	暗灰色	腰輪部は回転へら削りを施す。体部は直線的に外方に開く。腰部は斜め上に開く。高台は低い。
45	瓢	々	々	白色	腰輪部は斜め上に開く。腰部は斜め上に開く。高台は直線的に外方に開き、口縁に半周面を作り出す。
46	瓢	々	々	黑褐色	腰輪部は回転へら削りを施す。体部は斜め上に開く。高台は直線的に外方に開き、腰部は斜め上に開く。高台は直線的に外方に開き、失かる。
47	瓢	々	々	暗褐色	腰輪部の底のもので、底面は回転へら削り腰部を施す。高台部分は四角形をなす。
48	瓢	々	々	黒灰色	底面は回転へら削り腰部を施す。体部は斜め上に開く。高台表面に内外両方向からへら削りを施す。
11 - 1	無口环身	々	々	暗褐色	斜め上に開く底部から斜め上方にたらかる体部をもつ。
2	瓢	々	々	淡褐色	斜め上に開く底部から斜め上方にたらかる体部をもつ。

段数番号	器種	器形	出七区・審定	色調	備考
11 - 3	深惠器	平盤	Ⅲ - 10	黄灰色	口縁部が折め上方に直線的に傾き、口縁部がわざかに外反する。
4	灰陶角器	蓋	+	白灰色	扁平な天井部に、下方へ折れ曲がつてのびる口縁部をつくる。天井部に朱褐色の灰施がかかる。
5	深惠器	細頸瓶	+	灰色	口縁部は斜め上方に傾き、口縁部はさりに丸みをもつて外反し、口縁下方が折れ曲がり出す。
6	灰陶角器	広口瓶	+	白灰色	口縁部はゆるやかに丸みをもつて外反し、口縁下方がわざかに突出し、口縁部を作り出す。内外面に朱褐色の灰施がかかる。
7	深惠器	瓶	+	灰色	耳(把手)の部分、断面形状の粘土を弄くつける。腹部に引き目が残る。粘土は砂礫が混じる。
8	灰陶角器	+	+	白色	灰施はへら折り施塗を施す。底部は外方に張り出し、下端内面は縮く失かる。
9	+	+	+	白色	腹部と底部が折りし、直線的である。腹部はへら折り調整を施す。
10	+	+	+	白色	測上で、灰施を断面毛筆りによって施す。
11	深惠器	盤	+	白色	裏面は同品へら折り調整を施す。体部は扁平で、口縁部を折り曲げ施塗を作り出す。萬台は外反し断面が菱形をなす。
12	+	+	+	白色	裏面は回転へら折り調整を施す。萬台断面は圓筒形をなし、下方が外へ張り出す。
13	+	+	+	白色	10 - 11と同じ。
14	+	+	+	黑色	裏面は上。
15	+	+	+	黑色	体部は扁平で、口縁部がわざかに折りし、腹部は低い、高台は外反し、断面が菱形をなす。
16	+	+	+	黑色	糸切りの底部から、斜め上方にのびる体部をもち、口縁部内側を取りする。脚窓は低い。脚窓は砂粒が混じる。
17	+	瓶	+	黑色	直立する脚状の台脚部分で、厚みがある。
18	+	+	+	黑色	同上。體の底部は黒い。
19	+	瓶	+	黑色	丸みをもつ瓶形にて、直す口縁部をつける。口縁は丸みをもぎてわざかに外方に突出し、平底部を作る。
20	+	瓶	+	黑色	体部は丸みをもたら、口縁が肥厚し丸くなる。外面はへら折り開口部を出す。
21	+	+	+	黑色	体部は斜め上方に立ちあがり、口縁部が曲折し外反する。
22	灰陶角器	+	+	白色	底部はへら折り調整を施す。萬台断面は四角形。内面に灰施が薄くかかり、他の口縁部片が付着している。
23	+	(瓶)	+	+	底面はへら折り施塗を施す。萬台断面は菱形をなし、脚窓は殆ど。

河床番号	品種	器形	出土区・部位	色調	備考
11-24	灰褐色器	碗	Ⅷ-10	白灰色	底部はへら割り調整を施す。高台は内外面ともに丸みをもつ三日月彫台がつく。内部面に重ね焼きの跡がある。
25	ク	舟形皿	*	*	縁部が広く、裏面にも段を作する。高台は円外面とも丸みをもつ二日月彫台がつく。底面へら割り。
26	ク	碗	*	*	底面はへら割り調整を施す。高台は内部に丸みがなく、外側が強引して様子をなす三日月彫台がつく。底面を削毛焼
27	ク	口壺	*	*	底部はへら割り調整を施す。高台は下方が厚所し腰をなす。底部を削毛焼によって施す。
28	ク	口壺	*	*	白灰色
29	ク	広口壺	*	*	糸切り底で、わざかに肩の張る体形を有する。
12-1	土師壺	(墨?)	*	淡褐色	小形の土瓶。外面は平滑で、内面は削毛焼が残り、下端は厚く刃状を残す。
2	ク	画环(六角)	*	褐色	台脚が斜め下方に開き、斜面部が円錐形を有する。内外面ともへら割りし、外延はなで調整を施す。
3	ク	(六角)	*	淡褐色	口錐部の剥離片で、断面が四角形状の凸形がめぐる。
4	ク	瓶	*	褐色	断面がほぼ円形の把手をつける。瓶外部は太大的削毛調整を施す。内面には輪郭みの痕が残り、なで調整を施す。外面に縦び付着する。
5	ク	瓶	*	褐色	斜め上方に開け口頭部をつける。内外面ともなで調整を施し、瓶頭内部に横の筋目がみられる。
6	ク	口壺	*	褐色	口底が頭部ほどよりも大きくなるものである。口錐部内面と瓶頭外部に見ていて深い削毛調整を施す。底部は丸子である。
7	ク	口壺	*	褐色	底部が直角状にたらがあり、口錐部は反し、口錐部を作り出す。口錐部は傾んで、他は細かい削毛調整を施す。
8	ク	口壺	*	褐色	断面三角形状の口錐部を作り出す。頭部は細かい筋を施す。頭部は丁寧な様子で施す。堅い。
9	ク	口壺	*	褐色	口錐部が肥厚し、頭部は薄手である。削面に深い削毛調整を施す。底土は砂粒が多く混じる。内面黒色。
10	ク	口壺	*	褐色	シャープな口錐部を作り出す。
11	ク	口壺	*	褐色	口錐部が斜め上方に大きく開く。頭部に細かい削毛調整を施す。器体は薄い。
12	ク	口壺	*	淡褐色	外面に指詰燒の模様の残る手づね土器。外面全体に擦れが付する。始土は砂粒を多く含む。
13	ク	口壺	*	褐色	口錐部が肥厚し、断面円形の凸等をつける。口錐部は偏心で凹凸を作り出す。始土は砂粒を含む。堅い。
14	ク	口壺	*	淡褐色	口錐部が横に開き、腹部は緩く尖がる。内外面ともなで調整を施す。始土は砂粒を多く含む。器体は薄い。
15	可憐器	杯	八角出付口	青灰色	継ぎ平な土井部と長い格子線との間に断面三角形の波を作り出す。口錐部は直立気味にので、残部に筋を打ち出す。天井部は餘近くまでへら割り調整を施す。

参考									
器物番号	器種	器形	出土区・測位	色	画	文	水滸	出土区・測位	色
12-16	土師器	広口壺	支水溝	褐色	無	9	W - 9	支水溝	褐色
13-1	須恵器	坛	塙	褐色	無	+	2	W - 9	褐色
				褐色	無	+	3	W - 9	褐色
				褐色	無	+	4	W - 9	褐色
				褐色	無	+	5	W - 9	褐色
				褐色	無	+	6	W - 9	褐色
				褐色	無	+	7	W - 9	褐色
				褐色	無	+	8	W - 9	褐色
				褐色	無	+	9	W - 9	褐色
				褐色	無	+	10	W - 9	褐色
				褐色	無	+	11	W - 9	褐色
				褐色	無	+	12	W - 9	褐色
				褐色	無	+	13	W - 9	褐色
				褐色	無	+	14	W - 9	褐色
				褐色	無	+	15	W - 9	褐色
				褐色	無	+	16	W - 9	褐色
				褐色	無	+	17	W - 9	褐色
				褐色	無	+	18	W - 9	褐色
				褐色	無	+	19	W - 9	褐色
				褐色	無	+	20	W - 9	褐色

測定番号	測定器	器形	出土区・層位	色調
13-2-1	上 手 器	壺	Ⅳ - 9	灰褐色
22	手	*	*	灰褐色
23	手	*	*	褐色
24	手	*	*	褐色
25	手	*	*	褐色
26	手	*	*	褐色
27	右付壺	*	*	褐色
28	手	*	*	褐色
29-8-9	(壺?)	*	*	*
14-1	須惠器	瓶 环	Ⅳ - 8	灰 色
2	手	*	*	青灰 色
3	手	*	*	青褐色
4	手	*	*	黑色
5	手	*	*	褐色
6	手	*	*	褐色
7	手	*	*	褐色
8	手	*	*	褐色
9	手	*	*	褐色
10	手	*	*	褐色
11	手	有口环身	*	青灰 色
12	手	*	*	灰 色

回数番号	船種	船形	出上区・脚位	色調	備考
14 - 15	ナシ船	杯舟	Ⅷ - 8	緋色	形状が大きく、縫め上方には長い体部をもち、口縫縫を作り出す。内外面とも丁寧な回船などで調整を施す。
14	須恵器	杯舟	*	緋灰色	天井部は平らでへら割りを施す。口縫縫は船底の縫いかいを引き出す。
15	トトロ	笠	*	黒灰色	武部はへら割り。底く歩め上方に開く体側に丸く折り曲げた口縫縫を作り出す。両台断面は四角形をなし外反する。
16	トトロ	笠	*	青灰色	体部は底く折れ的に開き、口縫縫外面に像を作り出す。両台断面は仰の形で縫縫はシャープである。底部はへら割り。
17	トトロ	笠	*	黒灰色	体部はわざかに丸みをもつ、口縫縫は真江氣味である。断面四角の高台をつける。底部はへら割りで透徹の斜印がある。内正面に墨ね地き、口端下面が突出し、口縫縫を作り出す。口縫縫内部は丁寧ななで調整を施す。側面は
18 - 19	七輪器	焼	*	灰褐色	は底は大きく外反し短い、口端下面が突出し、口縫縫を作り出す。口縫縫のものはい前毛である。
20	トトロ	笠	*	黒褐色	口縫縫内側と側面外側に縫い跡を施す。口縫縫のものはい前毛である。
21	トトロ	笠	*	青	細かく外反する口縫縫を作り出す。側面は夷い前毛調整を施す。内面に夷い前毛がみられる。
22	トトロ	笠	*	灰褐色	小窓のもので、底部に黒く夷い前毛調整を施す。
23	トトロ	笠	*	黑色	底部に削毛調整を施す。底土は粉砂多く底じる。外側に張り引着する。
24	トトロ	笠	*	灰	體部と脚部に荒くて深い前毛調整を施す。
25	トトロ	笠	*	赤褐色	底部の脚部に訂正する口縫縫を施す。口縫縫内側と側面外側は刷毛塗りで脚部内面はへら割りによつて整形する。
36	天祐陶器	圓	*	白灰色	底部はへら割り調整を施す。両台断面は四角形。内面に足輪は刷毛塗りによって厚く施す。
37	トトロ	笠	*	灰色	底紙はへら割り。三日月形の高台をつける。刷毛塗りによつて足輪を施す。
38	トトロ	笠	*	白灰色	底紙はへら割り調整を施す。三日月形の高台をつける。刷毛塗りによつて足輪を施す。
39 - 41	トトロ	笠	*	白灰色	口縫縫はわざかに外方に突出する。口縫縫がわざかに折り返されをなす。底部はへら割り調整を施す。底白は外方に足輪を施す三日月形のものとする。側輪は刷毛塗り。
42 - 43	トトロ	笠	*	青	口縫縫をくぐり、底は同じ。
44	トトロ	笠	*	青	底部はへら割り調整を施す。両台下端をシャープに作り出す。
45	トトロ	圓	*	青	体部は丸みをもつ、口縫縫はない。底部はへら割り調整を施す、二日月形の底白がつく。熟輪は裏け掛け。
46	トトロ	圓	*	白灰色	口縫縫がわざかに外反する。底台はト耐の丸いもののがつく。底部はへら割り。
47	トトロ	笠	*	青	底紙はへら割り調整を施す、二日月形の高台がつく。熟輪は刷毛塗り。

内体筋付	滑 隆	器 形	出上区・胸骨	色 濁	備 考
14—48 4.9	灰軸角器	輪	骨—8	白灰色	頭部はへら割り調整を施し、三日月形の高台がつく。脚部は削毛なり。 体部と高台のつけ目はえぐりを入れる。底面は斜切りのままである。
15—1 2	須毛器	环 爪 直	Y—8	灰色	たちあがりはわざかに内側へへら割り。蓋部は丸みをもち深く、底面はへら割りを施す。 円錐形のつまみをつける。天井部上半はへら割り。
3	輪	輪 直	*	*	口縫部を下方へ折り曲げる。
4	*	*	*	*	錐形のつまみをつける。天井部上半は扁平部でへら割り調整を施し、下半はゆるやかに丸みをおびて横部に平らる。 口縫部を下方内側にむけて斜めに削る。
5	*	鉢	*	*	錐形の丸みのある体型に、わずかに外反する短い口縫部をつける。
6	*	*	*	*	へら割り開闊され、ややくらみをもつた腰部から、頭部が斜め上方に直立倒立形にのび、口縫部はわざかに内側へ折り曲がり、頭部は丸い。
7	*	有毛環身	*	*	口縫部をくぐり、器底の底なものとみられる。高台はへら割り調整を施し、断面が四角形をなす高台をつくる。
8	*	無凹环身	*	*	体部は斜め上方にのび丸くおさまる。高台は外側に張り出し、丸みをもつ。
9	*	無凹环身	*	*	静止糸切り度で、腰部は丸みをもち、口縫部は斜め上方に開く。
10	*	輪	*	*	体部上半はわざかに丸みをもつ。口縫部に平坦部を作り出し、外側に丸くをを入れる。腰部はほどに叩きを施す。 尾は丁寧なほどで調整を施す。把手粗。
11	灰軸角器	輪	*	*	蓋部はへら割り調整を施す。輪行部は三日月形をなす。
12	*	*	*	*	頭上。内底面に削毛なりによる擦損がみられる。
13	*	*	*	*	高台頭部が丸い。
14	*	環	*	*	蓋部へら割り。頭部と体型の間にえぐりを入れる。
15	*	环 直 高	*	*	口縫部の相対する2面を円錐へ深く折り曲げる。糸切孔である。内底面に淡褐色の擦が厚くかかる。 頭部は斜め下方に開き、頭部は円錐形をなすものとみられる。中ほどは円形の透きを1個うがつ。外側はなく、 高台部の頭部とみられる。
16—1 2	土師器	环 直 高	*	*	圓平な天井部に直立する口縫部をつける。その頭はわざかに段を作り出す。天井部上半はへら割りを施す。口縫は尖る。 たちあがりは内側へへら割り。丸くおさまる。要底の輪部は丸い。

器物番号	器種	絶形	出土区・層位	色調	備考
16-3	須恵器	杯 身	見一 2	灰褐色	たちあらはは内壇し、口縁部は外壇して立柱する。口縁部内側に化粧をしまめぐらす。受部は横に張り出し、受部は底下方に縫を作り出す。底部は圓形で、器高は低い。
4	+	杯 环	見一 2	灰 色	杯は直線的に斜め上方に向かひ、上がりで開口し、そこには底縫をしまめぐらし、上方は直立し、口縁部は外反して張り出す。底部は底く、大きくひらがり縫部に至る。
5	+	+	+	+	縫部が大きくひらがり、縫部を上方にねじて段を作り出す。
6	+	瓶 环	見一 2	青灰色	縫部の縫部に施く縫を作り出す。縫部上方に化粧を2条めぐらす。下半は手柄へら割りを施す。
7	+	瓶 瓶	見一 2	系褐色	縫部の縫部に、ゆるやかに外反する頸に口縁部をつけた。口縁部はシャープである。縫部は切きを施し、内面は把手付の大手縫。断面椭円形の把手を相対して2面所につける。平らな底盤から、斜め上方に直線的にたたらがあり、口端は縫を作り出す。体部下部および底盤はへら割り調査を施す。
8	+	瓶 瓶	見一 2	青灰色	円錐形のつまみをつける。大手縫はわざかに丸みをもつ。
9	+	瓶 瓶	見一 2	灰 色	宝珠形のつまみをつける。大手縫は下方へ折り曲げる。天井部上半へ割り。
10	+	环 瓶	見一 2	+	簡平な寶珠形のつまみをつける。天井部は丸みをもつ。天井部はへら割り。
11	+	+	+	湖褐色	斜め上方に縫を作り出す。
12	+	+	+	青灰色	斜め上方に縫を作り出す。
13	+	瓶	見一 2	黑灰褐色	斜め上方に縫を作り出す。
14	+	瓶	+	白色	斜め上方にびびる縫状の把手をつける。
15	+	舟 身	見一 2	灰褐色	体部中ほどで屈曲して、たちあがり、丸くおさまる。舟上は砂粒が混じる。
16	+	舟身	見一 2	黑色	体部は斜め上方にびびる。底面はへら割り。底面は外方に張り出し、縫部内側が上かる。
17	+	瓶	見一 2	青色	体部はゆるやかな曲線を描いてたちあがり、直線的中の複数に張る。体部と面部の間にえぐりを入れる。底面はへら割り。
18	+	瓶	見一 2	系褐色	口縁部を上方に折り曲げ、経路を作り出す。舟部は外方に張り出し、縫部内側が上かる。底面は糸切りのまま。
19	+	+	+	黑色	黒緑色の釉が面部全体にかかる。
20	+	+	+	黑褐色	口縁部を上方に折り曲げ、経路を作り出す。体部はほくろ引きのひだが目立つ。底面は外方にひらがり、断面調査を行なう。
21	+	+	+	黑褐色	口縁部をねじて上方に折り返す。舟部は砂粒が多く混じる。
22	+	+	見一 2	+	縫部を上方に折り曲げ、縫部を作り出す。舟部は外方に張り出し、断面調査をなし、断面調査を行なう。
23	+	瓶	+	白衣色	底面が円錐形に張り出し、縫部下方に底盤が1条めぐる。底面中央に直径3mmの1孔をうがつ。

既往歴	器種	器形	出土区・所位	色調	備考
16 - 24	須恵器	盤	Ⅲ - 2	褐	扁平な不規に、むずかに外方に開く高目の口縁をつける。底面には、上下2箇一対の孔を四方向に配するのみ。
25	*	碗	*	黒褐色	底面へ割り調整を施す。底面には、むずかに外方に開く高目の口縁をつける。底面は、口縁部はわずかに外反する。
26	火拂陶器	有段皿	Ⅲ	青灰色	体部はわざかに丸みをもち、口縁部はわずかに外反する。
27	*	碗	*	青灰色	体部内側に段を作り出し、口縁部を4箇所折り返す。底面外側方に量を作り出す。底面は、口縁部はなく調整を施す。底面は、丸みをもち、口縁は、よくわかる。底面は、へら削り調整を施す。底面外側は、よくくらみをもち、脚部は、えい、体部と高台の間に、えぐりを入れる。脚毛唐うによる施釉。
28	*	*	*	青灰色	底面へ割り調整を施す。高台外沿に段を作り出す。斜毛唐うによる施釉。
29	*	*	*	*	底面へ割り調整。高台は、めが外方に強引に作り出す。
30	土師器	法口壺	*	青色	小型のもので、瓶頭部のところは、壺形の割部に、直線的に斜め上方に長くのがる口縁部をつける。口縁部の外側面は、横なで調整を施す。
31	*	盤	*	青色	横状の斜め上方にのびる把手。割部へ差し込む円形の突起がある。
32	*	*	Ⅳ - 2	青灰色	直立気味の割部で、口縁は半張である。口縁部内側は、横なで、他は、則毛唐うが施じる。

第5章 松崎貝塚出土の人骨について

京都大学・靈長類研究所 教授 江原昭善
技官 木下 実

1 人骨の出土状況

人骨のみ届けられたもので、出土状況については第4章第2節の3によられたい。

2 人骨の保存状態

人骨の骨質保存状態は、かならずしも良好とはいえないが、収集されたものは破損・そう失しているにもかかわらず、かなりしっかりしている。

頭骨では下顎骨左半部がほぼ完全に残っており、骨質保存がよく、剖面が新鮮であること、それにひきかえ、頭骨の他の部分は、本来残りやすいにもかかわらず、その骨片すら見当らない。

椎骨は破損しやすい部分であるが、胸椎（Th₃）、腰椎（L₂）のみ完全で、他は破損もしくはそう失している。

肩甲骨および寛骨などの扁平部はそう失し、関節部分が1部残っているにすぎない。

その他、手足の諸骨は、もともと保存されやすい部分であるが、小骨であるため、これらもすべてそう失。

以上総合すると、当人骨は発見・出土時から収集時までのあいだに、かなり破損・そう失したと考えざるを得ない。

3 人骨同定

すでに述べたように、当人骨はかなり散逸的であるが、重複部分がないこと、性別が一定していること、年齢的に大きなくらい違いがないことなどから、同一個体とみなしてよいであろう。つまり一体分の人骨である。

4 性・年令について

下顎骨では、I₁ I₂ は脱落そう失しているが、C P₃ P₄ M₁ M₂ M₃ がそのまま残存している。すでにM₃（俗に親知らず）は完全に萌出し、かすかに咬耗がみられることから、すでに思春期後に多少の年月を経過したものと考えられる。

右鎖骨の胸鎖関節部では、まだ軟骨部が残存していたらしいが、その他の骨の部分は、すでに社

年期に近かったことがうかがえる。

腰椎（L₂）、寛骨臼などには少量の石灰沈着がみとめられる。

鎖骨・肩峰・長管骨の筋付着部の発達などから、ほぼ男性とみなしてさしつかえない。

以上総合すると、「思春期を2～3年経過した男性」ということになろう。

5 人骨の特徴と時代決定（図版37）

頭骨では、残念ながら下顎骨左半部が残存しているのみである。

歯列弓に乱れはなく、第3大臼歯は歯列弓上にある。歯牙の咬耗はあまりつよくないが、鉗状咬合だったことを示す。龋齒は見当らない。

下顎骨下縁の形態は、Keiter II型で古墳時代から江戸時代にかけて、とくに多いタイプである（50%以上）。

切歯部上面観は、Keiter II型で、とくに古墳（58.8%）、鎌倉期（64.5%）に多い特徴である。

下顎角はSchultz I型に属し、このタイプは室町時代でもっとも多い（62.5%）。

下顎枝後縁はSchultz I型で、各時代で50%以上を占めるが、とくに古墳～室町期は70%以上においてみられるタイプである。

顎三角の形状はSchultz V型で、古墳（52.9%）、鎌倉期（51.0%）に多くみられる特徴である。

下顎前内部ではFovea incisivaがやや発達して、Torus transversus superior、（上横行隆起）の上縁部に少し入り込んでいるが、Torus自体は左右連続しているものと思われる。以上の特徴からみれば、この下顎骨は绳文時代と現代を除外して考えてよい。

下顎枝は相対的にかなり大きくなる（枝高6.2mm、枝幅4.2mm）、これに匹敵する時代群としては古墳時代がこれに該当する。

軸幹・四肢骨については、保存不良のため十分に形態学的吟味に耐えることができないが、肩甲骨の肩峰部、鎖骨などの発達はよく、男性的であることを示しているが、とくに左右の発達度がいちじるしく違っていることは特筆に値しよう。つまり、右側の発達がつよく、單に右利きというだけでなく、かなり右手を多く使用したものと考えられる。

なお、右上腕骨の遠位・近位両端が破損しておらず、最大長27.8mm、これを基に身長を推定すると157.6.9±4.2.5mmとなる。

以上総合すると、考古学的知見とも照合して、奈良時代の25才前後の男性と考えても、矛盾しないといえよう。

第6章 松崎貝塚出土鉄塊分析結果

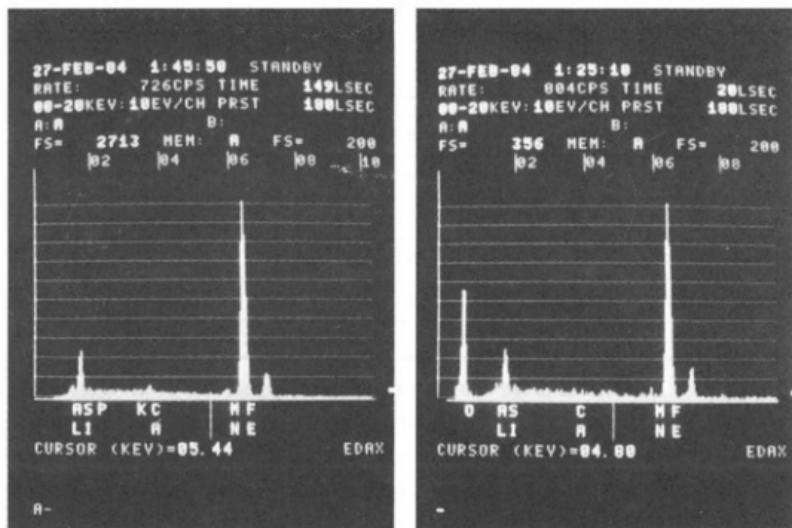
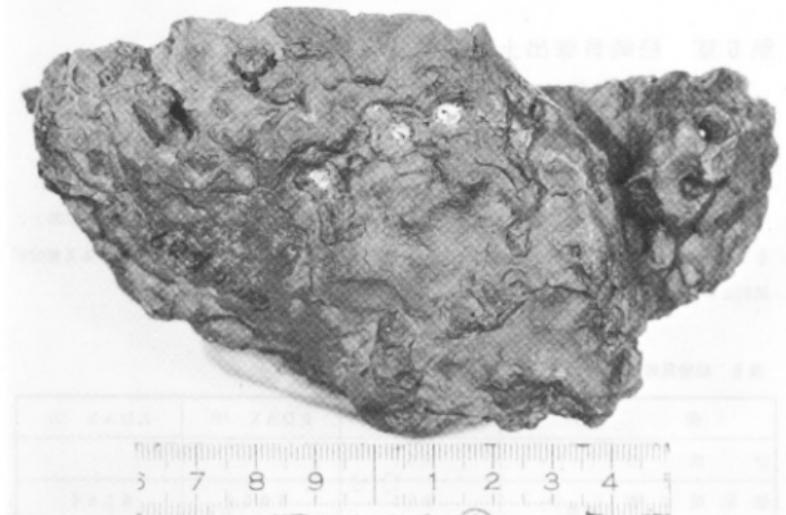
新日本製鐵株式会社 中央研究本部 名古屋技術研究部

東海市大田町所在の松崎貝塚より出土した鉄塊のうちⅡ区北貝層よりの塊（挿図8）を切断し、その一部を粉碎して化学分析に供し、他の一部を樹脂に埋め込み研磨して EDAX によるX線分析試料とした。結果は、次表の通りである。

表8 松崎貝塚鉄塊の化学組成

成 分	化学分析結果	EDAX (1)	EDAX (2)
全 鉄 分 (T-F e)	5.6.1		
酸 化 第 2 鉄 (Fe ₂ O ₃)	8.0.1	8.0.5.4	8.2.8.0
酸 化 第 1 鉄 (F e O)	0.8		
二 酸 化 硅 素 (SiO ₂)	8.4	1.2.7.2	1.1.8.6
酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)		3.2.0	2.7.6
二酸化マンガン (MnO ₂)	2.2	1.9.8	1.5.8
硫 黄 (S)	0.0.0.8		
二酸化チタン (TiO ₂)	-0.1		
磷 (P)	0.8.8		
酸化カルシウム (CaO)	0.2	0.8.7	0.4.8
酸化マグネシウム (MgO)	0.5		
カリウム (K)		0.2.8	0.2.6

ここで、EDAX(1) (2) は微小部の分析であるのに対し、化学分析はかなり広い範囲の平均的な値とみることが出来るが、この三者の値がほぼ一致していることは鉄塊全体がこの程度の成分といえる。古代の鉄は砂鉄起源と考えチタンの検出を試みたが、何れも検出されなかった。参考として挿図8にEDAXの特性X線チャートを添付する。このチャートのピークは、含有元素の特性X線の強さを表し、それぞれの下に表示した元素に相当している。一番右の表示のないピークはFeのK-β線であり、主要な元素は上の表ではば網羅されている。



挿図8 松崎貝塚Ⅱ区北貝層出土鉄塊およびEDAX特性X線チャート

第7章 松崎貝塚の調査を終えて

1 松崎製塩遺跡

本報告書は東海市教育委員会が昭和51年に実施した松崎貝塚の第2次報告である。その年の7・8月の調査については、すでに昭和52年に報告書(注1)が刊行してあるが、今回の報告は昭和51年の年末に発掘した第2次調査の報告である。そして本書には、その後の昭和56年9月に発見された東海市名和の塚森遺跡の資料報告も併載したが、それも合わせて総括することにしたい。昭和51年の冬の調査は、遺跡のある松崎砂堆の内陸側について設定された発掘区でおこなわれ、この点、報告者が指摘しているように、砂堆の外側にあたる海岸側について実施した昭和51年夏の発掘にくらべ、調査についての所見は対象的である。すなわち夏の調査が生産の主体であった製塩の生産関係の領域に対する調査であったのに対し、冬の調査は、その後背地である生活関係の部分の調査である。

今次の調査においては、8区の調査区を設けた。第1次調査の4区につづきⅠ・Ⅱ・Ⅲの各区とそれぞれ名づけている。そしてⅡ区から1基とⅢ区から8基と、報告者は4基の炉址を検出したといつておらず、とくにⅡ区でみとめられた炉址からは、平面プランのくほんだ部分には焼土もみられ、その中央に上面が平らで側面が面取りされた泥岩製の棒が立てられて、下半部は砂中に埋めこまれたままであった。そして棒の上面あたりに胴部の長い土師置の甕が一個体みうけられたいといっている。この炉址は周囲を高く側壁でかこまれているが、あるいは天井部も構築された可能性もある。用途について報告者は「煮炊き用のかまど」としながらも、第1次調査において検出され宮川芳彌・立松彰の報告に対しても、杉崎も総括の中で、堅塩生産の炉址と推定した遺構との類似面を幾つか指摘しており、Ⅳ区で検出された8基の炉址についても同様の可能性をのこしている。

こうした報告者の謙虚な考え方を評価しながらも、杉崎は泥岩製の支柱棒とともに甕が目立って長い土師器の甕を伴出していることから、やはり堅塩生産のための炉址と推定したい。口径20cm前後に対して器高35cmもある薄手の土師質容器で、これこそ粗塩あらじゆを粗塩をつめて前述したように天井を開いた炉で焼くことにより、いわゆる延喜式大甕の調の品にみられて知多郡東浦町生路に地名をのこす生道甕が、大甕のような形で粉状に突きはぐすと一斗ほどになるといっているごとく、こうした堅塩を焼くための容器であろうとしているものである。粗塩を生産する炉址とはやや場所を異にして、精製塩を焼く炉が築かれたものであろう。

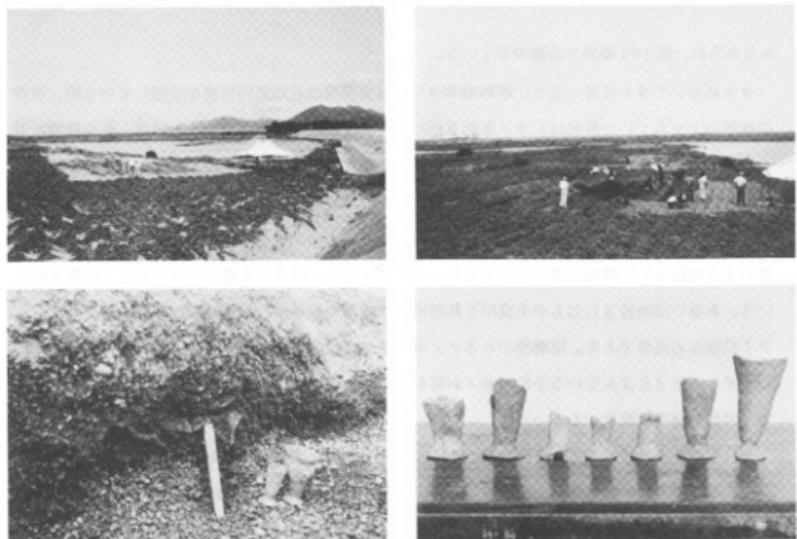
2 製塩の炉址と土器



挿図9 知多式製塙土器の変遷

一般的な粗塙生産について、第1次調査において、Ⅰ区から5基、Ⅱ区から1基、Ⅲ区から1基と計7基の炉址を検出して報告しており、とくにⅢ区では炉址の焚口の横と考えられる部分に、丸太材をくり抜き石膏質のもので内面を塗り、濃縮塙水をいれるための鹹水溜と推定し、水槽と推定して学界へ紹介した。

そして粗塙用の製塙土器については、知多式の第1～第5様式にわけて報告したが、上につく鉢形の杯部はそれ程の変化はないが、脚部の器形に変遷がある。第1様式の脚台は袋形あるいは筒形をしているが、第2様式になると脚台の先端をとして中空の角形^{つむぎ}とし、第3様式は第2様式と外形は似ているが内部の充実した脚台である。そして第4様式になると小形となり表面も整えられているものが多い。最も新しい第5様式は粗製で太い第3様式の脚台をそのまま小形にした形であり、この第5様式の様式は松崎貝塚の第1次調査の成果として新しく追加した様式で、平安時代の灰釉陶器と伴出したものである。ところで本書に付載として報告した塚森遺跡は、ほとんど工事で出土した資料を採集したような形であるが、製塙土器は3様式にわかれ、第3・第4様式のそれとともに最も数の多いものは、本書において塚森式と仮称した古式のもので、知多式製塙土器の第1様式の直前に比定する様式である。これに類した例としては松崎貝塚の第1次調査で1区で8例出土し、今次の調査でも5～6個の出土例があり、渥美様式類似としているものであるが、20個をこえる量がかたまって出土したことははじめてである。報告者は瀬戸内海の喜兵衛島南東浜遺跡のそれに類似したものとのべているが、それほど遠くにもとめなくとも古く芳賀瀬が発掘（注2）し、昭和41年に杉崎と久永春男・齊藤嘉彦が日本考古学協会生産技術特別委員製塙部会の事業として調査した渥美郡渥美町伊川津の青山貝塚（注3）から出土した渥美式土器のA類に比定すべきもので、この程度の器形変化は、同じ知多半島の他の様式の土器においてもみられる。例えば知多式製塙土器の第1様式においても松崎貝塚のそれと南知多町内海でみられるものとの間には大きな差異がみ



插図10 湿美町青山貝塚 上段・調査状況、下段左・出土状況、

下段右・満美式製塙土器（両側4個はA類、中央3個はB類）

とめられる。これら知多式製塙土器の6様式については、第1様式に先行する塙森様式は5世紀終末から6世紀初頭に、そして第1様式のつかれた年代は6世紀前・中葉に比定しており、第2様式は過渡的な様式であるが、第8様式については6世紀後葉から7世紀代にもとめている。第4様式については8～9世紀、第5様式は10～11世紀の年代が与えられている。

昭和38年8月の平城宮址第18次調査のおりに、「尾張国智多郡賛代郷朝倉里戸主和専部色夫智調塙三斗天元年」、「尾張国智多郡番賀郷花井里丸部龍麻呂・調塙三斗神龜四年十月七日」などの木簡が発見されたのである。朝倉里は知多市朝倉であるが、花井里の土地はいまだ不詳である。しかし番賀郷であり、製塙の土地となると、知多市寺本から北で東海市名和にいたる海浜地域であり、本書の図版1に紹介されている諸遺跡の中の1地点であり、松崎貝塚の位置もその大きな候補地である。

3 海浜集落の生活

生産地として紹介している中で、以上は製塙関係を強調したのであるが、同じく海についての生産の中で漁撈についてのべると、塙森遺跡からも釣針が出土しているが、松崎貝塚の第1次調査においては、われわれが日間賀島の古墳の調査で北地第四・第五号墳の副葬品の中から検出したサメ釣針の遺存状態よりもよい好例が出土している。鰯の他にも、大小の土鐘のごときはほとんどの層

からみられ、延100個余りの数がでている。

サメについてさらに述べると、昭和85年8月に日間賀島の北地第四号墳を発掘している時、石室の側壁の上でみていた漁師は「サメを釣る針だ。今のものとそっくりだ。」と叫び、私の質問に対し「イイダコを餌にする。」と答えた。それから3年すぎた昭和88年に遠くはなれた奈良の平城宮址において、篠島・佐久島海部が毎月の御貢として佐米楚割を貢納しているという木簡が発見されてきたのである。サメは種類が多く普通は一種の異臭をもつてゐるが、臭いのは皮と血であり手ぎわよく血抜きして薄塩に漬けたスザメやネズミザメなど、現在でも楚割（スハヤリ）に供されている。あるいは血抜きしたものと素早く熱湯につけて薫味をきかした醤油または酢味噌でたべるアライ料理など高級である。延繩漁でとるサメについては志摩半島付近で最近まで「猫の手」とか「サザエワリ」とよんでいる小形のサメが群をなしており、このサメは俗名のようにサザエ・ニシなどの貝を器用に捕食するという。

これらの漁撈具はもちろん海浜集落の地域から検出された生産民具であるが、次第に生活の臭みがにじんでくる。生活の場所も海のみでなく山であり畑であり、あるいは家庭の中の副業でもあるのである。こうしたものにも意外と鉄製道具が良好な形でのこっており、まず鉄鎌があつて狩猟道具である。一般的にみるシカ・イノシシのほかにも馬・犬・鳥・亀の骨がみられる。さらに鋤先があるが農具である。知多半島では近世・近代の海浜集落にあっても專業の漁業の家は割りと少く、半農半漁が圧倒的であったが、古代の製塙集落においても相当の農仕事を兼ねたものであろう。つぎは紡錘車であるが、これは織物道具であり婦人の仕事である。綿を栽培しワタクリで実を区別し、糸車に紡錘車をつけて糸をつむいでいき、やがてハタゴくちにのせていく一連の仕事が連想できるのである。ここで注目されるのはフイゴの口が2個もタカラ塊をともなって検出されていることである。釣針・鉗・鉄鎌・鎌先・紡錘車と紹介してきた鉄製道具は自家製の道具であろうか。それを磨くための砥石もみられる。

さらに馬具として紹介した鉄製の鞍具がある。馬具の革帶をとめる鉤でバンドのバックルのようなものである。刀子もあって鹿角装である。装飾品としては滑石製の勾玉もみられる。

そして最後になってしまったが正真正銘の生活道具は土器であり、古墳時代から奈良時代の土師器・須恵器から、平安時代の灰釉陶器まである。中でも1片であるが綠釉陶器もふくまれている。

4 海浜集落と万葉集

松崎貝塚を代表とし東海市名和にいたる奈良時代の海浜集落を紹介した資料に万葉集の歌がある。卷七の雜歌の中の羅旅作としてあげられた「あゆち潟潮干にけらし知多の浦に朝ご舟も沖による見ゆ」(1163)の1首で、東海市高横須賀町の諏訪神社の奥まったところに万葉仮名で刻まれた石

碑があり、碑の裏には「文化十五歳春吉田定興建并書」とある。この歌のよまれた場所を具体的にきめる資料はないが、すでに150年の前の建立であることも特筆される。この歌「羈旅にて作れる」とあるから知多地方の人ではない旅行者がよんだものであるが、この道をはじめて通る人ではなく、あゆち潟がここからは展望できないことを知っており、満潮のおりには岸近く舟が進み、干潮のおりは沖の方を通ることも承知の、土地感とか道筋の地理にも明るい人の作である。恐らくは三河方面からやってきて東海市高横須賀町に泊し、朝早く次の旅に立つ人の心をとらえた知多の浦の朝景色といえよう。旅人が目ざしているのは北の方、あゆち潟の方向である。万葉時代に知多の浦とよばれた今の東海市の海岸には、本書に報告者のいうように東海市名和の一番塚・長光寺・塚森おなじく大田町の松崎・下浜田とづいている。そして松崎貝塚をすぎて間もなく今も加家という地名があるが、古代の加家はさらに南方へのびて大田町や高横須賀町まで及んでいたと考証されており、もう一つの万葉集卷十七の東歌の中にある相聞の歌「味鳴の可家の漆にいる潮のこてたずくもか入りて寝まくも」(8558)がある。

旅人があゆち潟として歩いていった浜辺の道筋にそって、海の男が海上はるか沖合で働きながら、港に待っている妻の肌を思いえがいた海浜集落の労働や生活の具体的な内容を物語るもののが、ここに紹介した出土資料である。

(杉崎 章)

注

- 1 杉崎章・立松彰・磯部幸男・宮川芳照・山下勝年・石川玉紀『松崎貝塚』東海市教育委員会・昭和52年
- 2 芳賀陽「青山貝塚—渥美半島における古代漁村の土器—」古代学研究20所収、昭和44年
- 3 久永春男・杉崎章「愛知県渥美町青山貝塚」日本考古学年報19所収、昭和46年



付載 塚森遺跡

I はじめに

塚森遺跡は、愛知県東海市名和町塚森一帯に所在する。この地域は、知多半島の伊勢湾に面する基部にあたり、松崎貝塚から丘陵地をはさんで北東に約8km離れた一帯に開けた海岸平地である。遺跡は、松崎貝塚同様に砂堆上に立地している。

本遺跡の存在は明確ではなかったが、付近にある長光寺や妙法寺には製塙土器が散布しており、また、約100m東方には堂ノ前貝塚〔吉田 1972〕があることから注意されていた〔池田 1973〕。

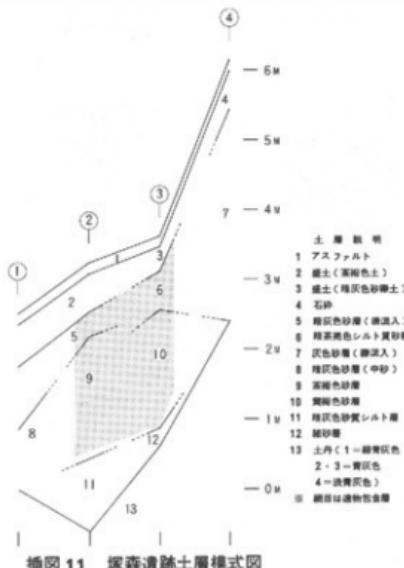
昭和56年9月から塚森地区内の道路上に排水暗渠設置工事（注1）が行われることになり、市教育委員会の担当課が立ち会った。当該地区は、砂上の緩い地盤上に家屋が密集し、道路幅もせまく、家屋倒壊等の危険を防ぐため、トレンチシールド工法がとられた。そのため、遺物包含層検出後も、土層の観察と機械の方向転換溝（図版18-A地点）および水道バルブ取付溝（図版18-B地点）の部分しか調査出来なかった。

ここに掲げる遺物の一部は、当時の市文化財調査委員池田陸介氏、市立緑陽小学校教諭加古兼敬氏および同校児童から出土品としてと分けられたものである。また、危険な作業のなか、工事請負業者の職部組の献身的な協力を得ることができた。ここに厚く感謝の意を表したい。

II 遺 跡

本遺跡は標高3m前後の砂堆東縁にあり、さらに、東に水田をはさんで堂ノ前貝塚が立地する。この貝塚の東部は丘陵地である。

遺物包含層の範囲は遺物出土区域からみて図版18に示すように約150mにわたる。遺跡の層序は、挿図11（注2）に示したとおりである。工事に伴う掘削の深さは約2.6mであり、遺物は標高2m～2.5mに堆積する暗茶褐色シルト質砂層（6層）、茶褐色砂層（9層）、黄褐色砂層（10層）から混在して出土し、遺構は検出しえなかった。この他、水道バルブ取付溝の西端に、「塚森式」と仮称する製塙土器の混在する破碎貝層を検出した。



III 遺物

遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓷器系中世陶器（行基焼）・貝殻等があり、総数は整理箱に10箱ほどである。以下、各遺物の特徴について述べる。

1 人工遺物

(1) 縄文土器と土偶（挿図12、図版40）

1は波状口縁の深鉢とみられ、無文で波頭部には外側からの押え込みがある。2は口縁が内折する深鉢とみられ、内折した外面の沈線下に繩文を施す。3・4は肥厚した口縁に半截竹管で波文を描く。5は肥厚した口縁に半截竹管による押引文を施す。6は半截竹管による二条の平行線間に同じく弧線を描くものとみられる。7は口縁がやや屈折し、鋭利な条痕様の沈線を施す。8は口端に半截竹管による押文をめぐらす。9～11は条痕を施し、9は幅太の粗い条痕である。

縄文土器とみられるものはこの他に4片あり、合わせて15片である。これらのものは、おおまかにみて、縄文時代後期と晩期のものに類別される。うち2は西北出遺跡出土土器〔大谷 1978〕に類似する。3～6は晩期中葉のいわゆる本刈谷式の特長をもつものである。



挿図12 塚森遺跡縄文土器拓影および土偶

土偶は、乳房とみられる突起部からみて左腕と考えられる破片である。腕の下半は剥離している。先端に突起を作り出し、そのくびれた部分と肩寄りに縦の刺突文列を2条めぐらす。刺突文列は、この他に横の列が、前面の乳房の下に2条、背面の肩から腕の先端に4条認められる。色調は、外面が、淡褐色で、内部は暗灰色である。黄褐色砂層（挿図11～10層）から出土した。時期は特定し得ない。

(2) 弥生土器（図版19・22・41）

a 第1群土器

(ア) 壺形土器（図版19-1・2、図版22-2～10）

図版（以下同じ）19-1は頸部がくびれ、最大径を腹部下半にもち、先の極く細かい櫛齒状器具による横線、波状文および押引文をめぐらす。波状文の下方に部分的に丹塗りされたような痕跡がある。19-2は内外面とも刷毛などでによって調整する。口縁部上端にへら状器具による刺突を加えた凸帶をめぐらす。頸部には櫛描横線をめぐらす。22-2は口端上部に刺突を加え、頸部には19-1と同様の器具による横線と斜めのはね上げをめぐらす。22-3は刷毛目調整のち櫛描横線をめぐらし、その上に縦線を加えて区画し、その間に斜めの沈線のある貼付文を置き、横線間をへら磨きする。22-4は貼付文がないほかは、先の3と全く同様の施文である。22-5・6はへら状器具によって斜格子を描き、6には櫛描きの綫と横の線を施す。22-7はへら状器具による山形の文様が縦に連なる。22-8は斜めの細かい刷毛目調整の上に、へら描きの磨消による横線をめぐらす。また、細い棒状器具による押引文を加え、この下半は丹塗りである。22-9・10は8同様に刷毛目調整の上に磨消の細い横線をめぐらす。

(イ) 壺形土器（図版22-1・11・12）

1はアナダラ属の貝殻腹縁によるとみられる条痕を外面に施し、口縁内側に押引文をめぐらす。11は内外面とも刷毛目調整され、口端と口縁内側上方にアナダラ属の貝殻腹縁によるとみられる圧痕をめぐらす。12は口端が断面三角形に面取りされ、内側の面に貝殻腹縁による押引文をめぐらし、頸部には斜めの条痕を施す。

(ウ) 無頸壺（図版22-13・14）

18は半截竹管状器具による横と縦の沈線を施す。14は口端寄りから下へむかって、棒状器具による波状線・横線、櫛描きの交互に方向の異なる斜線、半截竹管状器具による横と縦の沈線をめぐらす。

b 第2群土器

(エ) 壺形土器（図版22-15～22）

15は櫛齒状器具による斜めの刺突文帯をめぐらす。16～18は櫛描横線と波状文をめぐらす。19

はなで調整ののち2条1組の沈線をめぐらす。20は幅の太い櫛齒状器具による横線と波状文をめぐらす。21は2条1組とみられる粗雑な波状文を施す。22は縫の刷毛目調整の上に幅太の波状文をめぐらし、内面は溝の深い刷毛目調整を施す。

(4) 高环形土器(図版22-28)

口縁部が直立気味の器形をなすもので、口端外側に櫛齒状器具による刺突を施し、口縁部外面に6条の沈線をめぐらす。

c 第3群土器

壺形土器(図版22-24・25)

24はなで調整ののち櫛描横線とその間に板状器具による斜めの刺突文をめぐらす。25は刷毛目調整ののち磨消様の幅太の横線と鋸齒文をめぐらす。

d 第4群土器

(4) 壺形土器(図版19-3~6、図版22-26~32)

19-3は口縁部が受口状をなし、口端に平坦面を作り出す。全面へら磨き調整を施す。19-4は口頸部が長く、口縁部がわずかに湾曲する。内外面とも丁寧なへら磨きを施す。19-5は扁球形の脛部でやや上げ底である。外面はへら磨きを施し、内面はへら削りとなでによって調整する。19-6はA地点の黄褐色砂層(押図11-10層)の標高2.1m地点から出土した。球形の脣部に斜め上方に直線的に開く口頸部をつけ、やや上げ底である。全面へら磨きを施す。脣部内面は上半が指頭となで、下半がへら削りによる調整を施す。22-26・27は19-4と同器形をなす。26はへらによる浅い沈線と連弧文をめぐらし、27は右上がりのギザギザの斜線とその下に6条の浅い沈線をめぐらす。22-28は口縁部を欠損する。内面に板状の施文具による羽状の刺突文をめぐらし、その下半の屈折した面に丹塗りを施す。22-29・30は同一個体と考えられる。29は口端が上方へわずかに突出し、口縁帶を作り出す。口縁帶には幅2.5mmの刷毛原体によるとみられる羽状の刺突文をめぐらす。内面はへら磨きを施す。30は櫛描きの横線および波状の連弧文と板状の刷毛原体を用いた斜めの刺突文をめぐらし、施文部位下方は丁寧なへら磨きを施す。内面はなで調整を施す。22-31は荒い刷毛目調整の上に浅い櫛描横線をめぐらし、その間に刷毛原体による一辺2個刺突からなる山形文をめぐらし、この刺突上を丹塗りする。22-32は円形の刺突文をめぐらし、その下方を丹塗りする。

(4) 高环形土器(図版19-7~11)

7はへら磨き調整を施し、脣部の環部と接する部分に櫛描横線をめぐらし、円形の透し孔を3個つける。8は脣部が内湾してのび、下端は平坦面を作り出す。外面はへら磨き、内面はへら削りと刷毛目調整を施す。円形の透し孔を3個つける。9は環部下底部のたちあがりの稜が不明確な器形

で、脚部には浅い櫛描横線をめぐらす。全面へら磨きを施し、台脚に円形の透し孔を3個つける。10・11は台脚脛部が内湾する器形をなすものと考えられる。10はへら磨き、11はなで調整を施し、ともに円形の透し孔を3個つける。

ウ) 龜形土器(図版19-12~17、図版22-38~36)

19-12は口縁部がわずかに屈曲して「S」字状に近い形をなし、口端は平坦面を作り出す。口縁部は横なで、脣部外面は刷毛目・内面は指頭によるなで調整を施す。19-18は口縁部が受口状に直立してのび、この部分は横なで、他は刷毛目調整で、脣部内面は幅の太い刷毛目である。19-14は口縁部が大きく外方に開き、口端に竹管状器具による圧痕をめぐらす。内外面ともなで調整を施す。19-15~17は台脚で、外面は刷毛目、内外は15がなで、17がへら削り調整を施す。22-33・34は口縁部が受口状に直立し、口端は平坦面を作り出す。33の屈曲部には櫛歯状器具による斜めの刺突を施す。22-35・36は口径が大きな器形で、口端に刺突文をめぐらし、内外面とも横なで調整を施す。

エ)まとめ

第1群土器は貝田町式に属するものと考える。このうち22-1が他よりも古い様相を示している。そして、19-1、22-2・5~7・14は獅子壓式の、22-8~10は外土居式の特徴をもつてゐる。第2群土器は小片の出土例がみられるのみであるが高藏式に属するものと考える。第3群土器はわずかではあるが、山中式に属するものと考える。第4群土器は、当地方においては弥生後期後葉に位置づけられる欠山式に属するものと考える。

(3) 土師器(図版20~22)

ア) 古墳時代前期の土器(図版20-1~29、図版22-37)

1~7は壺形土器。1~3は丹塗り(図版の楕円部分)の土器。1は口縁部を作り出し、2条の浅い沈線をめぐらす。口縁部内側上方に溝の浅い櫛歯状器具(刷毛原体ともみられる)による羽状文をめぐらす。2も1と同様の部位に同器具による斜め同方向の刺突文を3条めぐらす。3の底面には木の葉痕がある。4は口端がわずかに張り出して口縁部を作り出し、へら磨きを施す。頸部は刷毛目の上にへら磨きを施す。5は4の底部と考えられ、底面がへら削りでふくらみをもつ。外面は刷毛目とへら削りによって調整する。6は斜め上方に直線的にのびる口縁部で、口端は尖がる。内外面とも横なで調整を施す。7は口縁部が丸みをもって受口状をなし、内外面ともなで調整を施す。

8・9・11~18・22・25~28は高杯形土器。8は杯部が皿状をなして浅く、台脚はゆるやかな曲線を描いて外方へ開く。杯部および脚部外面はへら磨きを施し、脚部内面は細かい刷毛目による調整を施す。台脚に円形の透し孔を3個つける。胎土は砂粒が多く混じる。9も8と同様である。11・12は台脚の中ほどで屈曲して脣部が外反する器形をなすものである。11は杯部のたちあがりの稜が明確である。全面へら磨きで、脚部内面のみへら削りである。12は全面なで調整を施す。

ともに台脚に円形の透し孔を8個つける。13は环部の下底部が横にのび、稜をなして屈折してたあがる器形で、大きな径の直線的に外方に開く台脚をつける。内外面ともへら削りと刷毛目整形ののちに調整を施す。22・25～28は台脚上半が円筒状で、幅部が大きく横へ屈曲して円盤形をなす器形である。いずれもへら削りののちに調整を施す。

10・23は器台形土器。10は受皿部を欠損する。受皿部と台脚の接する部分に孔があく。台脚は直線的に大きく開く。受皿部の内面はへら磨き、他はなで調整を施す。23は小型の受皿部をつけ、内外面ともへら磨きを施す。ともに、円形の透し孔を8個つける。

14～17・29・22～37は甕形土器。14は口縁部が「S」字形をなす。口縁部は丁寧な横なでを施し、頸部内面には荒い刷毛目が認められる。口縁部の屈曲して外方へ張り出す部分に連弧の沈線をめぐらす。15は頸部が球形をなす器形と考えられる。口縁部内外面は横なで、頸部外面は細かい刷毛目、内面はへら削り調整を施す。口端の平坦面に刷毛原体とみられる器具による刺突文をめぐらす。16・17は台脚で16は内外面とも刷毛目調整を施す。17は外面を刷毛目、内面をへら削り調整する。29は器壁が剥落し調整具合は不明。22～37は口端に平坦面を作り出し、丁寧なで調整を施す。

18・21は小型の手づくね土器である。18は口頸部を欠くが壺形をなすものとみられる。21は鉢形をなす。

19・20は鉢形土器と考えられる。ともに底部が張り出し、やや上げ底である。底部のくびれた部分に指頭痕が残り、内面はへら削り調整を施す。

24は瓶形土器。底部に一孔を作り出す。外面は刷毛目ののちに調整し、内面は横のへら磨きを施す。

以上のうち、20-1・6・15～20は茶褐色砂利（挿図11-9層）の同レベルから一括して出土した。これらの型式については、20-1～20までのものが、先の弥生土器につづくいわゆる元屋敷式〔大谷 1968〕の特徴をもつものと考える。そして、20-28の器台形土器が石塚式に22-21・22-24～29のものが荒新切式に比定できうると考える。

b 奈良・平安時代の土器（図版21-1～18、図版22-38・39）

1～10と24-13・14は甕形土器。1は口縁部が屈折して外反する。口縁部は横なでで、頸部内面には横の刷毛調整を施す。頸部外面は櫛状器具によるとみられる深く鋭い条痕様の斜めの調整を施す。2は口縁部がやや肥厚して横に突出する。口縁部は丁寧な横なでで、頸部外面は深い刷毛目がみられる。3は頸部がわずかにくびれ、口縁部は斜めに直に開く。口縁部外面と頸部内面はなで調整、頸部外面は幅太の刷毛調整を施す。4・5は口縁部内側がわずかに屈折して稜を作り出し、内外面とも丁寧な横なでを施す。6～9は口頸部が「く」字形に屈曲し、薄手で、長脚形をな

すものと考えられる。脚部外面は荒い刷毛によって、内面はへら削りなどでによって調整する。6は口縁部の内外面とも横なで、7～9は口縁部内面に横の刷毛を施し、8と9には指彫の痕が残る。10はこれらのものの底部と考えられ、刷毛によって調整している。22～39は粗雑な作りで、成形時の粘土紐の痕が残る。外面に荒い刷毛調整を施し、口縁部内面は細かい刷毛によって調整している。22～38は頸部がわずかにくびれ、ややふくらみをもった口縁部がつく。脚部外面には平行の叩きを施し、内面はへら削りを施す。

11はにぎりはなしの作りの土棒である。製壇土器によく似た色調の変化が認められる。把手かもしない。

12は把手付の壺形土器。頸部内外面は横なで、脚部外面は刷毛を施す。

13は鉢形をなすものと考えられる。薄手の土器で、口端は尖った素縁である。外面上半は粘土紐と掌の痕が残り、下半は方向を異にする刷毛を施す。内面上半はへら削りによって平滑な面を作り出している。

以上のうち、12の壺形土器は器形からみてこの期よりは古く位置づけられ古墳時代後期のうちに入るものかもしれない。4・5・10の壺形土器は後述する須恵器のうち23～9・10の壺蓋・23～14・16の無台壺身・23～17の有台壺身・23～20の盤・23～21の鉢とともにA地点（図版18参照）の暗褐色シルト質砂層（挿図11～6層）下層で黄褐色砂層の直上あたりから一括して検出したものである。これらの須恵器の編年からみて、8世紀後半から9世紀初頭の時期が求められる。

(4) 須恵器（図版23～1～24、図版24～1～4、42）

23～1は高壺。脚部が垂直り下り、脚部で水平気味に広がり、段を作り出して下端にいたり、下端は鋭い。縱長の長方形の透しを3個つけるものとみられる。

23～2・5は壺身。2は口径が大きく、立ちあがりも長い。底部下半はへら削りを施す。5は立ちあがりがわずかに内傾し、端部は丸みをもつ。受部は横にのび、受部下方が屈折して駆をなす。

23～3・4は壺蓋。3は天井部はやや丸みをもち上半はへら削りを施す。口縁部との境に棱を作り出し、口縁部は垂直にのびる。4は天井部はやや丸みをもち上半は複数な方向からなるへら削りを施す。口縁部との境に断面三角形の棱を作り出し、口縁部はわずかに外開きにのび、端部に平坦面をもつ。

23～6～8は甕。6は沈線間に櫛状器具による波状文を描く。7は口頸部が大きく外に開き、斜めの口縁帯を作り出す。口頸部内外面および脚部内面は横なで、脚部外面は叩きの上に指による磨消し状の沈線を施す。8は脚部下半の破片で、叩きののち、それと交差する方向に刷毛調整を施す部分がある。

23～9～13は 盖。すべて擬宝珠様のつまみをもち、天井部上半に回転へら削り調整を施す。9

は天井部が直線的に下り、口縁部は断面が三角形状に肥厚させる。10～12は天井部下方がゆるやかにやや横にのび、口縁部を下方に折り曲げて形作る。13は天井部が丸みをもち、口縁部はやや長めに折り曲げる。

28-14～16は無台坏身。すべて回転糸切り底である。28-17・18・22は有台坏身。ともに底面はへら削りによって調整する。17の高台はやや外方に開く。18の高台は垂直につき、下端面は内外両方向からへら削りによって面取りを施す。22は坏部が垂直に立ちあがり深い。

28-19・20・24は盤。19は外縁がゆるやかに屈折して斜め外方に開き、口縁部は丸みをもつ。20は短かく直上する外縁をもち、端部は外方に屈折している。外底面はへら削り調整を施す。24は外反する高めの高台をもち、下端部はへら削りを施す。

28-21は鉢。直行する口縁部をもち、肩がやや張った体部をもつ。口縁部に丸味をもった凸帯を有し、端部は面取りを施す。底面は糸切り底で「一」形の刻印を記す。

28-23は短頸壺。外反する口縁部をもち、口端は面取りを施し、肩の張った体部をもつ。

24-1は浅鉢とみられる。口縁部がゆるやかに屈曲して外反し、口縁帯を作り出し、口端が突出する。体部下方に棱をもつ。

24-2・3は瓶。ともに下端に凸帯をもつ。2は凸帯中ほどに底面があり、内面はへら削りを施す。3は凸帯底面中央に沈線がめぐる。

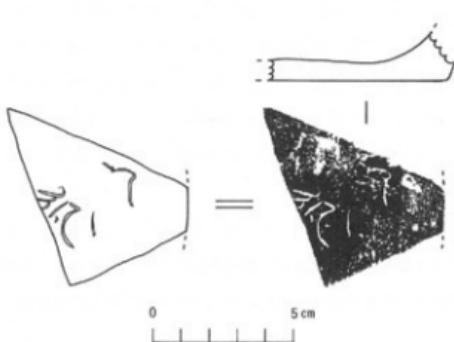
24-4は壺か甕の肩部片で、格子状の叩きを施す。

この他、挿図18に示す文字の刻まれた須恵器片がある。この器形は盤とみられる。底面はへら削りされている。刻まれた文字については判読できない。

以上のうち、28-9・10の坏蓋・28-14・16の無台坏身・28-17の有台坏身・28-20の盤・

28-21の鉢はA地点（図版18参照）の暗褐色シルト質砂層（挿図11-6層）下層の黄褐色砂層の直上あたりから一括して出土したものである。また、28-22の有台坏身はB地点（図版18参照）から出土した。

猿投窯編年からそれぞれの時期についてみてみる。本遺跡で最も古く位置づけられるものとして28-7の甕があげられる。この甕は



挿図13 塚森遺跡須恵器の文字

尾張旭市の城山第2・3号窯〔七原ほか 1978〕出土のものに類似する。5世紀後半のうちに含められるものであろう。28-1高壺と28-5の壺身は東山50号窯式に比定できよう。28-2の壺身および28-3・4の壺蓋は器形からみて前記のものより古く位置づけられ、6世紀後半のうちにその時期を求めることができるものと考える。先述したA地点一括出土のものは折戸10号窯式に比定できよう。また、24-1の浅鉢および24-2・3の瓶は黒竪90号窯式に比定できよう。

この他、盤とみられる底部片に文字をへらで刻んだ破片（挿図18）がある。二文字残るが判読できない。

(5) 灰釉陶器（図版24-5～10、42）

24-5は蓋。擬宝珠様のつまみをつける口径の小さいものである。天井部上半はへら削り調整し、灰釉を施す。

24-6・7は皿。6は口端が外方にやや突出し、体部下半と底面はへら削り調整を施し、高台は内面下端に内鴨がみられない三日月高台のものである。灰釉は漬け掛けである。7は底面がなで調整され内底面には直接の重ね焼きの痕跡が残る。

24-8～10は碗。8は底面がなで調整され、三日月高台をつける。内底面に直接の重ね焼きの痕跡が残る。9は断面三角形の高台をつけ、漬け掛けによる施釉である。10は底面が糸切りのままで、断面三角形の高台をつける。

24-5の蓋は黒竪90号窯式に、24-6・7の皿および24-8の碗は折戸58号窯式に、24-9の碗は百代寺窯式に比定できよう。

(6) 壺器系中世陶器（行基焼）（図版24-10～24）

24-10～16は碗。10～13の胎土は砂粒が多く混じるもの均質精良である。ともに底面は糸切りのままで、断面が押しひきずみ台形を呈する高台がつく。12の高台端部にはもみがらの圧痕が付着する。14～16の胎土は砂礫を多く混じえ、作りも粗雑である。底面は糸切りのままで、低い高台がつき、その端部にはもみがらの圧痕が全面に深くくい込んで付着する。

24-17～21は小皿。17は高台をつけ、他は無台で糸切りのままである。胎土は14～16の碗と同様である。

24-22は短頸壺。胎土は11～13の碗と同様である。体部からゆるやかな曲線を描いて、短い口頸部が直行し、口端は丸い。

24-23は壺。口端を「N」字形に折り返し幅3.6cmの縁帶を作り出す。

24-24は三筋壺。頸部に2条1組の整った筋をめぐらす。

これらは常滑窯の編年〔杉崎 1981〕からみて、前述した灰釉陶器に引き続く時期から第8型式前期までのものが少量ながら散在して認められる。

(7) 製塙土器 (図版 25、43)

製塙土器が出土しているものの、出土量はわずかであり、かつ、砂層中に散在しており、製塙の場からの流れ込みかと考えられる。このうち、知多半島では今まで類例をみない「塙森式」と仮称する一群の製塙土器が出土した。

a 塙森式 (図版 25-1~21)

杯を逆さにしたような形態の台脚をつけ、深鉢形をなすとみられる坏部の外面を叩きによって調整した土器である。当初、B地点の破碎貝層から数個まとまって検出したが、他の区域からも出土をみた。一個体がまとまつては出土しておらず、台脚部と坏部の細片が散在して出土した。B地点出土の遺物を主にした全遺物整理の結果、図示した坏部については、細片ではあるが他に考慮しうる器形の土器がなく、伴出した台脚と同一個体をなすものと判断した。

この器形および調整をもつ土器は、香川県喜兵衛島・南東浜遺跡出土の製塙土器〔近藤 1978〕に類似する。土器自体は、細片で、二次的な加熱をうけて色調が部分的に変化し、剥離化も認められる。このような特徴をもつことから製塙土器と考える。

土器の特徴についてみてみると。坏部の上半部分の厚みは2~3mmで、2mmに近いものが多い。口端は平坦に作られ、なでおよびへら磨き様の調整を施す。外面は平行叩きで、内面は丁寧に平滑に仕上げられ、口縁部に横の擦痕が認められる。内底面はへら削りとなでによって調整されている。台脚は底径3.8~4.9cm(平均値4.1cm)、内底面から下端までの高さ1.8~2.1cm(平均値1.8cm)である。台脚の坏部と接するくびれた部分に指頭の痕がよく残り、他はなで調整を施す。下端面はおおむね平坦で、砂粒压痕の付着したものが多いため。色調は、坏部が主に白色を基調とし、黒色、灰色、黄色、褐色味がある。台脚は淡褐色を基調とし、白色、褐色、紅色、灰色、黒色といった色々の部分的な変化がみられる。胎土は砂粒が混じる。

b 知多半島製塙土器3類 (図版 25-22~28)

やや太目で、にぎりはなしの作りの棒脚をつけるものである。坏部は円錐形状の深鉢形をなす。坏部の口縁部は尖がり気味の素線で圧痕を加えるもの(22)もある。外面は指紋および掌の痕が残り、内面はなでやへら削りによって丁寧に平滑に仕上げられている。脚部はにぎりはなしのまま、中実である。胎土は砂粒が多く混じる。色調は淡褐色を基調とし、黒色、灰色、黄色、褐色、白色の色あいによって部分的に変化する。

c 知多半島製塙土器4類 (図版 25-29~44)

8類よりも小型で、脚部に丁寧なで調整を施すものである。坏部は口縁が尖がり気味の素線で、外面には指紋や掌の痕が残る。内面はへら削りとなで調整によって丁寧に平滑に仕上げている。口縁部が肥厚し、口端に平坦面を作り出すもの(85・86)もある。色調は前述した3類と同様であるが灰色っぽいものが多い。胎土は砂粒が混じるもののが多い。

(8) 土鍤 (図版 21-14~24)

すべて素焼きの土師質のものである。形態として紡錘形・管形・球形がみられる。重量をみると、紡錘形の $14 = 20.2 \text{ g} + 15 = 19.9 \text{ g} + 17 = (10.5 \text{ g}) + 21 = (6.5 \text{ g}) + 22 = (4.2 \text{ g}) + 23 = (2.8 \text{ g}) + 24 = (0.7 \text{ g})$ 、管形の $16 = 17.4 \text{ g} + 18 = (19.0 \text{ g})$ 、地形の $19 = 31.2 \text{ g} + 20 = 29.1 \text{ g}$ を量る。

伴出遺物が明確ではなく、時期を限定し得ないが、茶褐色砂層（挿図11-9層）および暗茶褐色シルト質砂層（挿図11-6層）から出土しており、おおむね、奈良時代から平安時代に用いられたものであろう。

(9) 鉄製品（図版22-40、40）

断面が円形で曲線をもつ鉄製品がある。形態からみて釣針と考えられる。

00 石器（図版21-25～31、44）

21-25・26は叩き石と考えられる。26の長辺方向の一端（刃の下方にあたる面）には打痕が明瞭に残る。ともに石英斑岩製である。

21-27～29は砥石。27・28は全面が使用されている。29は実に細かく使用された面が残る。29は両平面のみ使用されている。27・28は硬砂岩、29は砂岩製である。

21-30・31は用途不明。30は耳のような形をなし、湾曲する幅太の面がすられたようにみられる。石英粗面岩（流紋岩）製。31は周囲が盛り上がって残っている。硬砂岩製。

伴出遺物が明確ではなく、時期は特定し得ない。

01 瓦類（図版22-41～44）

22-41・42は丸瓦。41は凹面に約1.2mm間隔の布目、凸面は繩叩きののちなで調整を施し、端面はへら削りされている。42は厚み1.1cmで凹面は約1.7mm間隔の布目、凸面は繩叩きののち、へら削り・なで調整を施すものがある。

22-43・44は平瓦。43は厚み2.4cmで凹面に約1.5mm間隔の布目と横骨痕が残り、凸面は繩叩きと指紋が残る。端部はへら削りされている。44は厚み1.4cmで凹面に1.5mm間隔の布目、凸面に繩叩きと指紋が残る。端部はへら削り。平瓦はこの他、厚み1.8mm・1.7mm・2.8mm・2.6mm・2.7mmの先のものと同様な作りの破片がある。

丸瓦・平瓦とも色調は薄い灰色を基調とし白色ないし黄白色に部分的に変化する。胎土は砂粒が混じるものの中質精良である。瓦当がなく時期は特定し得ない。

02 近世陶器類（図版24-25～27）

小瓶（25）は肩部下半と底面、高台をへら削りによって整形している。白色透明の釉がかかり、さらに肩部には淡緑色の釉がかかる。地は淡黄色。托（26）は底面がへら削り整形され、全面にくすんだ鉛色不透明の釉がかかる。地は黒色。皿（27）は底部がへら削り整形され、高台をつける。灰釉がかかり、内底面に絵が描かれているが破片のため全容は不明。地は灰色。

2 自然遺物

(1) 貝類(図版44)

本遺跡から出土した貝類には次のものがある。二枚貝類では、ハマグリ・マガキ・イタボガキ・サルボウガイ・ハイガイ・シオフキガイ・アサリ・オキシジミ・カガミガイ・マテガイ・オオノガイ・カゲロウガイがある。腹足類では、ウミニナ・イボウミニナ・ツメタガイ・アカニシ・フトヘナタリガイがある。

(2) 獣骨類(図版41)

鹿角をはじめとして鹿の骨が多く出土している。この他、魚骨、鳥骨、海亀の甲らなどもある。詳細については今後検討を加えたい。

(3) B地点破碎貝層の自然遺物

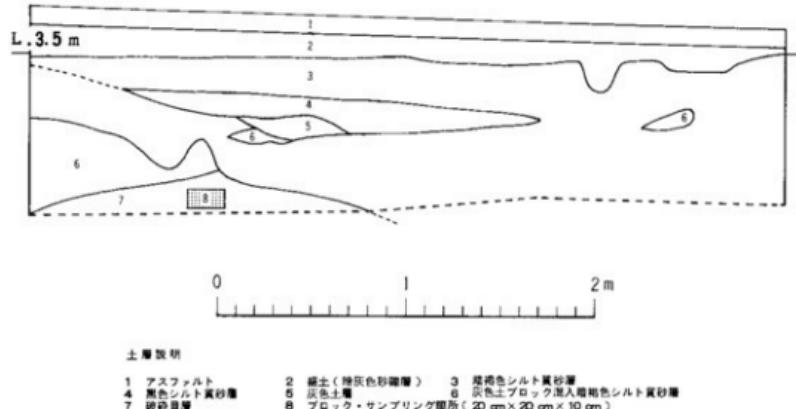
B地点の破碎貝層において、挿図14-8の場所においてブロック・サンプリング(縦20cm・横20cm・深さ10cm)を試みた。

a 貝類

表9に示すとおりである。二枚貝類の個体数については、殻の合せ目の数を二分して得た。

b 貝殻以外の動物遺体

同定作業をしていないので、詳細については今後の検討にゆだねる。概略を述べると、獣骨はわ



挿図14 塚森遺跡B地点(北壁)土層図

ずかで鹿や鳥などがある。魚骨が多く、微細な脊椎骨をはじめとして、小骨、歯、鱗などがある。

c 人工遺物等

「塚森式」と仮称する製壙土器の細片を多量に検出した。この他、小さな丸い軽石が3個ある。

表9 塚森遺跡B地点破碎貝層の貝類組成

種名		数値	個体数	%
二枚貝類	ハマグリ	30	3 3 3 3	
	サルボウガイ	3	8.8 3	
	オキシジミ	2	2.2 2	
	ハイガイ	1	1.1 1	
	シオフキガイ	1	1.1 1	
	カガミガイ	1	1.1 1	
	オオノガイ	1	1.1 1	
小計		39	4 8.8 2	
腹足類	イボウミニナ	29	3 2.2 2	
	ウミニナ	8	8.8 9	
	アカニシ	8	8.8 9	
	ヘトフナタリガイ	5	5.5 6	
	ツメタガイ	1	1.1 1	
	小計	51	5 6.6 7	
計		90	9 9.9 9	

注

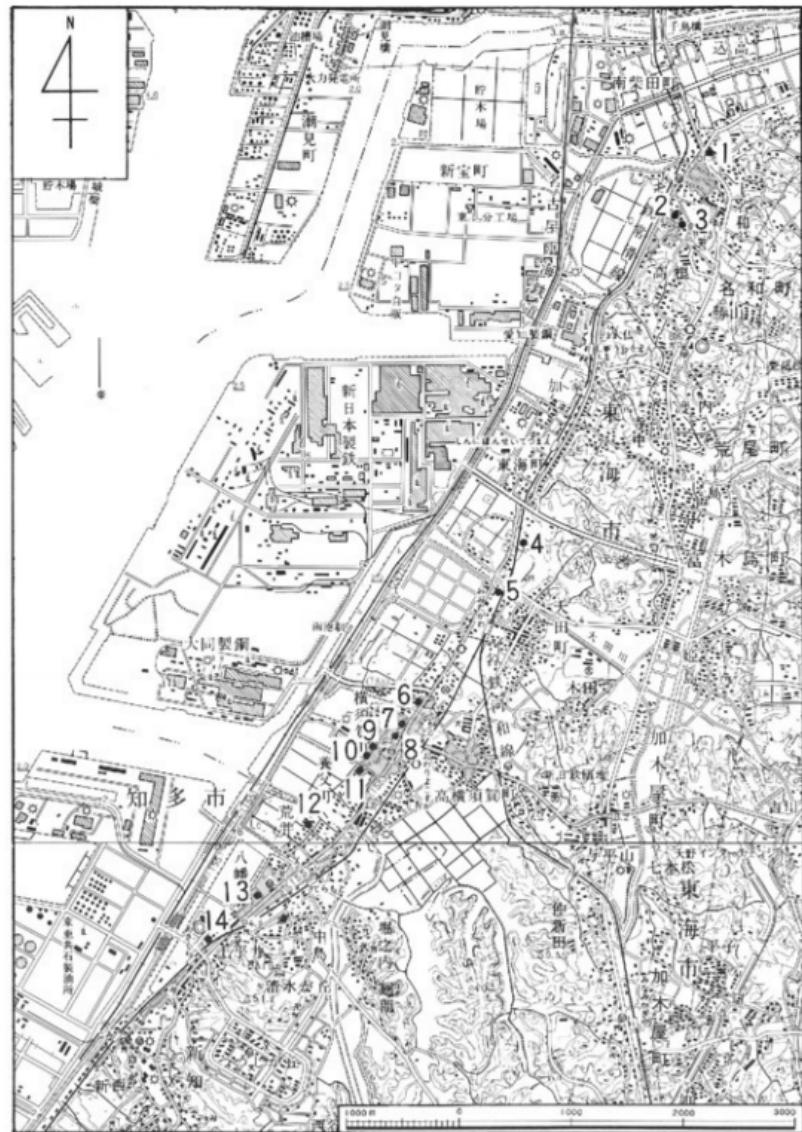
1 工事区間は、図版18に示すところの1から2・8を経て4に至る道路内である。

2 本図は、図版18に示す1~4地点のボーリング調査による土質柱状図と工事時の土層観察によって作成したものである。

引用参考文献

- 池田陸介（1978）東海市名和町の遺跡 — 一部隣接地名古屋市緑区大高町の遺跡も含めて —。文化財調査委員報告書、1～9頁。愛知、東海市教育委員会。
- 大參義一（1968）弥生式土器から土師器へ — 東海地方西部の場合 —。名古屋大学文学部研究論集XLⅦ、65～98頁。
- 大參義一（1978）東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について。名古屋大学文学部研究論集LXXⅣ、147～167頁。
- 荻野繁春（1981）7・8世紀の須恵器編年 — 美濃国・尾張国 —。老洞古窯跡群発掘調査報告書、80～105頁。岐阜市教育委員会。
- 近藤義郎（1965）知多・渥美地方における製塙土器の研究。日本塙業の研究第8集、85～71頁。東京、日本塙業研究会。
- 近藤義郎（1976）土器製塙と焼き塙。考古学研究第22卷第3号、85～91頁。岡山、考古学研究会。
- 近藤義郎（1978）香川県喜兵衛島・南東浜遺跡Ⅰ。日本塙業大系編集委員会編、日本塙業大系史料編考古、図19。東京。
- 斎藤孝正（1982）猿投窯における灰釉陶の展開。考古学ジャーナル第211、47～52頁。東京、ニーサイエンス社。
- 斎藤孝正（1988）猿投窯成立期の様相。名古屋大学文学部研究論集史学29、169～203頁。
- 杉崎 章（1956）知多半島における古代海浜集落の土器。古代学研究15・16合併、20～25頁。大阪、古代学研究会。
- 杉崎 章（1971）松崎貝塚。愛知県東海市柳が坪遺跡付載、32～34頁。東海市教育委員会。
- 杉崎 章（1981）常滑古窯製品の編年。常滑市文化財報告第10集・常滑市高坂古窯址群、52～54頁。愛知、常滑市教育委員会。
- 杉崎 章・磯部幸男・宮川芳照・山下勝年ほか（1977）愛知県東海市松崎貝塚発掘調査報告。愛知、東海市教育委員会。
- 杉崎 章・磯部幸男・山下勝年・中野晴久ほか（1982）知多市八幡細見遺跡・知多市文化財報告第18集。愛知、知多市教育委員会。
- 七原恵史・内山昭二・仙田作吉・木村哲雄ほか（1978）城山古窯址。尾張旭市の古窯。愛知、尾張旭市教育委員会。
- 榎崎彰一（1959）後期古墳時代の諸段階。名古屋大学文学部十周年記念論集、499～534頁。
- 榎崎彰一・斎藤孝正（1988）猿投窯の編年について。愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ（尾北地区・三河地区）、62～73頁。愛知県教育委員会。
- 芳賀 謙（1959）青山貝塚 — 渥美半島における古代漁村の土器 —。古代学研究第20号、44～52頁。大阪、古代学研究会。
- 早川信三・池田陸介・長谷川昭二（1978）東海市名和町一番畠遺跡。文化財調査委員報告第5集、36～40頁。愛知、東海市教育委員会。
- 久永春男・杉崎 章（1971）愛知県醒美町青山貝塚。日本考古学年報19。
- 吉田富夫（1972）東海市名和町堂ノ前貝塚発掘調査報告。愛知、東海市教育委員会。

図 版

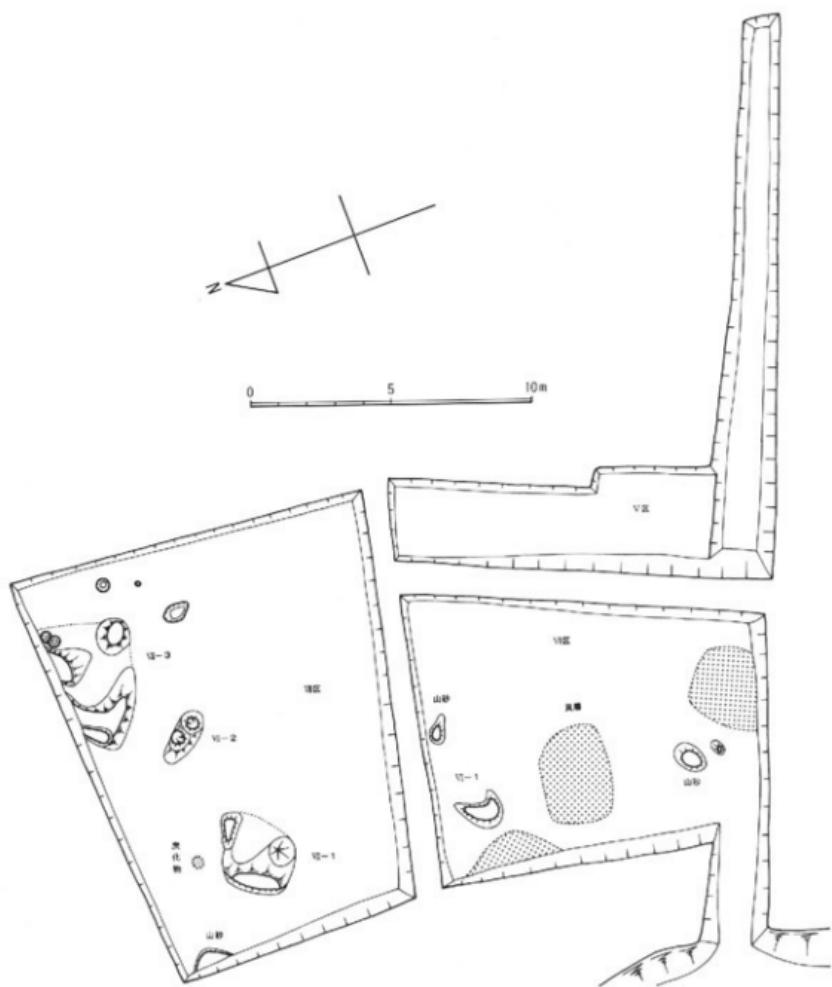


松崎貝塚周辺の製塩遺跡

図版 2

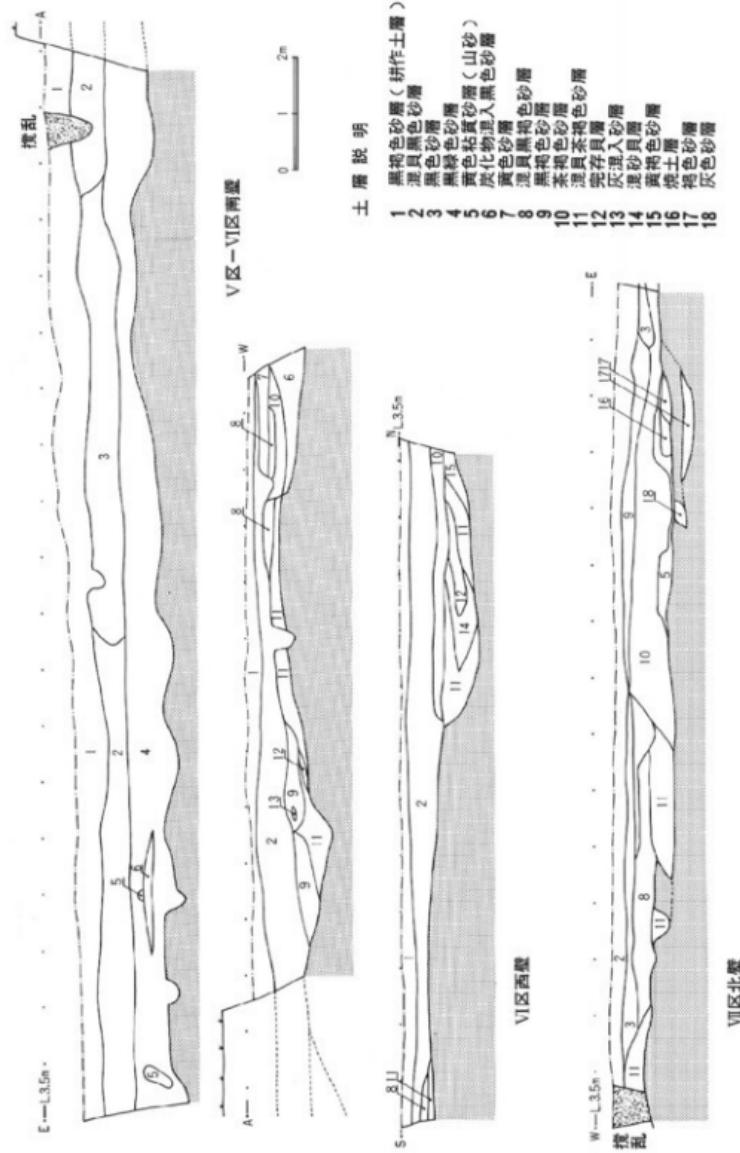


松崎貝塚調査区域図

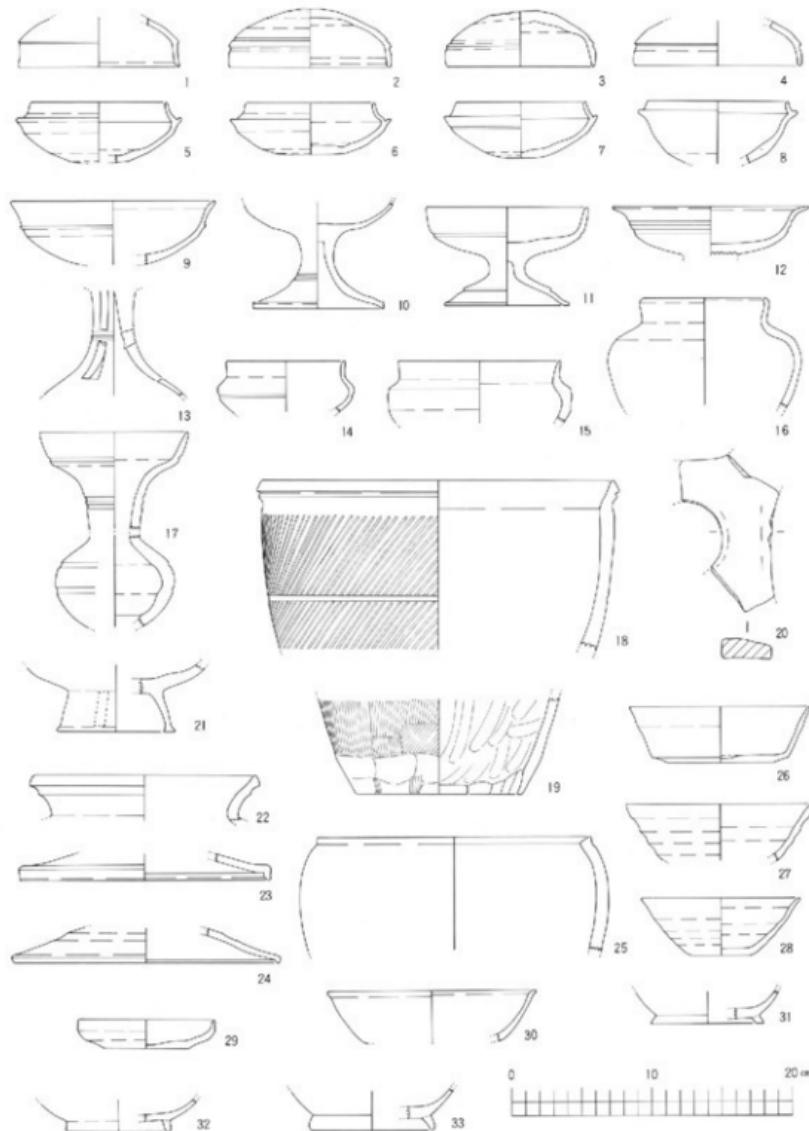


松崎貝塚発掘調査区および遺構配置図

图版 4

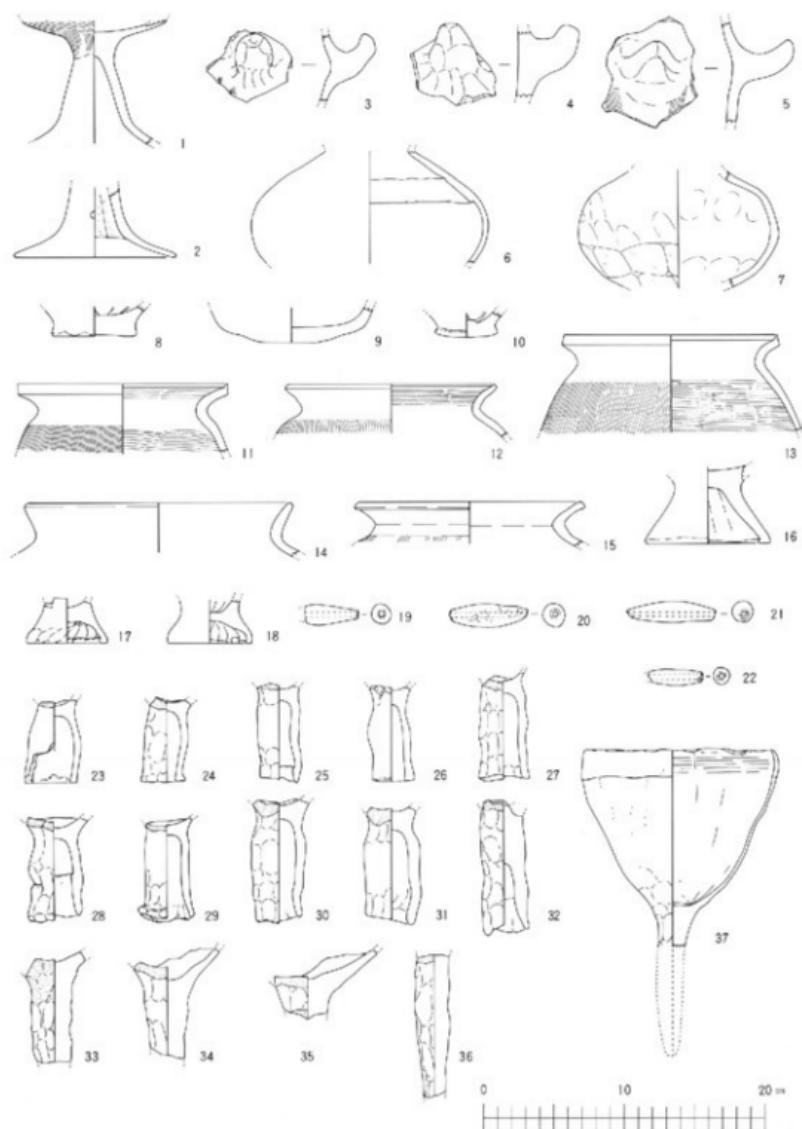


松島貝塚発掘区土層断面図

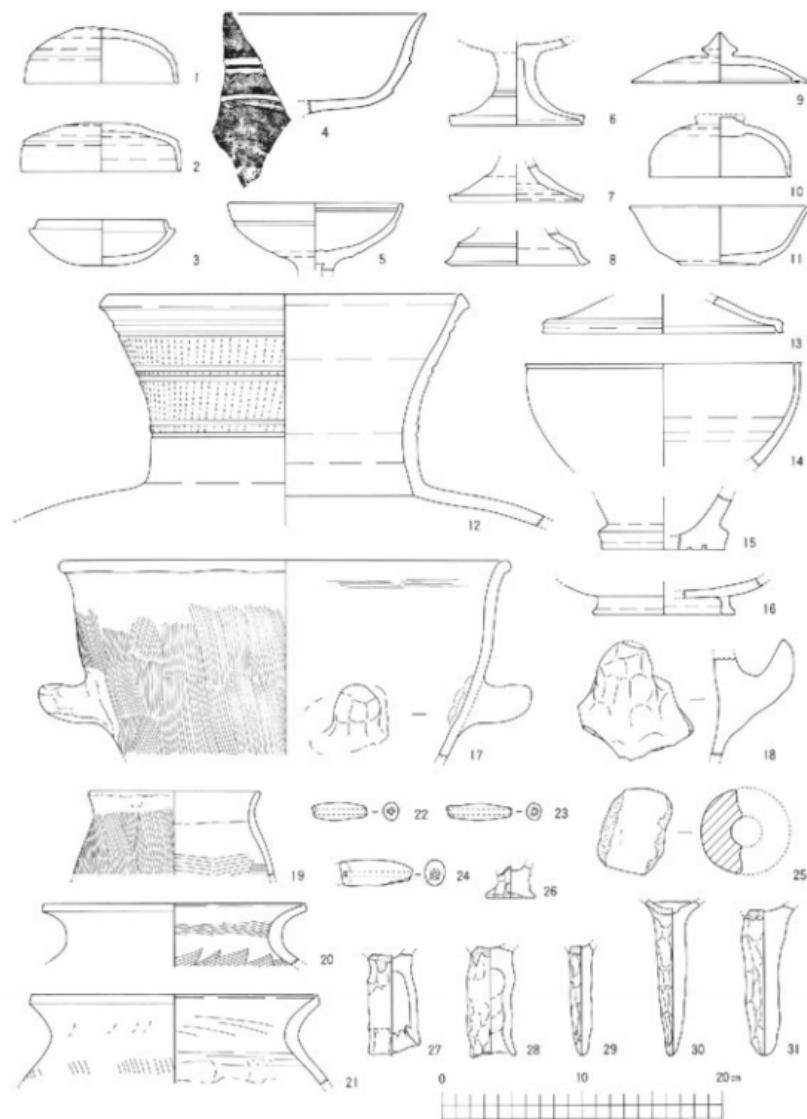


松崎貝塚 11 層出土遺物実測図 1

図版 6

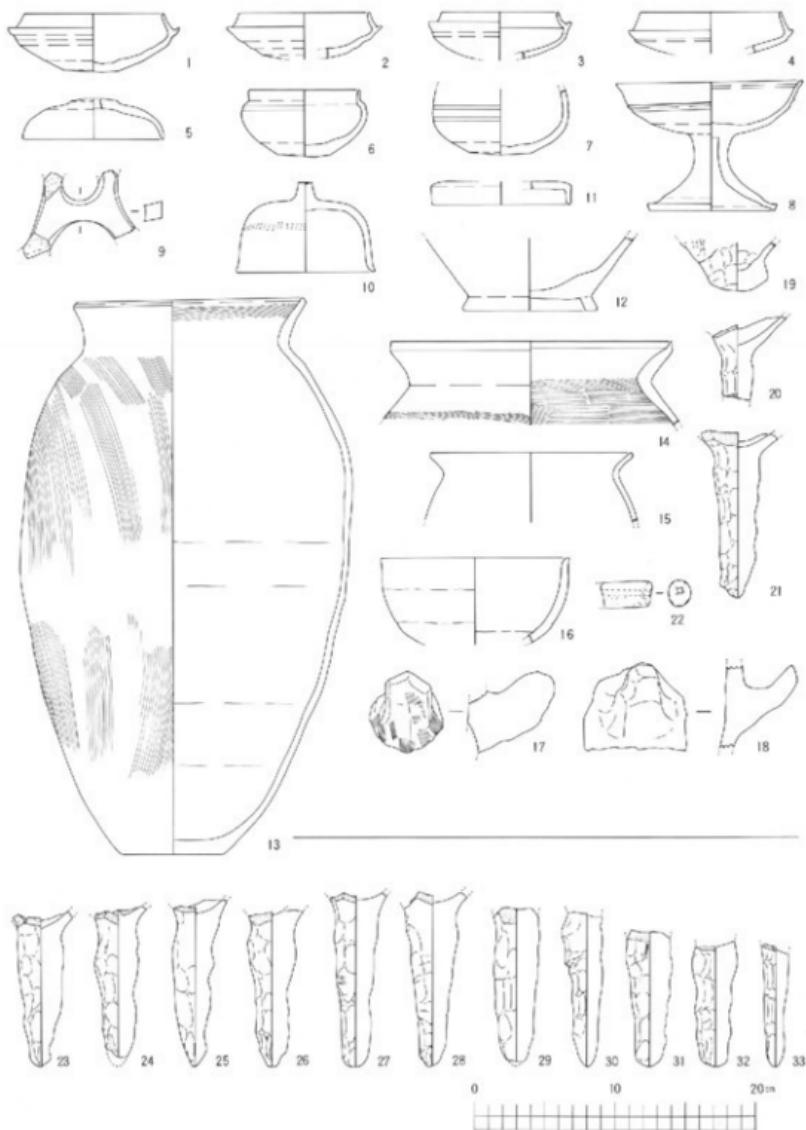


松崎貝塚 11 層出土遺物実測図 2

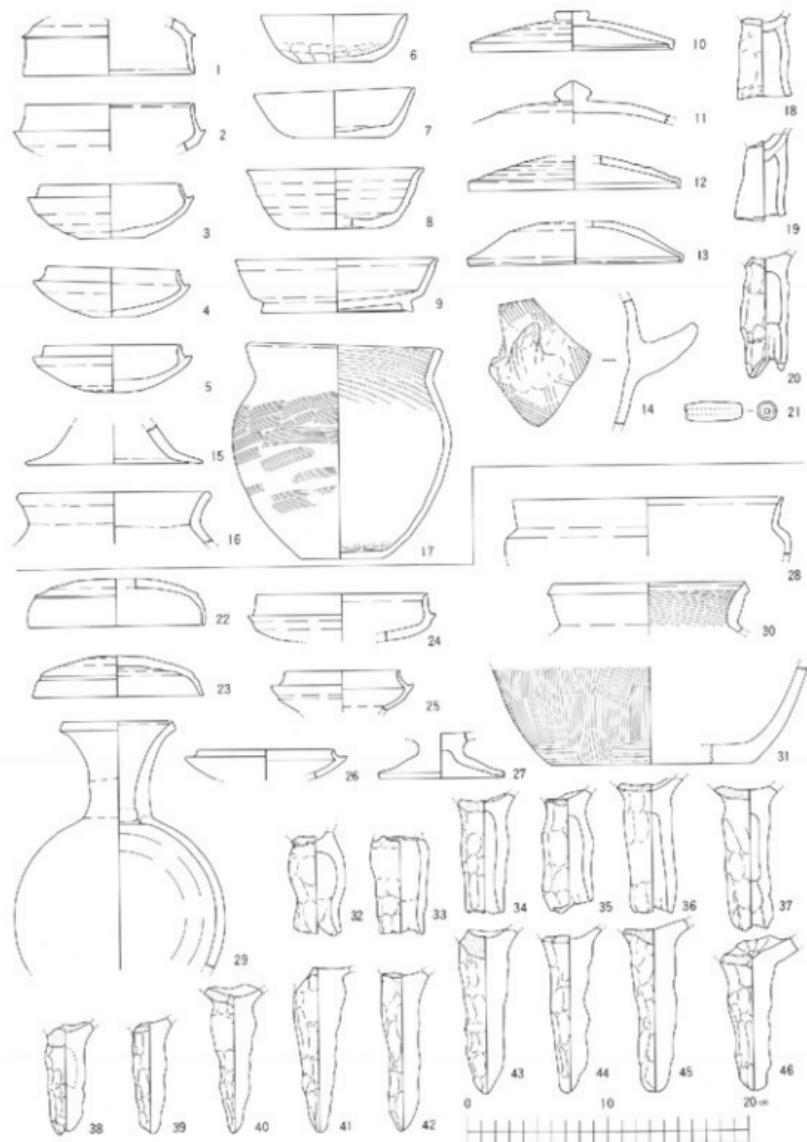


松崎貝塚Ⅱ区北貝層出土遺物実測図

図版 8

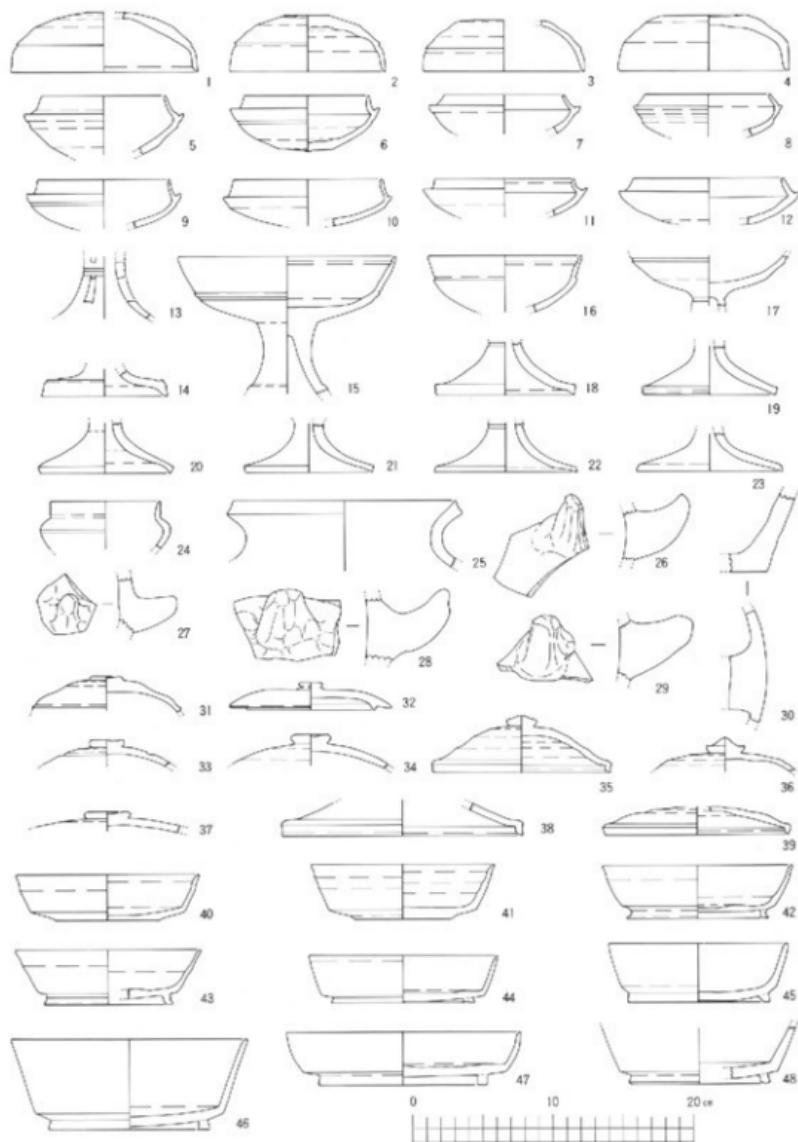


松崎貝塚1区南貝層出土遺物および2区6層(下段)出土製塙土器実測図

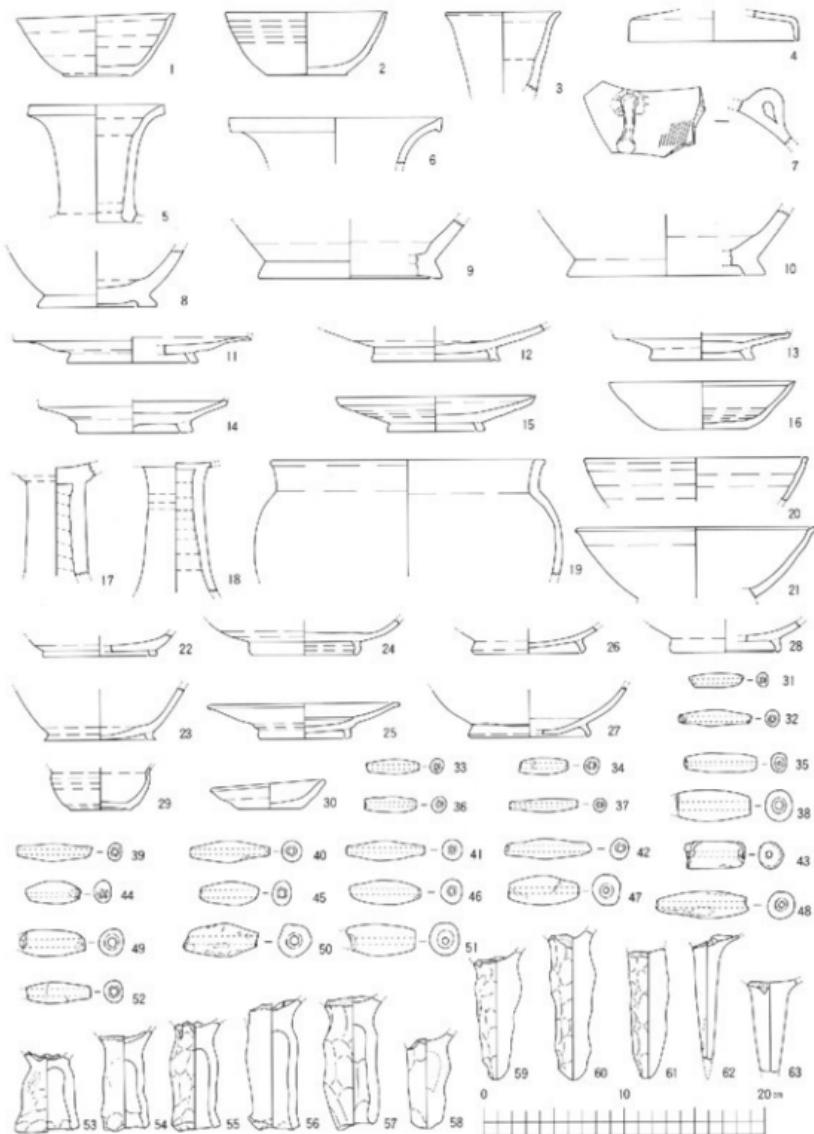


松崎貝塚Ⅰ区 4層(上段)およびⅡ区 6層(下段)出土遺物実測図

図版 10

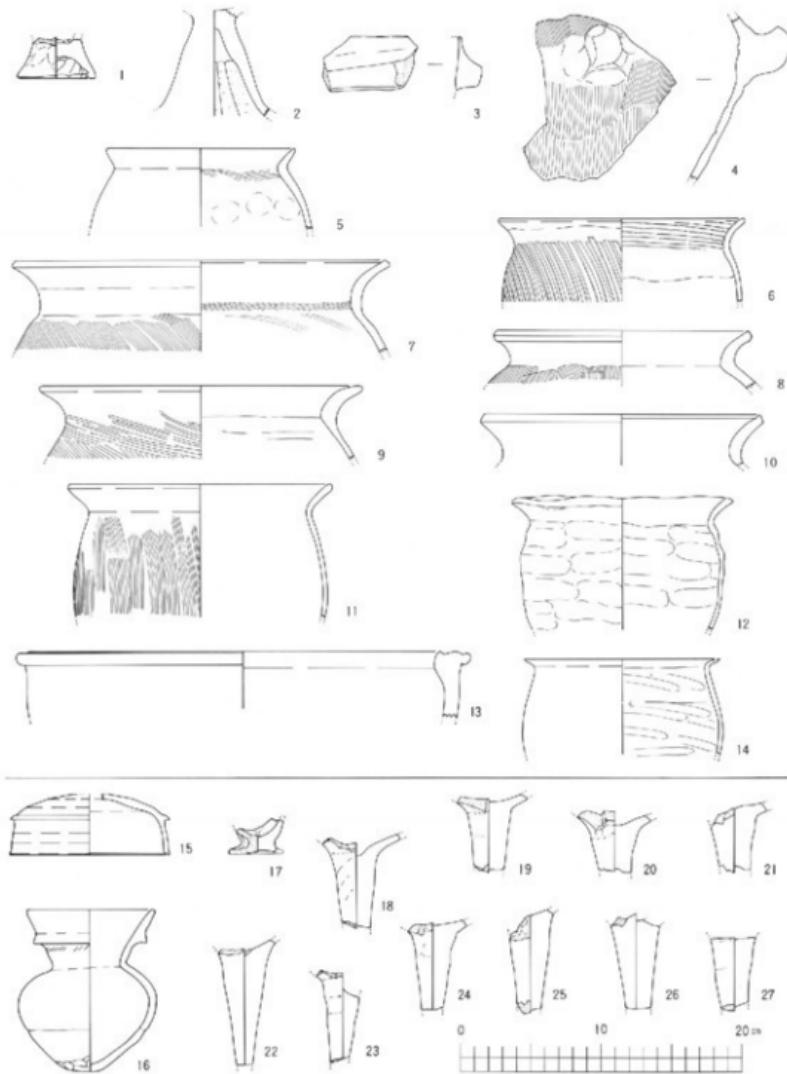


松崎貝塚貝区 10 層出土遺物実測図 1

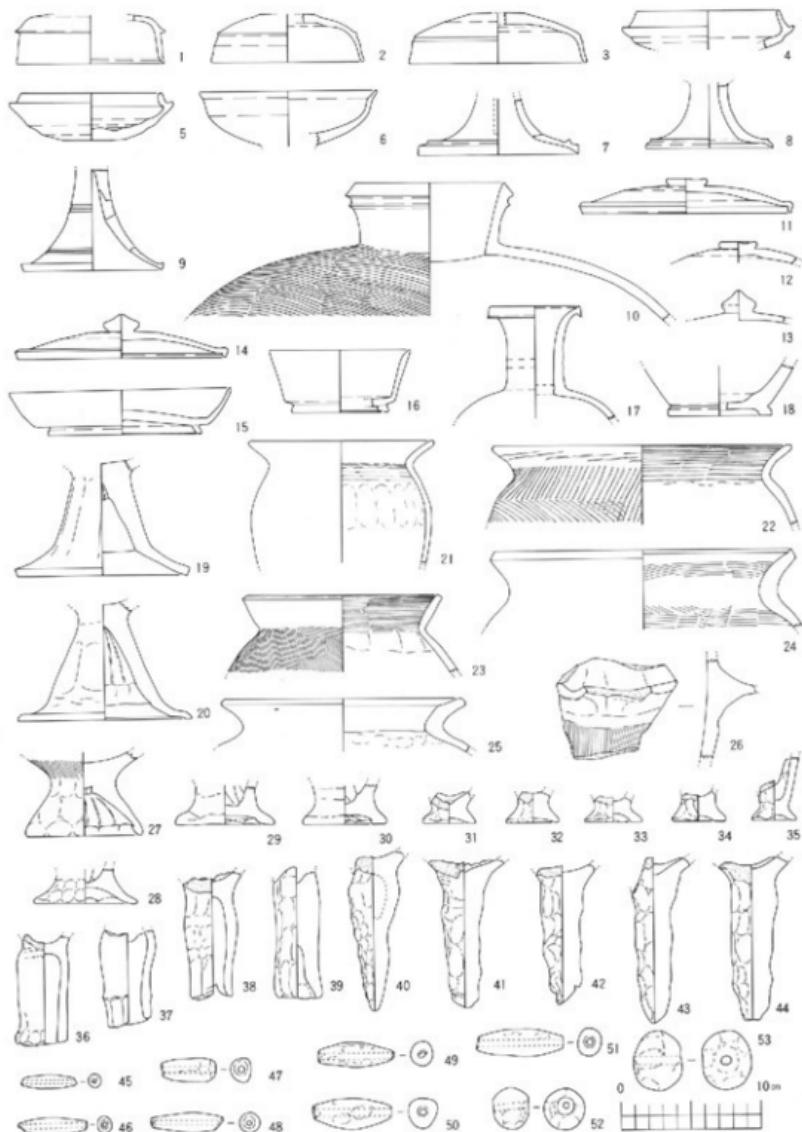


松崎貝塚10区10層出土物実測図2

図版 12

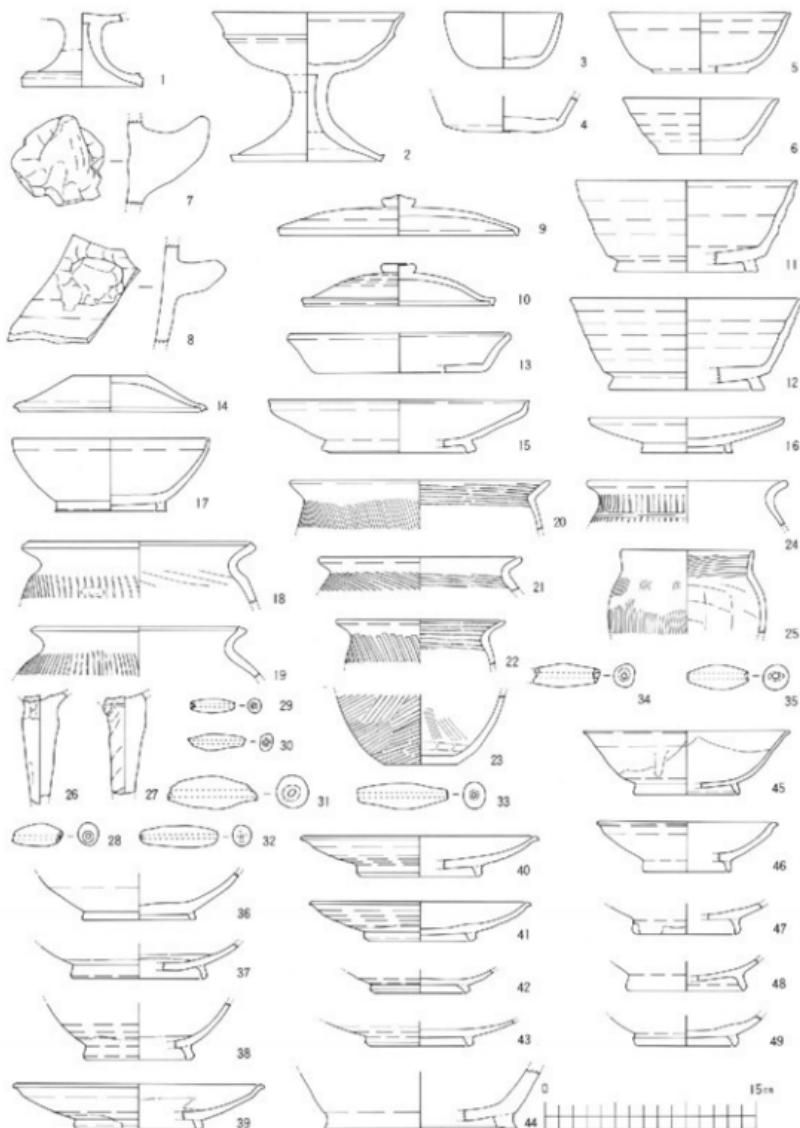


松崎貝塚 10 層出土および各所採集品実測図

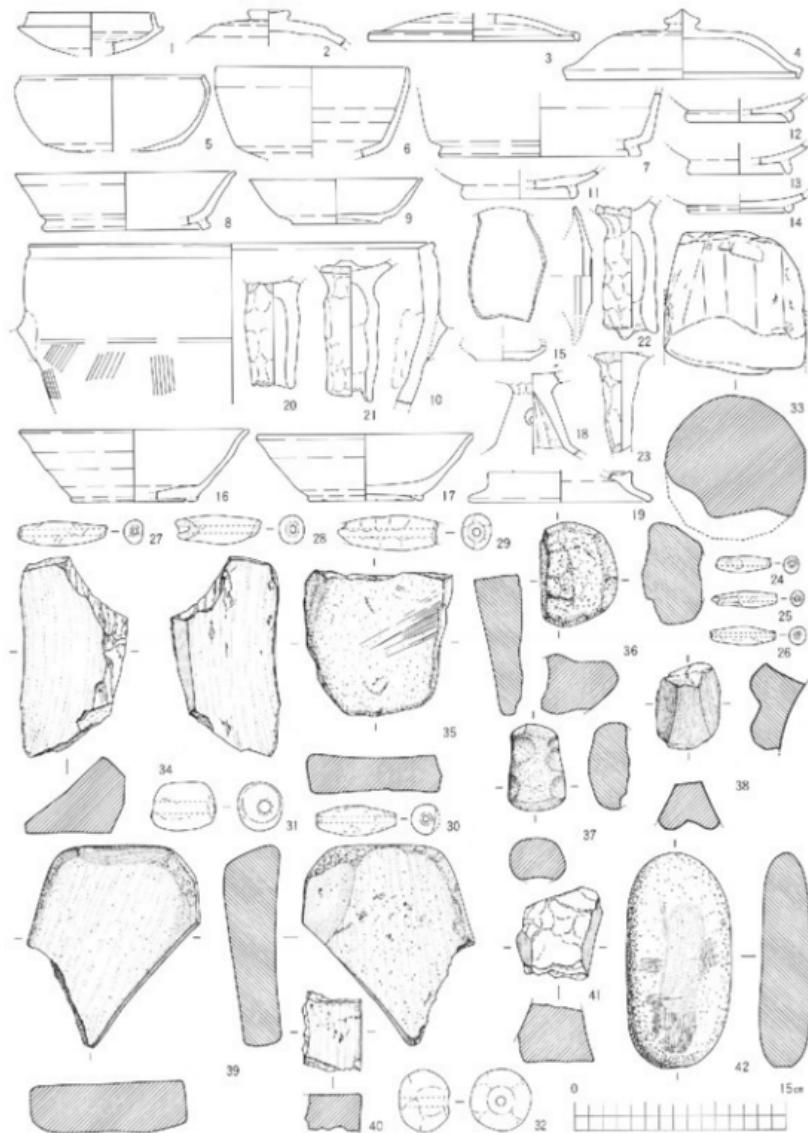


松崎貝塚Ⅱ区 9層出土遺物実測図

図版 14

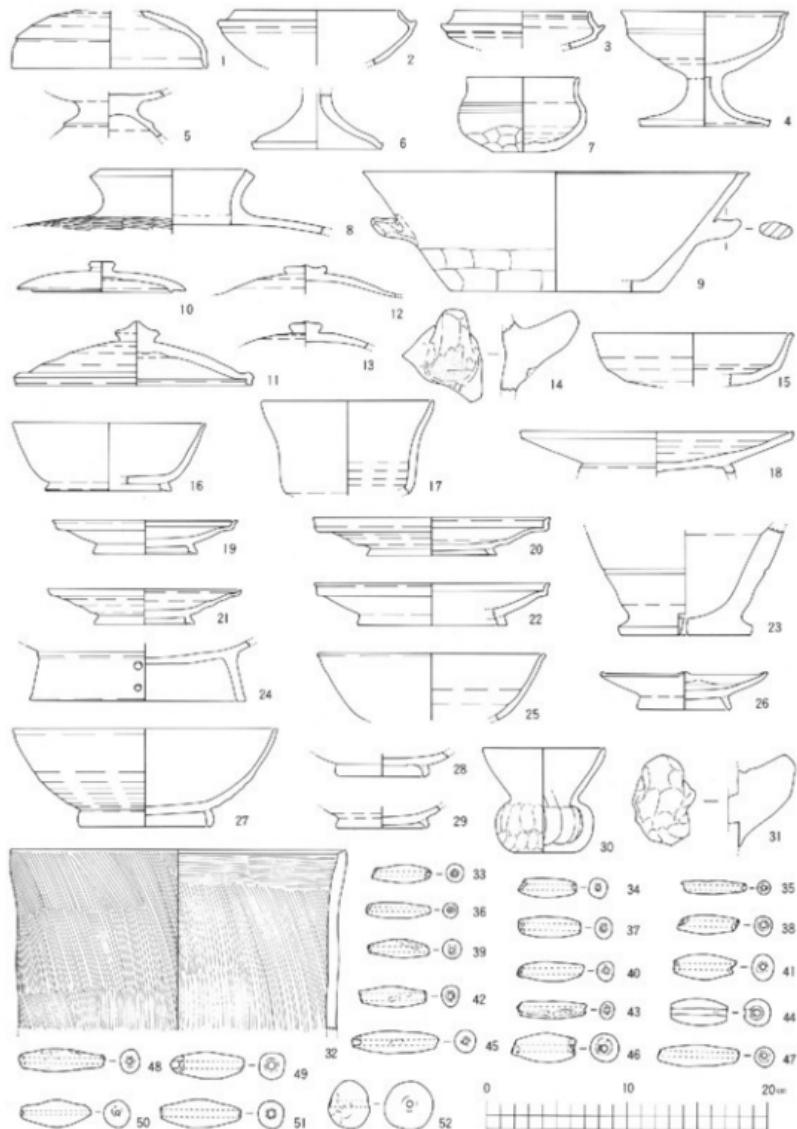


松崎貝塚Ⅶ区 8層出土遺物実測図

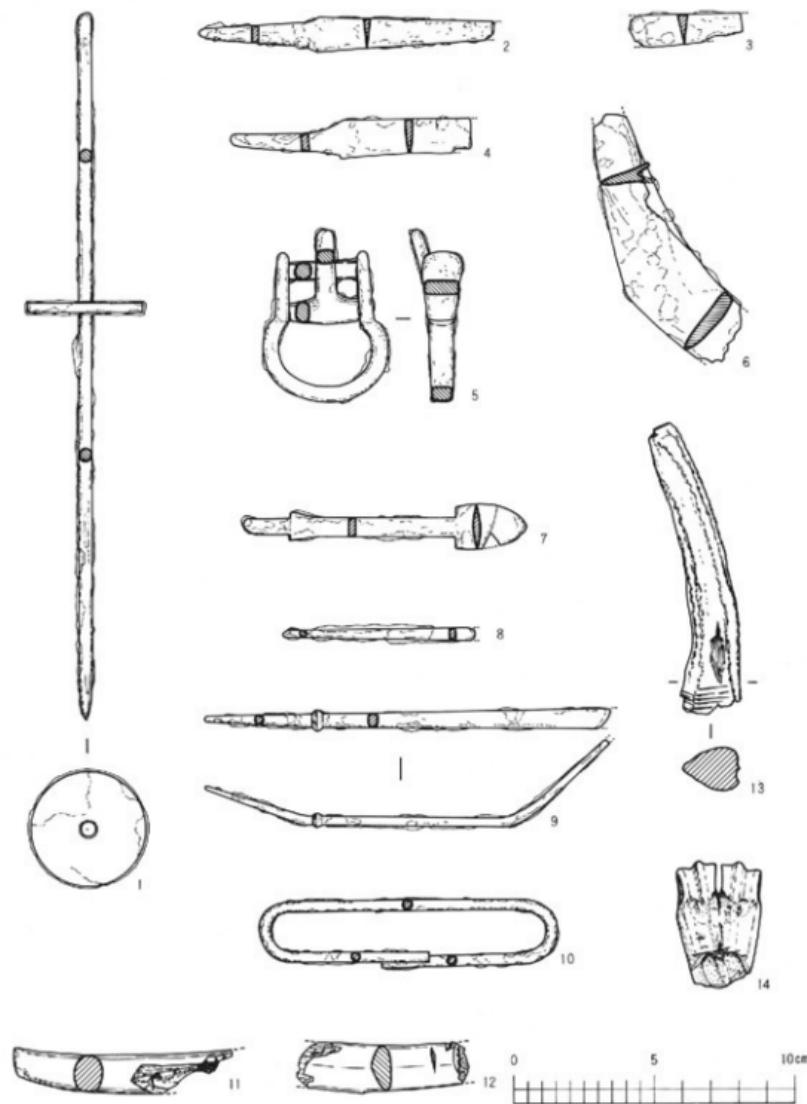


松崎貝塚 3層出土遺物および石器類実測図

図版 16



松崎貝塚 2層出土遺物実測図

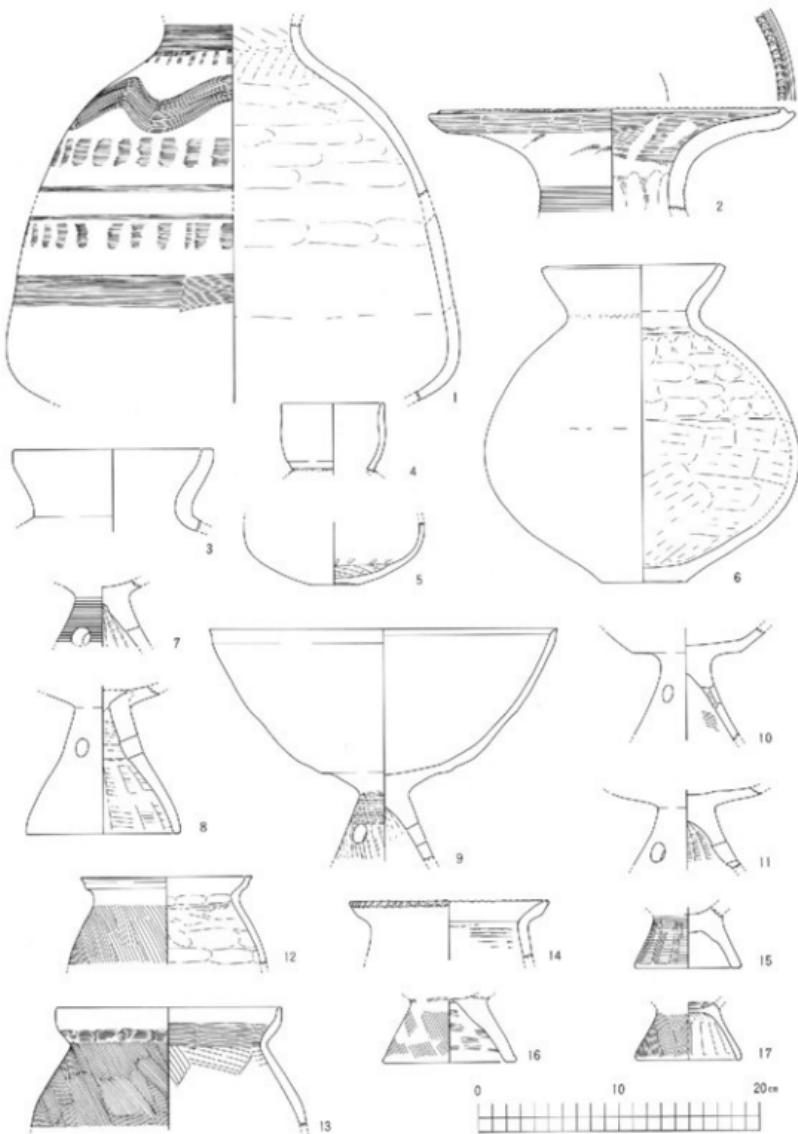


松崎貝塚出土鐵器・骨角器実測図

図版 18

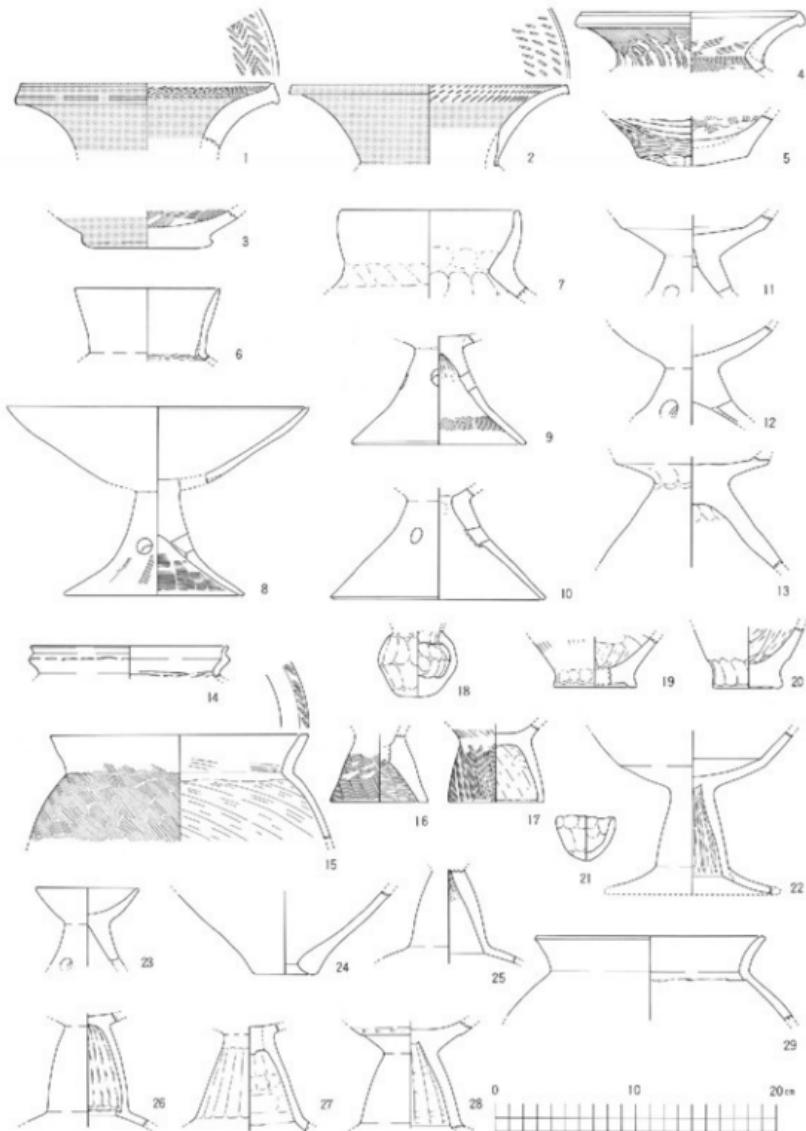


塚森遺跡地形図（1～4はボーリング地点）

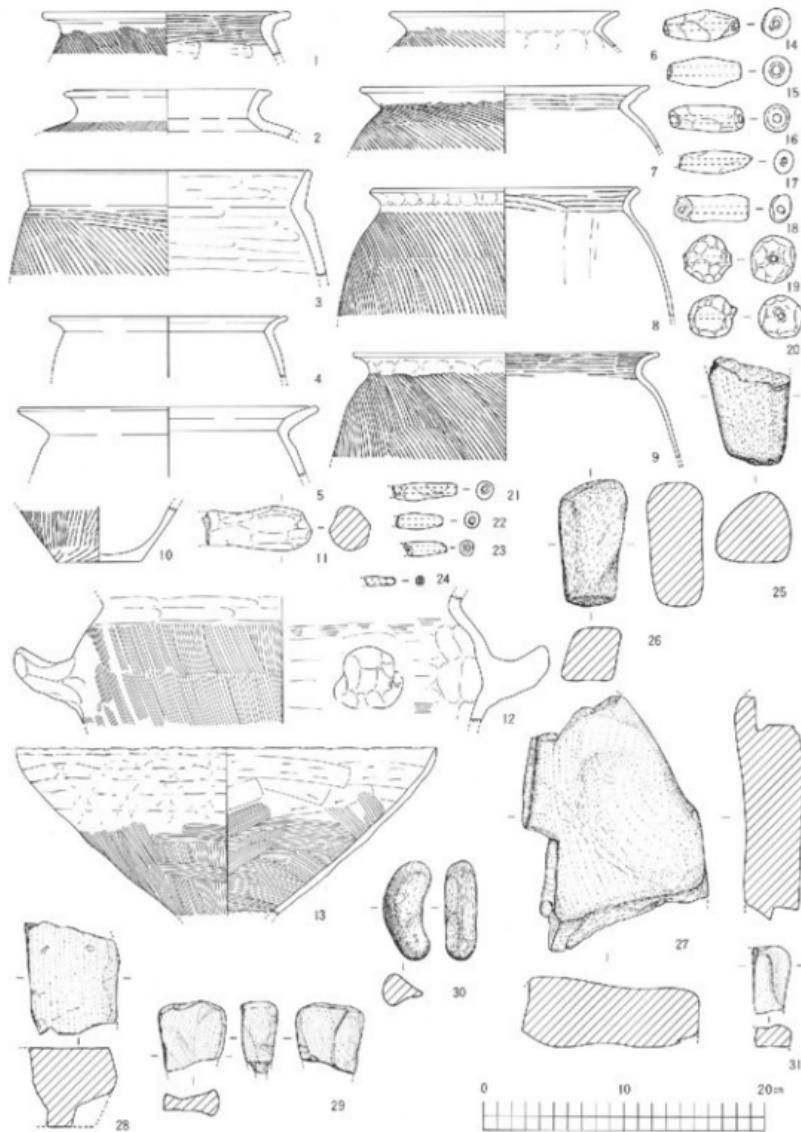


塙森遺跡出土弥生土器実測図

図版 20

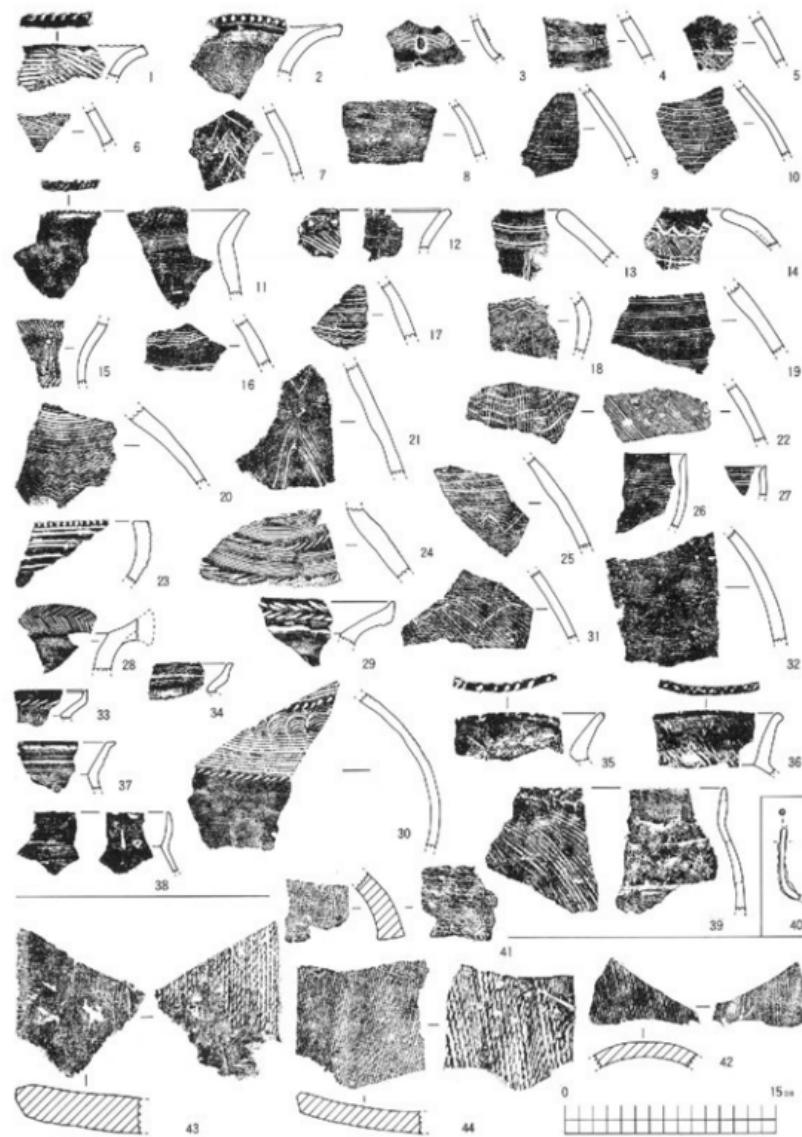


塚森遺跡出土弥生土器・土師器実測図

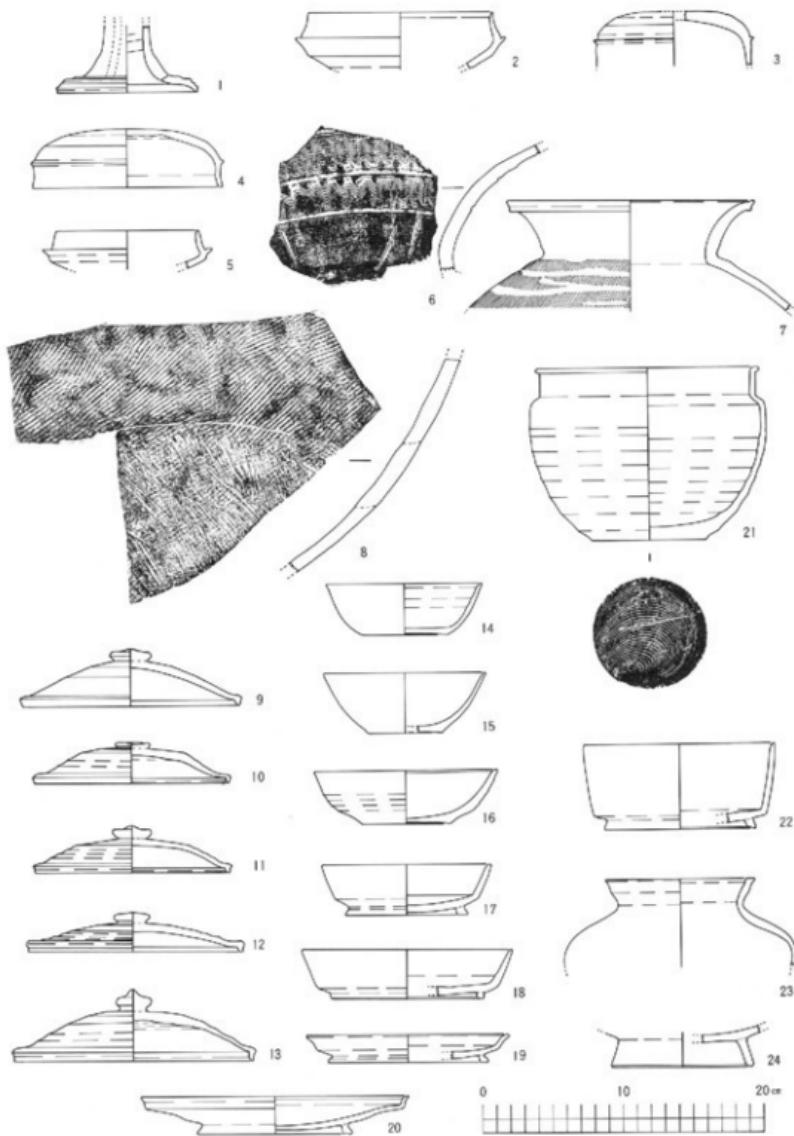


塚森遺跡出土土師器・土錐・石器実測図

図版 22

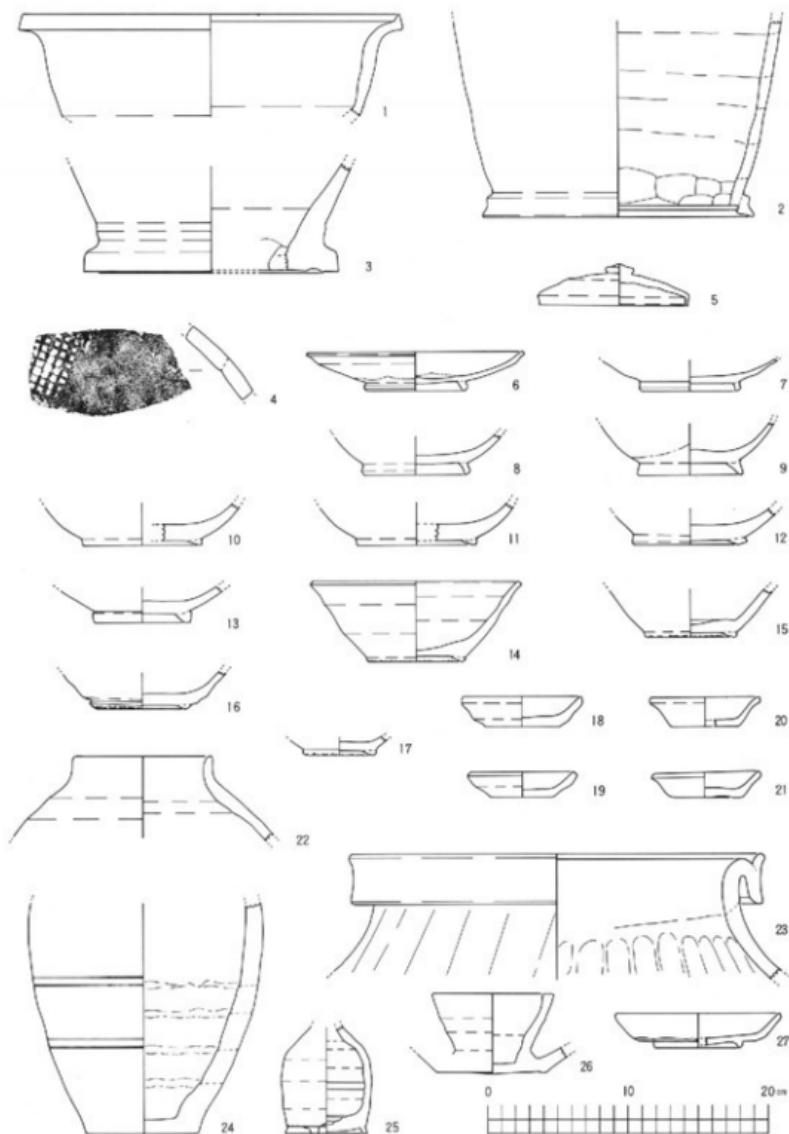


塚森遺跡出土赤土器・土師器・瓦拓影および釣針実測図

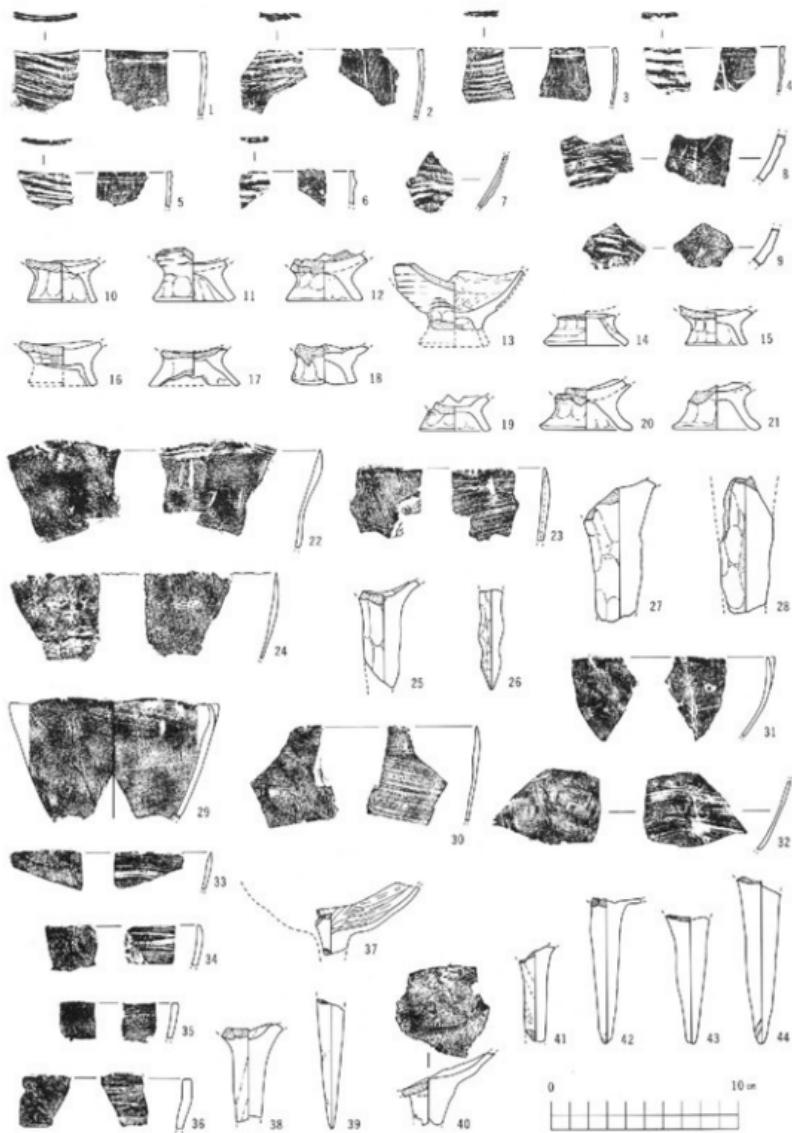


塚森遺跡出土須恵器実測図

図版 24



塚森遺跡出土須恵器・灰釉陶器等実測図

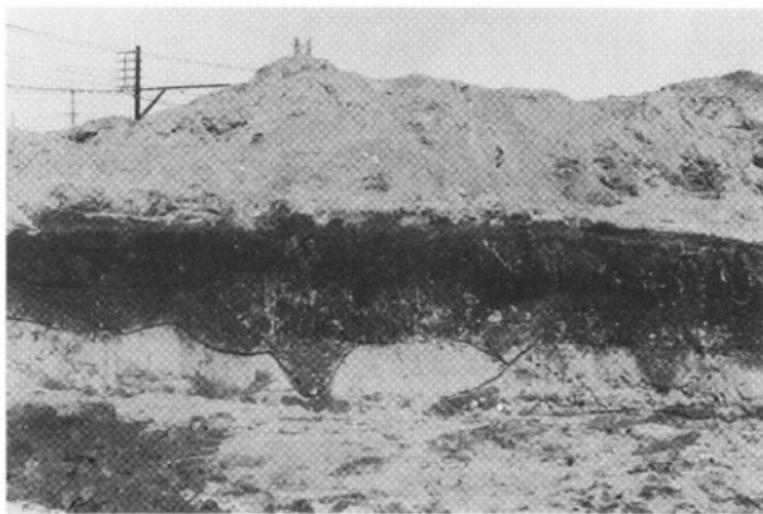


深森遺跡出土製塙土器実測図および拓影

図版 26



松崎貝塚現況



VII区北壁土層状況

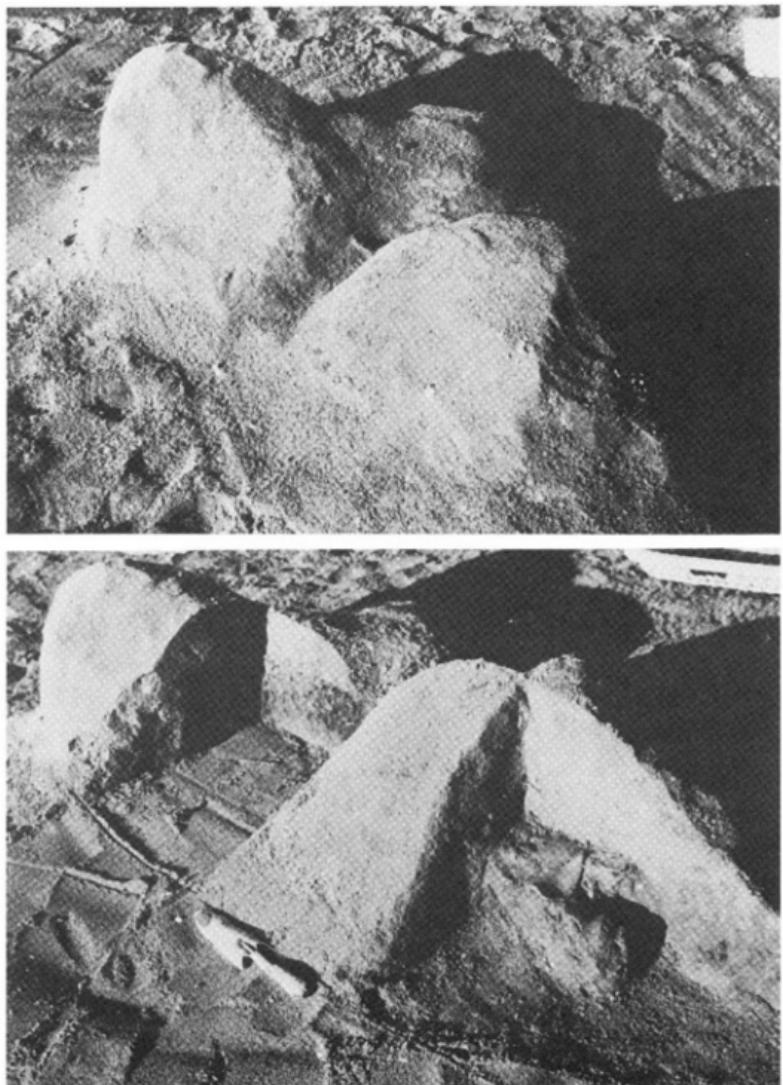


松崎貝塚VI区南壁土層状況

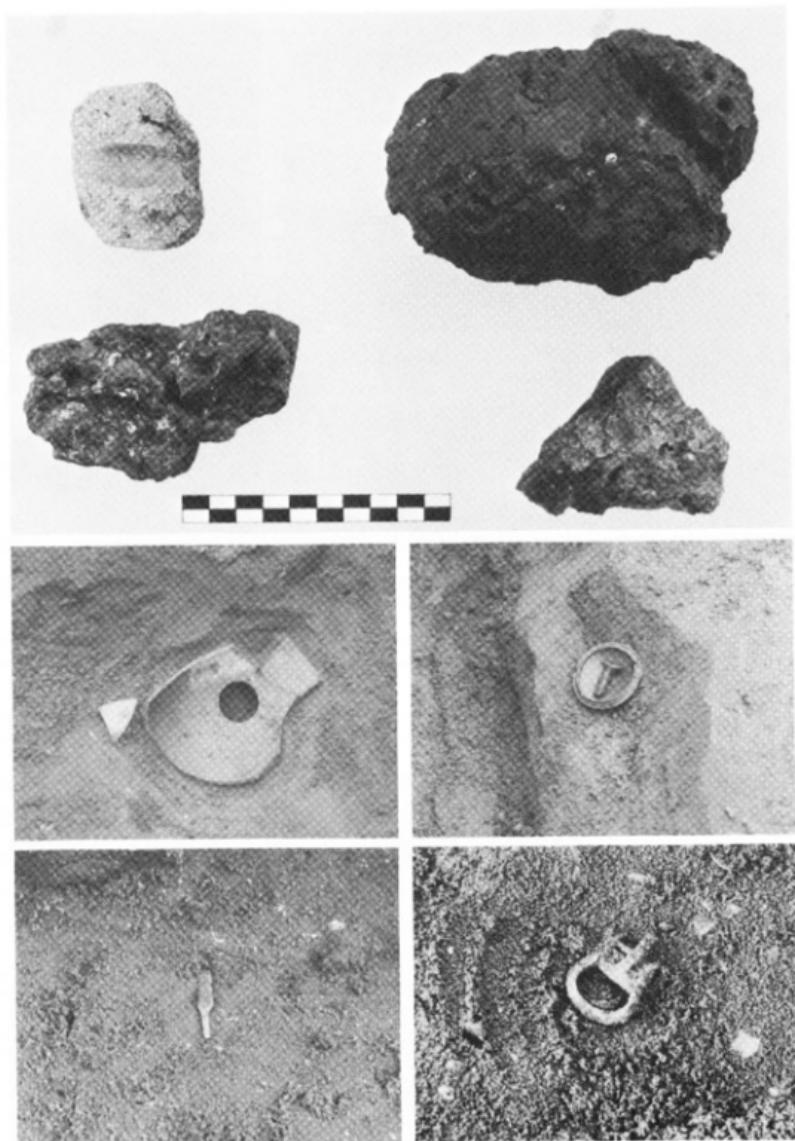


VI-1遺構断面

図版 28

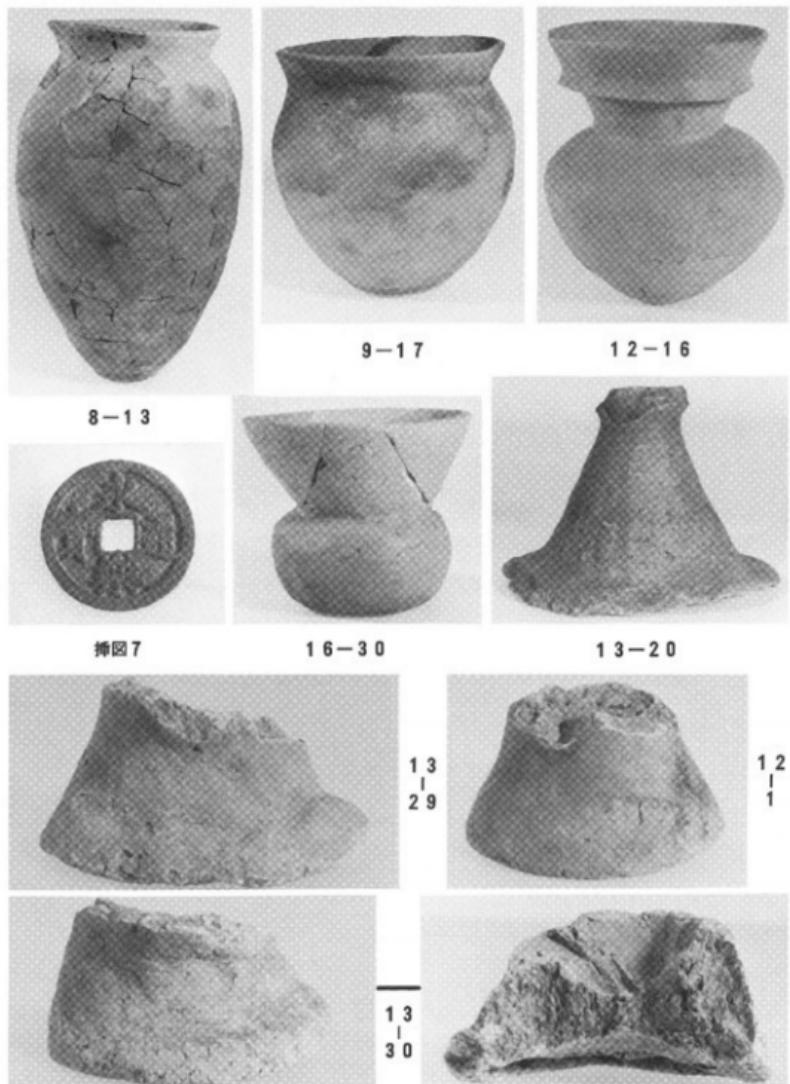


松崎貝塚VII-2 遺構(下)断面



松崎貝塚(上)轍の口と鉄塊および遺物出土状態

図版 30



松崎貝塚出土土師器および貨幣



14
—
2



8
—
8



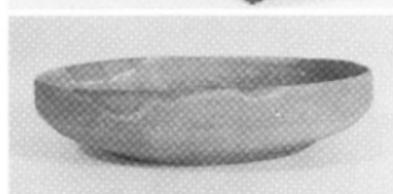
16
—
4



5
—
11



13-10 8-6



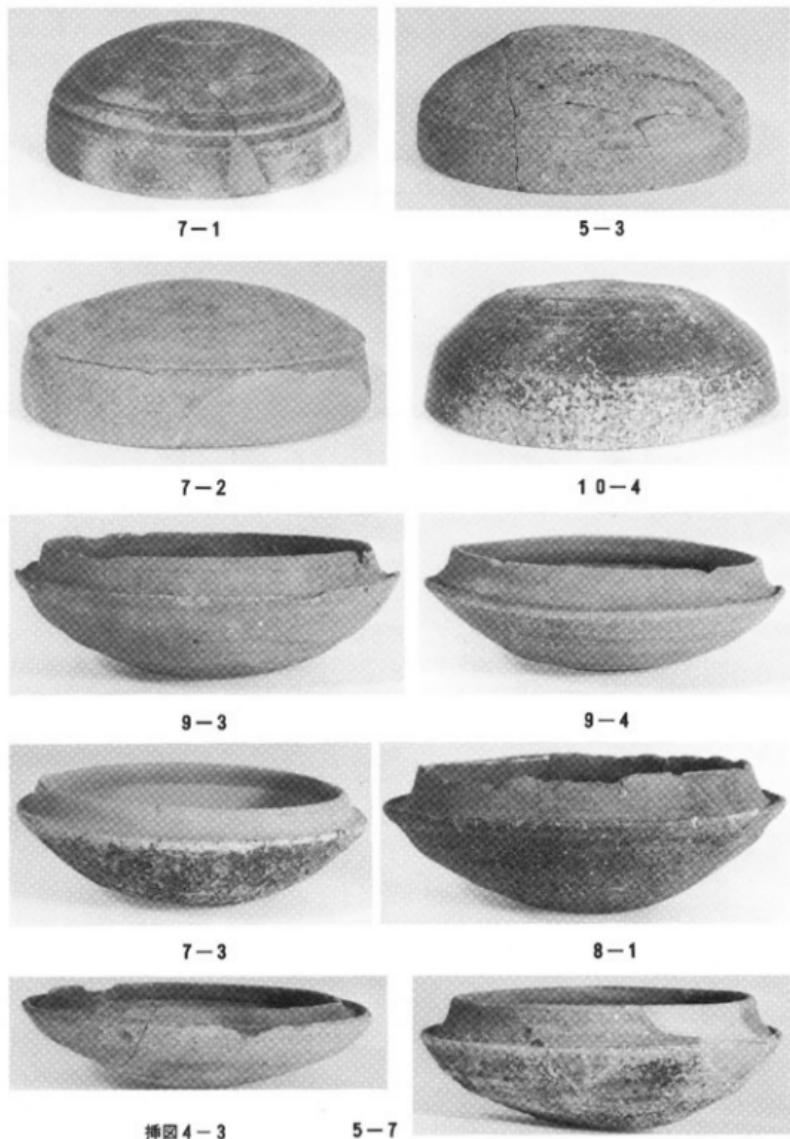
5-29



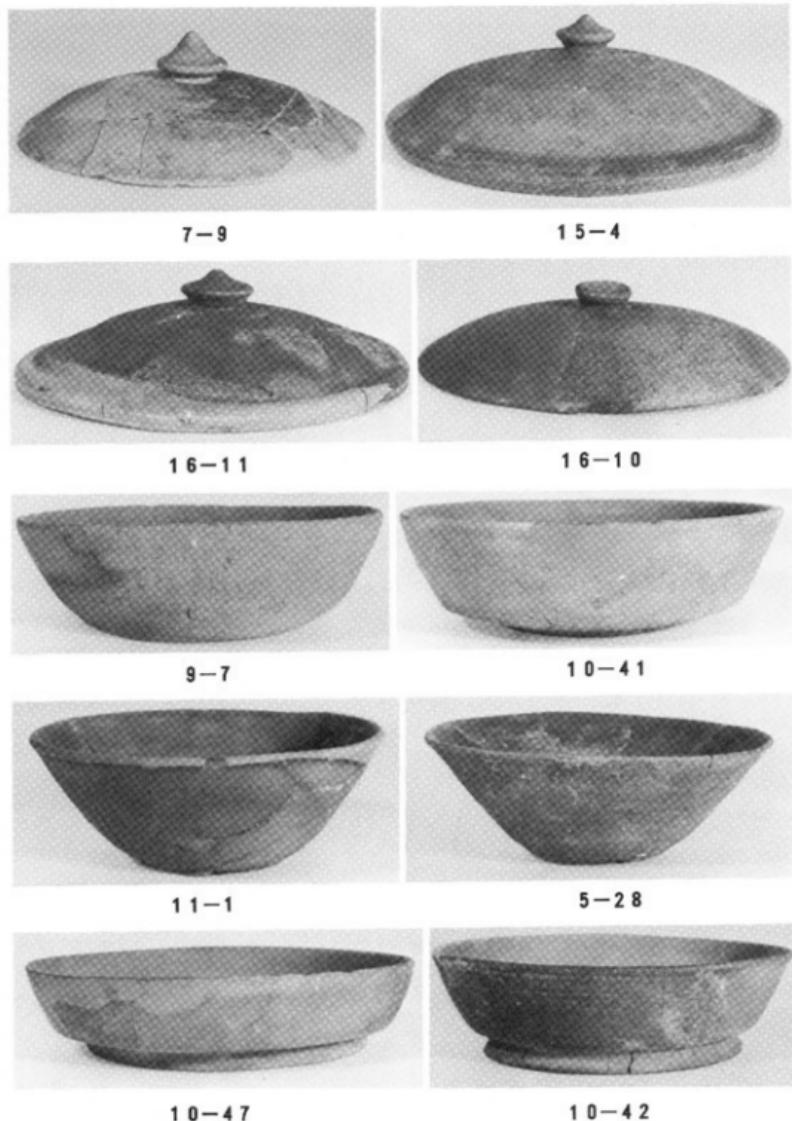
14-17

松崎貝塚出土須恵器(高坏等)

図版 32

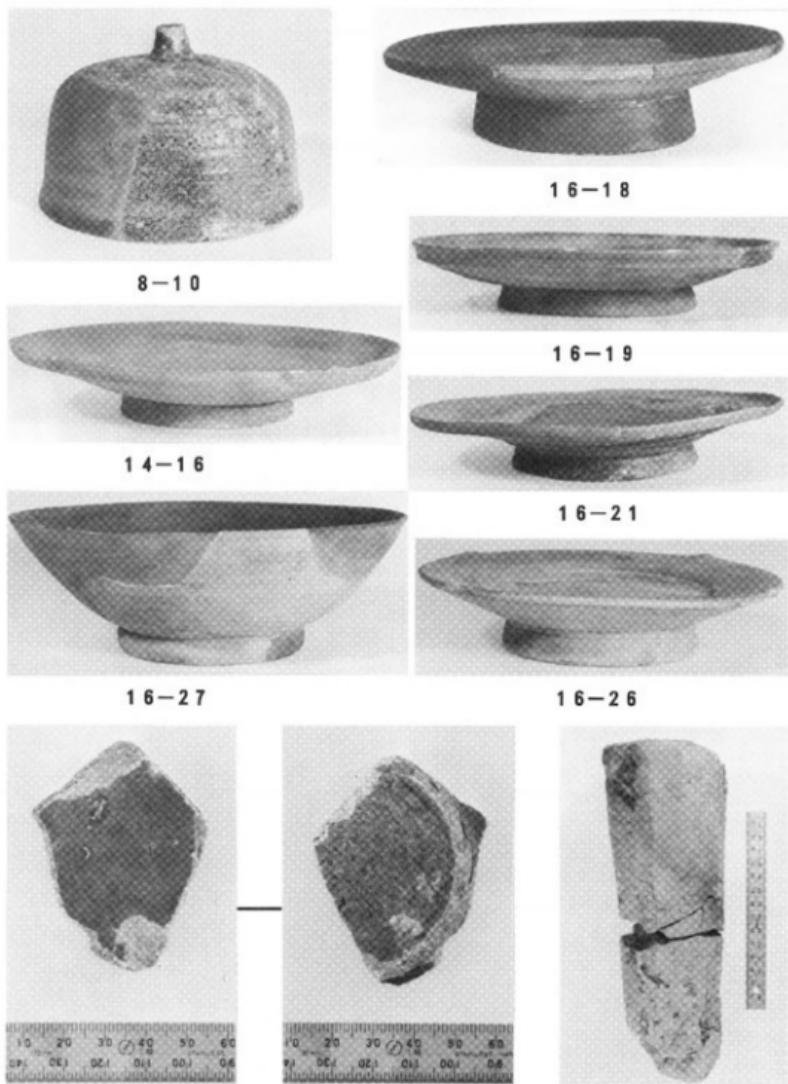


松崎貝塚出土須恵器（蓋坏）



松崎貝塚出土須恵器（蓋・壺）

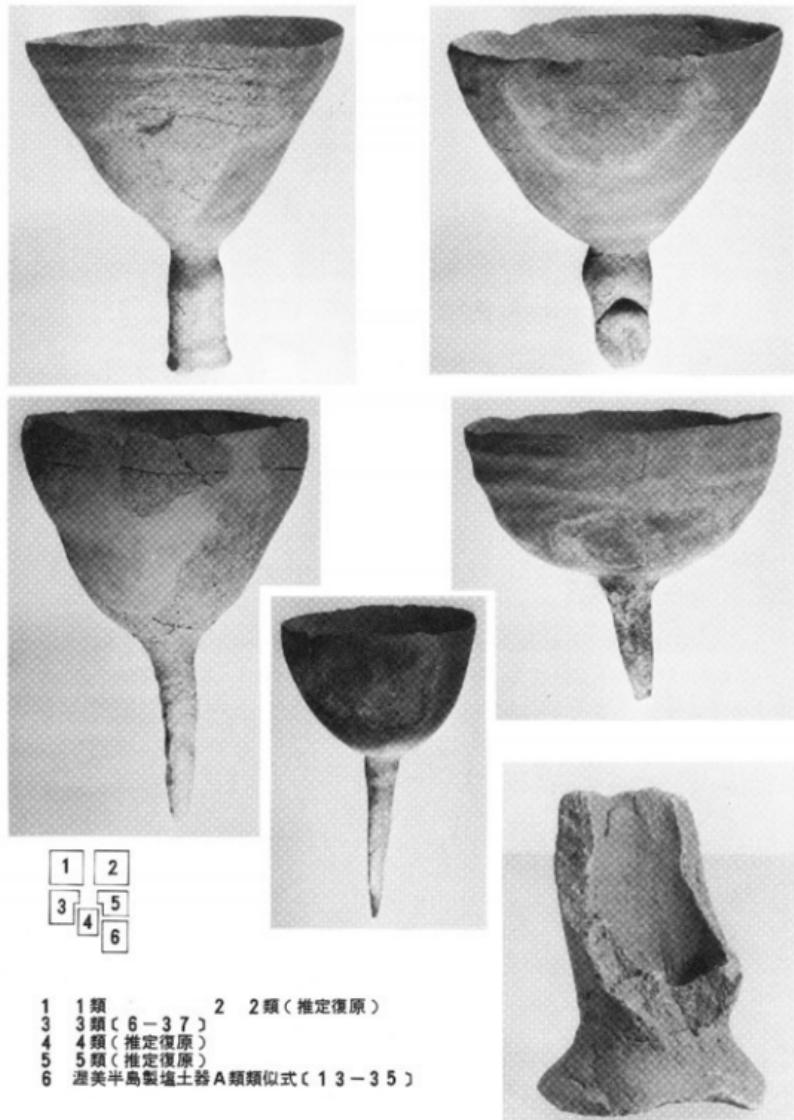
図版 34



縄釉陶器

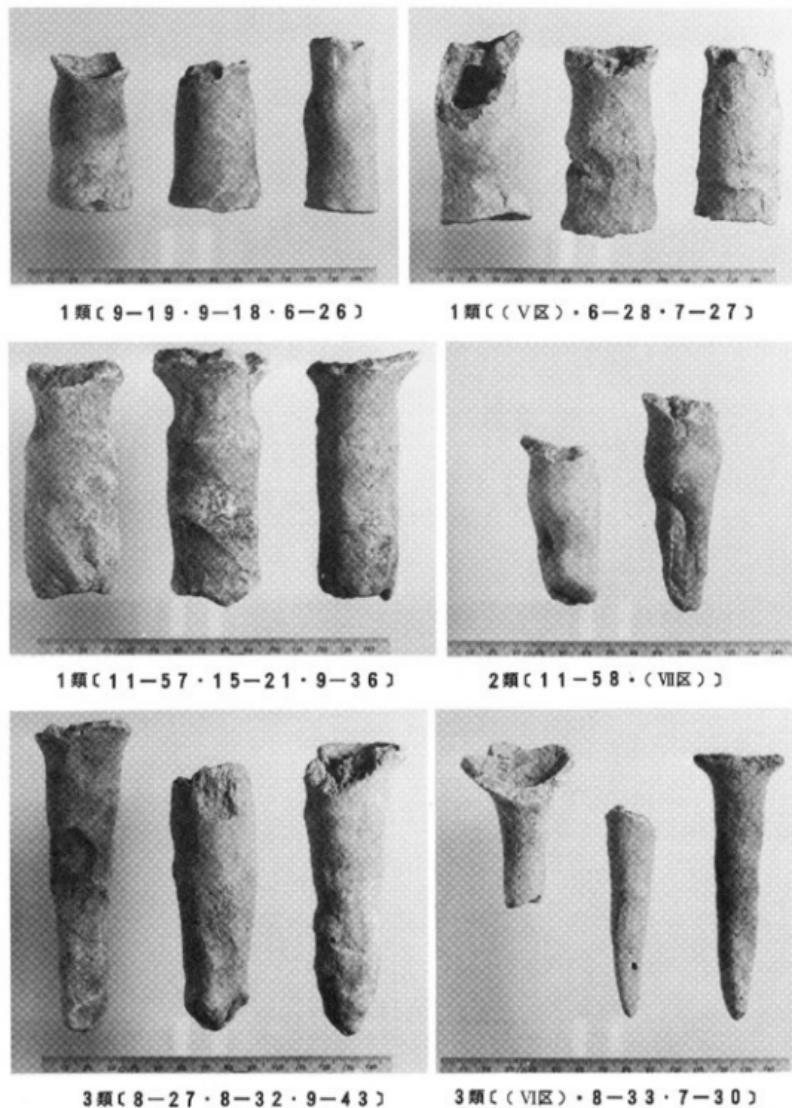
挿図 5-1

松崎貝塚出土須恵器(盤等)・灰釉陶器等

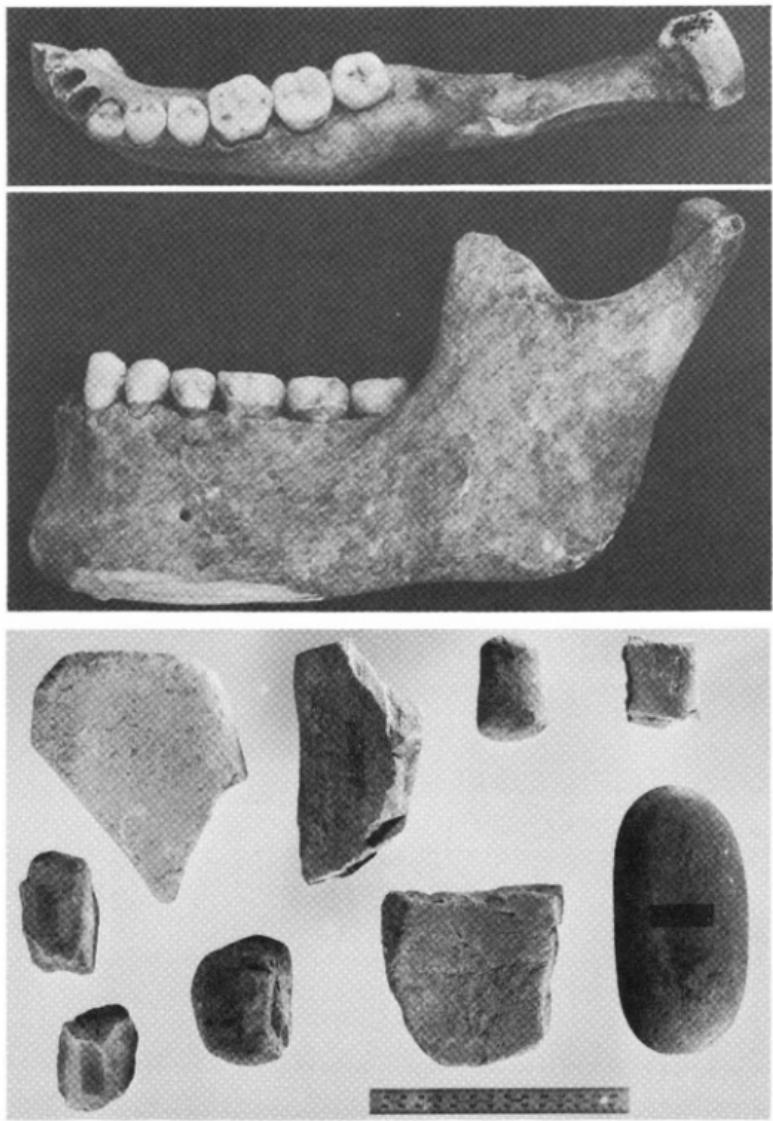


松崎貝塚出土製塙土器各類

図版 36



松崎貝塚出土埴土器各類台脚



松崎貝塚出土人骨下顎骨：上面観・側面観（下）石器

図版 38



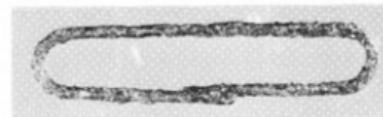
17-2



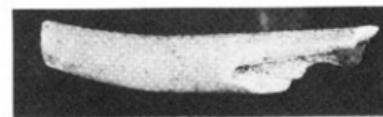
17-4



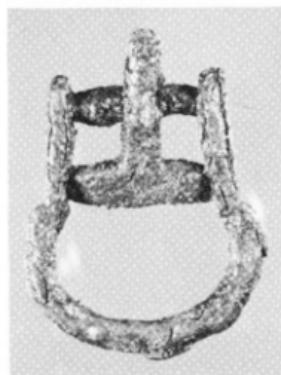
17-7



17-10



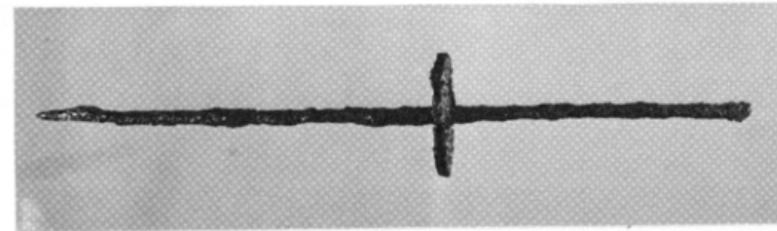
17-11



17-5

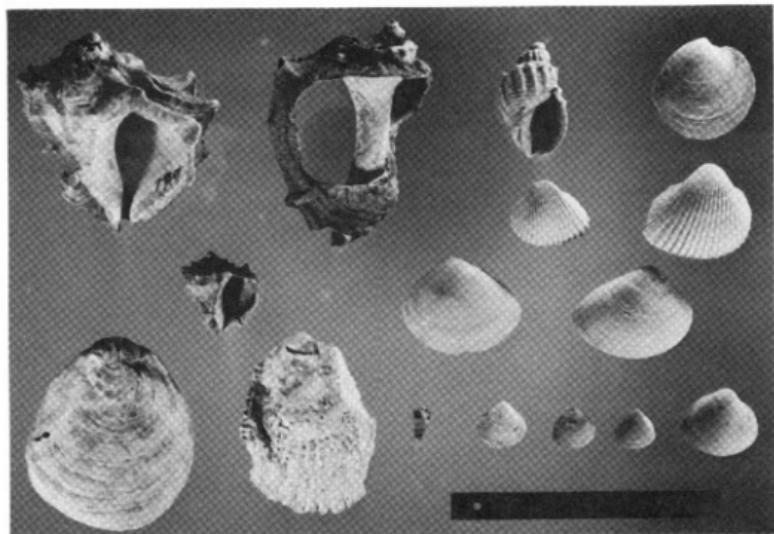


17-6



17-1

松崎貝塚出土鉄器および骨角器



松崎貝塚出土貝類

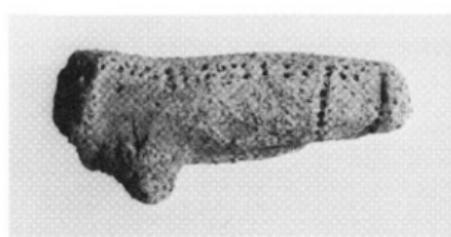


獸骨類

図版 40



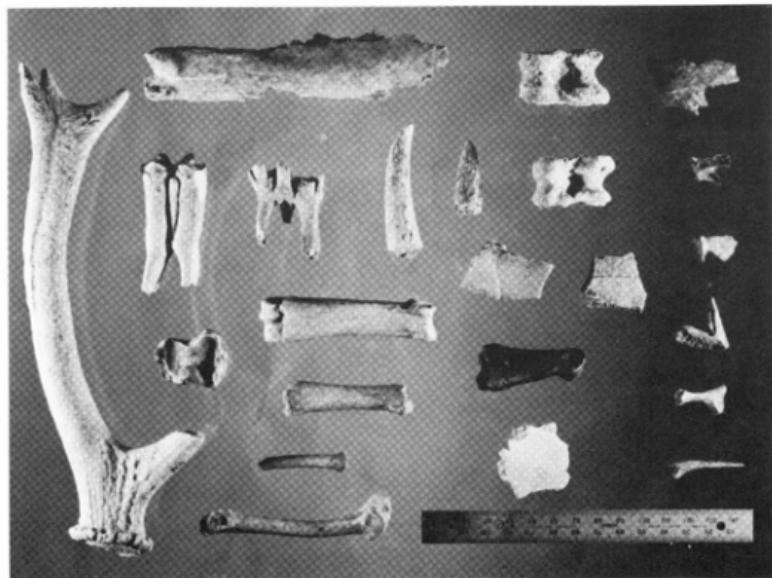
塚森遺跡出土縄文土器(拵図12)



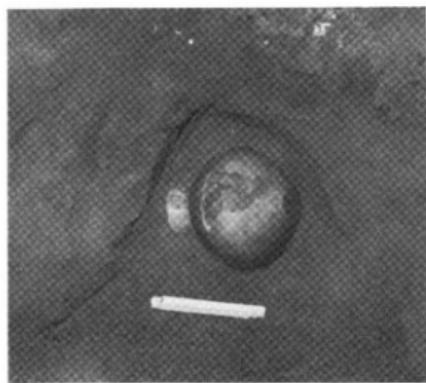
土偶(拵図12-12)



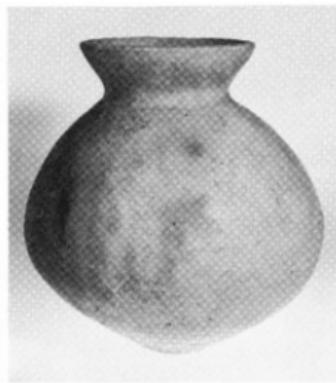
鉤針(22-40)



塚森遺跡出土獸骨類

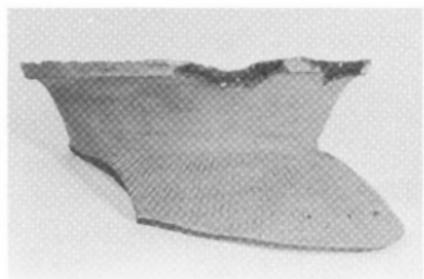


塚森遺跡・壺形土器出土状態



壺形土器(19-6)

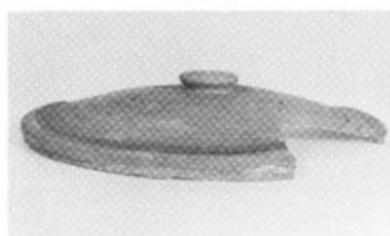
図版 42



23-7



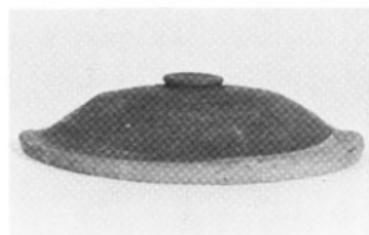
23-21



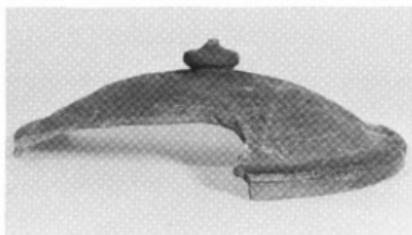
23-12



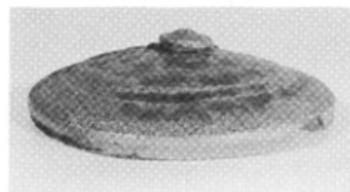
23-16



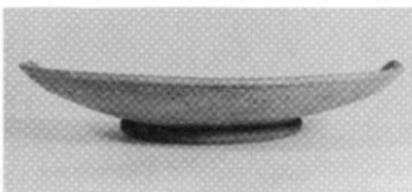
23-10



23-13

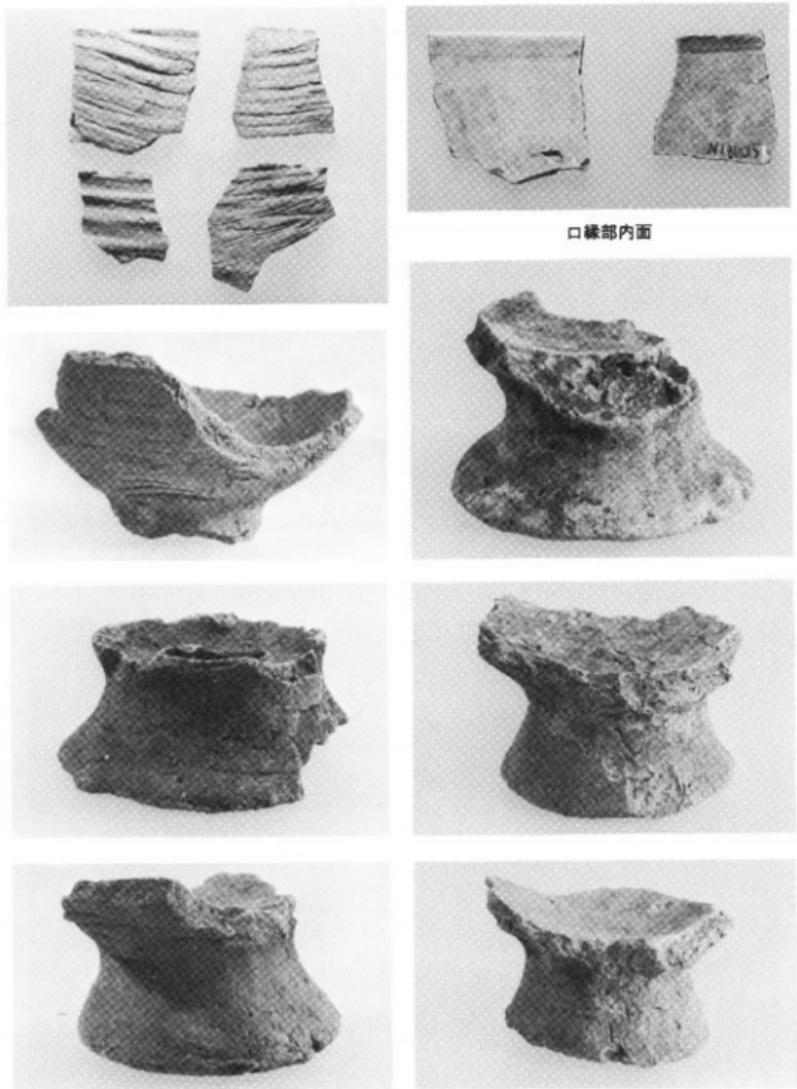


24-5



24-6

塚森遺跡出土須恵器・灰釉陶器



塚森遺跡出土製塩土器（塚森式）

図版 44



塚森遺跡出土石器



貝類

愛知県東海市松崎貝塚第2次発掘調査報告書

昭和59年 7月 31日 発行

編集・発行 東海市教育委員会

〒476 愛知県東海市中央町一丁目1番地

電話〈0560〉68-2211(代)

〈0562〉88-1111(代)

印刷 株式会社中部マイクロセンター

